

FANTASY REALIST



The title "FANTASY REALIST" is rendered in a bold, black, serif font. A sword hilt is positioned vertically between the words "FANTASY" and "REALIST", with the blade pointing downwards. Below the text is a solid black horizontal line. Underneath this line are eight gemstones arranged in a row: a red gemstone, a green gemstone, a blue gemstone, a yellow gemstone, and four purple gemstones.

プロローグ

【リアル】

〈お前、なんで生きてんの？〉

暗闇の中で声がした。この部屋には僕以外、誰もいないはずなのに。

ふと見上げると、黒い人影が見えた。窓のふちに、人の形をした影が座っている。

「君は……誰？」

〈お前を殺しに来たんだ〉

「死神？」

〈お前がそう思うなら、きっとそうなんだろうな〉

へえ、本当にいるんだ。そういうの。

「なんで僕を選んだの？」

〈特に理由は無いさ。お前と同じだよ〉

「僕と同じ？」

〈お前だって、特に生きてる理由は無いんだろう？〉

何も言い返せない。その通りだ。

〈一日中、部屋の隅っこで屈んでただけじゃないか〉

「もう……何をやる気にも、なれないんだ」

いつ死んでもいい。いっそ、誰か殺してくれ。

〈それじゃあ、サクッと逝きますか〉

首筋に、冷たいものが触れた。刃物のような、長い爪。

僕は慌てて死神の手首を掴んだ。

「待って」

〈何だよ〉

考えろ。何か理由になるようなことを……そうだ。

「死ぬにしても、いろいろと準備があるんだ。遺品になるものを整理したり、遺書を書いたりしなきゃならないし……今すぐには死ねないよ」

〈ふーん〉

首から爪が離れた。

〈どうしてもって言うなら……そうだな、一ヶ月だけ待ってやろう。今日は一日だから、ちょうど月末までだ。それでどうだ？〉

「一ヶ月か……うん、それでいいよ」

「よし、契約成立だ」

一ヶ月後、僕は死ぬ。それまでの間、後悔の無い人生を、生きよう。

【対話】

「時々わからなくなるんです。ここが、現実なのかどうか」

———どうということ？

「現実にリアリティが無いんです。なんか、フワフワしてて。気が付いたらどこか知らない場所にいたり、ちょっと前の記憶が思い出せなかったり、自分が自分でないような気がして……」

———ふむ。

「頭がグルグルになって、妄想と現実がゴッチャになる」

———何か気配を感じるとか？

「あります。誰かが後ろにいるんです。黒い影のような……話しかけてくる時もありました」

———なるほど。他に気になったことは？

「なんか、妙にリアルな夢を見たような……」

———どんな夢？

「とある勇者が、仲間たちと旅をする夢です。ゲームみたいな、剣と魔法のファンタジー」

———それは気になるね。

「夢が……ですか？」

———夢は無意識の欲望だと言われてるから。自分の過去の記憶、特に自分が忘れたい、認めたくないような想いが、何らかの形に姿を変えて表れる。夢の中に、君の心を探るヒントが隠されているかもしれない。いつ頃見たの？

「最近です」

———それまでは見てなかった？

「さあ……夢は見てたと思うんですけど……ん？」

———何か思い出した？

「幼い頃、よく妄想をして遊んでました。ゲームみたいな物語を、ノートに書いて。嫌なことがあるたびに、その世界へ逃げこんでました。夢で見た世界は、その時のものに、すごく似てる」

———その妄想は、いつ頃まで続けていたの？

「うーん。いつまでだったかなあ……いつの間にか卒業してました。ノートも無くなっちゃったし……」

———ノートを無くしてしまった。

「そうだ！ 最近そのノートを見つけたんです。自分のものを、整理してた時に」

———もしかしたら関係があるのかも。

「なんか……怖い」

———それじゃあ、一つ一つ、思い出していこう。

見渡す限りの世界がある。

その星を覆う広大な海には、いくつかの大陸と、無数の島々が浮かんでいた。大地では、竜の背骨のごとく連なった山々が旅人たちの行く手を阻み、凶悪な怪物の潜む森や洞窟が、じっと餌を待ちわびていた。

世界は静寂を知らなかった。

どこからともなく現れる心悪しき者たちが、闇の軍勢を引き連れ、光の世界への侵攻を続けていたのだ。

彼らの野望を阻止すべく、選ばれし四人の子供たちは、終わりなき戦いに身を投じていた。

《勇者イグニス》

燃えるような赤い髪を靡かせ、将来を期待されている王子。父も同じく勇者であったが、魔王討伐の旅に出たきり行方不明である。彼はパーティーの司令塔であり、エースでもあった。

《盗賊ヴェントス》

彼もまた由緒正しき王家の末裔であるが、父の代から没落し、今は盗賊をしている。戦いでは勇者の頼もしい相棒を務めるが、少々気の抜けたところがある。

《僧侶アクア》

同じく王家の末裔。騎士学校で勇者にスカウトされた、ショートカットの美少女。仲間の前では敬語を使っているが、勇者と二人きりになると口調が変わる。

《魔導士テラ》

一国の王女でありながら、類稀なる魔法の才を授かり、一流の魔導士として名を馳せている。普段は勇者である兄のことが大好きで仕方のない、明るい妹だ。

人々は彼らの功績を称え、彼らこそが予言に伝え聞く光の勇者たちであると確信していた。彼らの獅子奮迅の活躍ゆえ、世界は紙一重で終焉を免れていた。

しかし気を許してはならない。再び、世界の支配を目論む、新たな魔王が現れたのだ。

光の勇者たちは、目の前に立ち塞がる強敵を幾度となく薙ぎ払い、塔の頂上で待ち構える魔王の元へと辿り着いた。

「ファ、ファ、ファ。待っていたぞ、光の勇者たちよ。よくぞここまで来たな。お前たちに魔物の本当の恐ろしさを思い知らせてくれるわ」

「変わり映えしねえよなあ、魔王のセリフって。もっと何かねえの？」

盗賊は呆れ顔で言った。

「ツノ生えてるの久しぶりー。ツノ、ツノー」

魔導士がそれに続く。

「皆さん、油断は禁物ですよ。イグニス様、指示を」

僧侶は勇者に視線を送った。

「アクア、いつもの」

「承知しました。『マイティガード』」

全員の物理防御、魔法防御が強化され、体が宙に浮いた。

「っしゅあ！　いくぜえ！」

盗賊は両手に短剣を構え、空中を飛び跳ねながら、敵の背後へと回りこむ。

「にとりゅう『みだれうち』」

一陣の風が吹き抜けるかのように、八連続攻撃が敵の全身を斬り裂いていく。

盗賊は自慢気な顔で振り返った。

「へへっ、どんなもんだい」

「ヴェントス、後ろ」

遠隔操作された拳が、盗賊に襲いかかる。

「うおっー」

盗賊は直撃を受け、吹き飛ばされていった。

[ヴェントスは　たおれた。]

「あちゃー、即死だよー」

「仕方ありませんね。『アレイズ』」

僧侶から魔法の光を浴び、盗賊は何事も無かったかのように起き上がった。

「わりい、アクア……あっ、テラ！　そっちいった！」

「えっ？」

魔導士の視界の外から、拳が迫っていた。すかさず勇者が庇いに入る。

「『まもり』」

魔導士に向けられた攻撃は、勇者の剣によって受け止められた。

「さんきゅー、お兄ちゃん。じゃあ、いっくよー『れんぞくま』『クイック』」

時が止まる。

「かーらーのー『メテオ』『メテオ』『メテオ』『メテオ』『メテオ』」

上空から煌々と煮えたぎる流星群が出現し、魔王へと一斉に降り注いだ。爆発音が響く。

「『しらべる』」

僧侶の杖が光を放ち、よろめく魔王を照らしだす。

「残りHPが1万を切ったようです」

「トドメだな『ひっさつ』」

勇者は駆けだし、剣を掲げ、天高く舞い上がった。

「『エレメントアタック』！」

剣先が魔王の胸元を捕らえる。

[9999]

「ウボァァァァ！！」

魔王は倒れた。

どこからともなく勝利のファンファーレが鳴りわたり、四人は勝利のポーズを決めた。

魔王が消え去った場所に、一冊の本が落ちている。勇者がそれを拾い上げ、中を開いた。

「なんだこれ」

「どうやら古代文字のようですね」

僧侶は横から覗きこみ、眼鏡を取り出して掛けた。

「『これらの本を六冊集めた者は、平和に導く指導者として大いなる力が授けられる』と書かれています」

「あっ、オレ、それと似たようなやつ持ってるぜ」

盗賊は、道具袋の中に手を突っ込んだ。

「だいぶ前にダンジョンで見つけたんだけど、使い道がわかんなかったんだよなあ。ほらよっ」

五冊の本が勇者の手元に渡った瞬間、それらから光が溢れだした。

「なにになー！ どうなっちゃうのお？」

魔導士は目を輝かせた。

六冊の本は、勇者の手から離れて舞い上がり、彼の周りを旋回していく。やがて勇者の体は宙に浮き、光の中へと埋もれていった。

三人はあまりの眩しさに、思わず目をつむった。そして次に彼らが目を開けた時、そこから勇者の姿は消えていた。

「お兄ちゃん？ ……お兄ちゃん！！」

「おいおい、どうなってんだよ！ 俺のせいだよ！？」

「皆さん、落ち着いてください。まずは女王様の元へ、報告に上がりましょう」

三人は急ぎ、女王の待つ城へと帰還した。

息を切らせながら城内へ走りこんできた彼らの姿に、女王は目を見開いた。

「いったい、どうしたというのですか」

「あのねっ！ あのねっ！」 「イ、イ、イグニスだ！！」

僧侶は動揺する二人を制し、事の次第を女王に報告した。

「……そうですか」

「どおしよおおお！ お兄ちゃん、いなくなっちゃったあ！！」

魔導士は大きな瞳いっぱい涙を溜め、女王の膝元に屈みこんだ。

「おそらく、勇者は他の世界から呼ばれたために、この世界を旅立ったのでしょう」

「もう会えなくなっちゃうのお！？ そんなのヤダよお！！」

「しっかりなさい。あなたの兄上は、必ず帰ってきます。王子は予言に記された、光の勇者なのですから。いつか、この世界に本当の闇が訪れた時、勇者は帰ってきます……必ず」

第一章

【リアル】

外出時には細心の注意を払わねばならない。いつ、どこで、何に襲われるか、わからない。

マスク着けた。財布持った。ニット帽かぶった。マフラー巻いた。

深夜二時、家の玄関口。覗き穴から周囲の状況を確認。進路クリア。

ドアを開け、外に出る。少し肌寒いが大丈夫だ。ジャージを二重に着こんでる。再び周囲の状況を確認。敵らしきものは見当たらない。

ミッション開始。目標は十時の方向、約100メートル先のコンビニ。目的は食糧調達。目的達成後は速やかに帰還する。

可能な限りの早足で歩く。角を曲がる時には出会い頭に注意する。無事、コンビニまで到着。幸運にも店内に敵はいないようだ。

カゴを取り、店の左奥へと移動、インスタント食品を片っ端から放りこむ。その後、右手の冷蔵庫まで移動し、置いてあるだけのゼリー飲料を投げ入れる。後ろを振り返り、奥から男の店員が出てきたことを確認し、レジまで進む。ここまでは大丈夫。ここから先が“本番”だ。

店員が声をかけてきたら、出来る限りジェスチャーで対応する。YESなら首を縦に振り、NOなら首を横に振る。数を聞かれた場合、指で答える。どうしても声を出す必要に迫られたときは厳重に注意する。しばらく人と会話をしていないため、どんな声が飛び出すかわからない。音程のズレや、ボリュームの調整に不安が残る。そういえば部屋を出る前、発声練習をしておこなった。

けど、今日の買い出しなら大丈夫。温められるものは入ってない。

店員が最後の商品を袋に入れた。

「3840円です」

助かった。想定範囲内だ。あとはお金を払ってレジ袋をしっかりと掴み、決して慌てず、店を出ることに集中し――

無い。あるはずのものが無い。入ってない。財布にお金が入ってない。お札が無い。ヤバい。ヤバい！ ヤバい！！

「えのっ、ちょっ……ゴホッ！ ……ウウウン！！ ……ウウウン！！」

「どっ、どうされました？」

「あのっ、ちょ、ちょっと、お金無くなって……おっ、おろしてきてい、い、いいですか！？

すっ、すぐなんですけど！！」

やっぱり変な声が出た！

「ああ、はい、どうぞどうぞ」

店員の視線が胸に突き刺さる。内心では笑ってるんだらうな。

「ニートのゴミクズが何しに来たんだよ」

笑うなって。こっちは精一杯なんだ。

ATMで残高を確認する。そんなに残ってない。もういいや、全部下ろそう。どうせあと一ヶ月の命だ。

お金を下ろし、店員に謝り、お金を支払い、店を出た。

それから小走りで家まで戻り、自室に入ってドアを閉めると、どっと疲れが押し寄せてきた。息が切れ、軽く眩暈がする。全身に嫌な汗をかいていた。

「死ぬかと思った」

ひきこもり歴、一年と三ヶ月。症状は、日に日に悪化している。

〈ダメ人間が〉

真っ暗な部屋の中で声がした。

〈ただコンビニ行ってくるだけだろ？　なんでそんな死にそうになってんだ？〉

死神だ。数日前にコイツと契約をしてから、ずっと付きまとわれている。声は聞こえるが、顔は見えない。でも、間違いなくそこにいるという気配は感じていた。

〈辛いんだったら、今すぐ殺してやってもいいんだぜ？〉

部屋の電気をつける。二本ある蛍光灯の片方は切れており、もう片方は切れかかっていた。

「月末っていう契約でしょ？　もう少し待ってよ。まだいろいろと、やらなきゃいけないことがあるんだ」

まず、持ち物を処分しなければならない。これが思ったよりも大変な作業だった。

押入れの中は、まるで冒険者を待ち受ける洞窟のように深く、無数のアイテムが眠っていた。とりあえず、中の物を外に出す。剣道の竹刀、防具、昔の塾のテキスト、学校の教科書、ゲームの攻略本、バイト情報誌、楽譜、メダルと賞状、前の携帯、ギター、練炭コンロ、先生からの手紙、魔法のステッキ、小さい頃の服、中高の制服、女物の服。この部屋が過去に物置だったこともあり、人の物も数多く混ざっていた。それに、捨て方のわからない物もある。剣道の防具なんて、どうやって捨てるんだ？

手前の物を外に出すと、奥に大きめのダンボール箱を発見した。なぜだか少し胸騒ぎがする。箱は見た目よりも重い。引きずるようにして出した箱の上には、幼い字で《ふーいん》と書かれていた。

ガムテープを剥がし、箱を開ける。ゴチャゴチャとしたガラクタの上に、一冊のノートが乗っかっていた。

「うわあ……懐かしい」

小さい頃に作った妄想ノートだ。表紙には『テイルズオブイース　ファイナルゼルダクエスト』と書かれている。名作ゲームにインスパイアされた一人の子供が、自分を主人公にした物語を作ったんだ。下手くそな字と、下手くそな絵で、思いの丈をぶちまけたものが、そこに描かれていた。タイトルの無意味な長さや安直さには苦笑するしかない。

箱の中には、昔のゲーム機とゲームソフト、タバコの空箱や無数のパチンコ玉のほか、黒いボ

ーリング玉まで入っていた。それを見た瞬間、まるでダムが決壊したかのように記憶が溢れてきた。

「そうだ、この箱は……」

この家に引っ越してくる時に、前の家にあったものを詰めこんだものだ。“あの人”の物も、一緒に封印したんだ。

それらの中でも、強烈に惹きつけられるものがあった。

「うっわ、ドラクエⅢじゃん」

J R P G史に残る、不朽の名作。これはS F C版。失くしたと思ってたけど、こんなところにあったとは。

久しぶりに目にすると、ちょっとだけやりたくなってきた。コードが蔦のように巻きついたスーパーファミを箱から取り出してテレビにセットし、カセットに息を吹きかけ、ソフトを起動する。

オープニングのファンファーレが鳴る。

「懐かしい」

一つだけセーブデータが残っていた。パーティーは勇者オヤジ、戦士カオス、僧侶ヒメ、魔法使いショーコ。攻略はバラモスを倒したところで止まっている。

プレイしだすと止まらなかった。

ドラクエⅢはG B C版の方で何度もプレイしたことがある。攻略ルート、宝箱の隠し場所、ボスの倒し方、全て頭の中に入ってる。

〈お前、朝から晩までゲームしかしてないよな。もっと他に、やりたいこととか無いわけ？〉

「やりたいこと？」

〈だって、お前くらいの歳の間人は学校に行ってるか、働いてるかしてるだろ？ あいつらは人に評価されたくて、頑張ってるわけじゃん。お前には、そういうの無いの？〉

「無いね。学校行ったら不景気だから就職先は見つからないし、働いたって会社の奴隷になるだけだよ。頑張っても頑張っても罵倒されて、人の言いなりになって、使い捨てられて。むしろ頑張ってる人たちの方が謎だよ。なんで平気で生きてられるのか。そんな人生なら、死んだ方がマシ。リアルはクソゲー」

〈何を偉そうに〉

「きっと同じなんだと思う。自分で自分を殺すのか、社会に殺してもらうのか」

〈まっ、お前の人生なんてどうでもいいけど。明日の午前中に用事あるから、早く寝とけよ〉

よし、竜の女王の城まで着いた。この調子なら朝までにクリアできるはず。

鳥のさえずりが聞こえる。

いつの間にか夜が明け、朝になっていた。ゲームは無事クリアしたものの、片づけは一向に進んでいなかった。

シャワーを浴び、歯を磨いて部屋に戻ると、いつものリズムで布団に潜った。が、いつもとは

違い、何者かの力によって布団は剥がされてしまった。

〈おい、起きろ〉

「なんだよ」

〈これからお前は、病院へ行くんだ〉

「なんで？」

〈精神科に行って睡眠薬を貰ってこい。お前を殺すのに必要だからな〉

RPGかよ。

「あのさあ、睡眠薬じゃ死ねないの、知ってる？」

〈知ってるよ。他の方法と組み合わせて使うんだ〉

「えー、面倒なんだけど」

〈まっ、俺は別に構わないんだけどな。お前が苦しみ悶えながら死のうが〉

それは御免だ。どうせ死ぬなら楽に死にたい。何か他の理由を考えないと。

「別に、今日行かなくていいじゃん。そういうのって、予約いるんじゃないの？」

〈俺がしておいた。今日の9時からだ。ほら、ここ〉

目の前に携帯が落とされた。画面には病院までのルートが表示されている。電話できるくらいなら、薬も貰ってきてくれよ。というか、そもそも死神が現代医療に頼るのって、おかしくね？

〈他の人間には、俺の姿が見えないんだよ〉

「でも、外に出る服も無いし……」

〈ほらよ〉

目の前に高校時代の制服が落とされた。

〈グズグズしてると遅刻するぞ。遅刻したら、契約解除だからな〉

「……はあ」

諦めるしかないようだ。

久しぶりに袖を通した制服は、少し窮屈に感じた。革靴を履き、鞆を持ち、意を決して玄関のドアを開ける。

「うあっ」

針で刺されたように目の奥が痛んだ。日中に外出するのは、いつ以来だろう。

あまりにも広い空間に放り出されたような気がして、不安になる。歩き方も正しいかどうか自信が無い。人間というよりも、生まれたての小鹿に近かった。

道を歩く人々からの視線が痛い。ひきこもりだとバレてるんじゃないか。目を携帯に集中させて歩く。地図から判断すると、その病院は駅を挟んだ向かい側、徒歩で行ける範囲の場所にあった。

最寄り駅はターミナル駅で、それなりに大きく、平日の朝でも人通りは多い。仕事に向かう人、学校へ行く人、子供を連れている人、彼らにはそれぞれ、自分の行き先があった。

路上には、ギターを抱えて歌っている男と、それを座りながら聞いている三人の男女がいた。

心の底から、ドス黒い嫌悪感が湧き上がってくる。

「どうせ無駄なのに、よくやるよな」

〈無駄って？〉

「報われない努力をしてるってこと」

〈彼らは報われないのか？〉

「当たり前だろ。歌手を目指している人たちの中の、何人が成功できると思ってんだよ。やりたい人は腐るほどいても、必要とされる人は一握りなんだ。才能の無い圧倒的多数は、踏み台にされて終わり」

〈夢を追いかけること自体が楽しいんじゃないのか？〉

「そう言ってられんのは自分の可能性を信じられるうちだけだよ。信じられなくなった奴らから順番に、君の餌食になる」

〈大歓迎だな〉

「着いたっばい」

一般的な二階建て一軒家の玄関に、《双巳メンタルクリニック》と書かれたプレートが嵌め込まれている。

「ホントに行くの？」

〈何だよ今さら〉

「なんか、ちょっと怖いんだけど。精神科ってさ、発狂して壁に頭を打ちつけてるような人たちが行く所なんでしょ？」

〈じゃあ、今すぐ死刑の方がいいか？〉

「それは……でもほら――」

死神との必死の交渉が続く。

「ご来院の方ですかあ？」

背後から声をかけられた。白衣を着て眼鏡をかけた、いかにもお医者さんという身なりの女性だ。背丈の割に童顔であるせいか、お医者さんの衣装を、無理やり着せられている少女のようにも見える。右手にはカップラーメン、左手にはコンビニ袋を提げていた。

「あっ、えっ、えっと……」

「違うの？」

その女性は首を傾げ、無邪気な顔で、こちらの表情を探っていた。

体が固まる。目が泳ぐ。携帯を持った手が震える。

「いやっ、まっ、まあ。そっ、そうと言えばっ……そうなんですけどっ」

美人は苦手だ。

「もう開いてるよー。入った入った」

お姉さんに肘で背中を押されながら、建物の中へと入れられてしまった。

意外にも、中は普通の病院のように見えた。受付の前に横長の椅子が六つ配置されており、既

に何人かの患者と思われる人たちが、ポツポツと座っていた。小声で話し合っている人たちもいれば、独りで座っている人もいる。精神科だと言われなければ、ここが何科であるのか、わからないかもしれない。

受付で保険証を渡すと問診票を渡され、記入して提出するように言われた。

来院目的を書く欄よりも先に、ご職業の欄が目にとまる。正直、無職だとは書きたくない。どうせ今日だけやり過ぎればいいんだ。高校生と書いて提出した。

しばらく待っていると、さっきの白衣の女性が歩いてきた。

「ベッケ、ショウタさん」

ゆったりとした低い声だった。表情も先ほどとは変わって、大人の女性という感じがした。

「あ、はい」

「あらためまして、こんにちは。私はカウンセラーの鏡と言います」

お姉さんは胸のあたりに付けたバッジをつまんでいた。

「これからお医者さんとの問診の前に、インタークって言って、私と簡単な面接を行っていきます。それじゃあ荷物を持って、二階へ上がりましょう」

お姉さんに連れられ、やけに急な勾配の階段を登り、二階の部屋に入った。その部屋は広々とした応接間となっており、奥のパーテーションで仕切られたスペースに、向かい合った二つの椅子と、小さな四角いテーブルが置いてあった。お姉さんに勧められ、椅子に座る。

「えー、これから何点か、質問をしていきます」

「はい」

「現在は高校生……っと。何年生ですかー？」

「にっ、二年です」

もし通ってたらだけど。

「学校には通えてますか？」

「はっ、はい。今日は……休みで」

「なるほどー」

カルテのようなものに何かを書いている。「どうせ嘘だろ」って思われてるだろうな。まあいや、今日だけだし。

「体格いいですね。何か部活とかやっています？」

「あっ、けっ、剣道を……やって、ました」

「そうですかー。“ました”ってことは……」

心臓を鷲掴みにされた気がした。

「……辞めました」

「ちなみに部活を辞めた理由は……」

その瞬間、強烈なイメージが脳裏に弾けた。

――『バイバイ、スポ薦』

賭け。挑発。敗北。

胸が苦しい。息が途切れる。

「……言わないと……ダメですか？」

「そうですねー、ご病気と関係している場合があるので……」

——『お前に期待した、俺がバカだったよ』

顧問。退部届。

「それでも、どうしても答えられないようであれば、そう言っていただいて結構ですよ」

——『部活辞めて、学校辞めて、次は人生辞めちゃうの？』

アイツの、化け物じみた笑顔。

零れ落ちそうになる涙を堪える。それでも、声を絞り出す。

「……ちょっと」

「難しいかな？ ……それじゃあ、他の質問にいけますねー」

それから十分ほど、日頃から不満に思っていることだとか、悲しくなった出来事だとかを聞かれた。不眠症という理由で来院したにもかかわらず、今まさに襲ってくる眠気を振り払おうと必死だった。部屋の中は適度に暖かいし、お姉さんの包み込むような声には癒されるし、そもそもいつもは寝てるはずの時間だった。半分眠りながら答えていたせいで、適当なことも言った気がする。

カウンセリングを終え、一階の待合席で待っていると、受付の隣にある精神科医の部屋へと案内された。

「こんにちは」

その声が耳に入った途端、一気に眠気が吹き飛び、視界が歪んだ。

「どうぞ、座ってください」

圧迫感のある低い声。五十代くらいの男性。冷たい表情。

初対面のはずなのに、この人とは何度も会ったことがある気がした。体が強張って、まるで縄に縛られているかのように動けなくなる。

「えー、不眠症とお聞きしていますが……」

呼吸が上手く出来なくなる。

「大丈夫ですか？」

気持ち悪い。吐き気がする。空間が迫ってくる。

「しっかり！」

その後のことは、あまり覚えてない。

意識が戻ってきた時には、ビニール袋を口に当てられ、背中をさすられていた。

既に別の部屋へと移動しており、例の医者もいなかった。

「大丈夫？ 落ち着いた？」

鏡さんが、背中をさすってくれていた。

「……あ……はい」

それから若い男性の医者に診てもらい、一週間分の睡眠薬を処方され、病院を後にした。

その帰り道。どこからともなく、人の笑い声が聞こえてきた。

母親に手を引かれた幼児とすれ違う。

「ねえ、おかあさん。あのひと、ガッコウってないのにセーフクきてるう」

「そうねえ、おかしいねえ」

工事現場の作業員と、スーツ姿のサラリーマンとすれ違う。

「学校行かないんだったら働けよ」

「いやあ、どうせあいつは何やったってダメだよ」

点滴を引いた青ざめた子供たちとすれ違う。

「なんで君みたいな人が生きてるのに、僕たちは死んじゃったの？ その命、ちょうだいよ」

「ちょうだい」「ちょうだい」「ちょうだい」「ちょうだい」「ちょうだい」「ちょうだい」

無数の手が体に纏わりつく。それらを振り払い、逃げる。

来るな！ 来るな！！ 来るな！！！！

「《死一ね》《死一ね》《死一ね》《死一ね》」

いつの間にか道の両脇に並んでいた群衆から、真っ黒い声援が送られていた。

体中の穴という穴から、汁が噴き出す。

家が見えた。

震える手と焦点の定まらない目で、ようやく玄関の鍵を開け、中に駆け入り、ドアを閉めて鍵を
すると、まるで嘘のようにパタリと音が止んだ。

死神の嗟う声がする。

〈お前、なんで生きてんの？〉

【対話】

「僕は負け犬なんです」

———どうして？

「そういう家系ですから。決まってるんです」

———そうかな？

「自分には、何も才能がありませんでした」

———自分には、何も才能が無いと思っていた。

「いろいろと習い事にも行かされましたが、どれも才能が無くて。それに勉強もスポーツもダメダメで」

———中学校は良いところに行ってるよね。剣道だって、スポーツ推薦を取るほどなもの。

「中学が良かったって何にもなりませんよ。小一から六年間も塾に行かされた割には、滑り止めにしか受からなかったし。地頭が悪いんです。剣道は、まあ……」

———いつから始めたの？

「小三です」

———剣道だけは続けられた。

「同じくらいの歳の生徒がいなかったからだと思います。道場は大人ばかりで、下の方でも中学生。自分が一番下でした。負けても目立たないし、当たり前みたいな」

———それは勝てないね。

「勝てないも何も、稽古になるといつも吹っ飛ばされてましたよ。おかげで鍛えられました。中学の剣道部は廃部同然で、上級生や経験者がいなかったのだから、入ってそうそう部長を任されたんです。担当の先生も素人で、僕が全部練習メニューとか決めてたし。中学時代は黄金期でしたね。団体では勝てなかったけど、個人では無双してましたから。三年の時に県で優勝したんですよ。それで高校の顧問から声をかけられて」

大会を終えた後、体育館の廊下で、僕は一人の中年男性に捕まった。

そして興奮した様子の彼に、僕は両肩を掴まれた。

「君には才能がある。だが才能は、磨かれなければ輝けない」

「こちらで暮らす費用や学費は、ウチが出す」

「俺のどこへ来い！ 日本一の、いや！ 世界一の剣士にしてやる！！」

「それで勘違いしちゃったんですね。バカな話ですよ」

———ふむ。

「家からは通えないとこだったし、進学校ではなかったから、母からは反対されました。母は僕

を勉強させて、偏差値の高い学校へ行かせたかったんです」

———自分の意志を尊重してくれなかった。

「最終的には向こうが折れたんですけどね。だから高校を辞める時には責められました」

僕は右の頬を、手の甲で打たれた。

「だから言ったでしょ！ あなたには無理だったの。お母さんの言うことだけ聞いてれば良かったの」

———なおさら辛いね。

「その時、初めて後悔して。ああ、こっちも地獄だったな、学校に残っておけばよかったな、と」

———学校に残っていれば。

「でも、どうしようもなかった。あの時の僕には、どうしても部活を続けられなかった」

———うん。

「……いたんです……この世の悪意を凝縮したような先輩が。事あるごとに暴言を吐かれたり、罰ゲームだと言って意味の無い、ただキツイだけの練習をさせられたり、防具や竹刀を壊されたり、もう散々でしたよ」

———酷いね。

「特に、僕がスポーツ推薦であることが気に食わないみたいでしたね。周りから特別扱いされているとでも思ってたんでしょう。全然そんなこと、無かったのに」

部活の練習中。僕は先輩に足を引っかけられて転んだ。

「大きさに転ぶんだなあ。もしかして演劇部の推薦だった？ ここは剣道部ですよ」

無表情にも見える笑い顔を作ったコイツの名字は豺虎(さいこ)。名前は忘れた。

「しかもやり方が巧妙で、あからさまな嫌がらせはしてこない。絶対に足がつかないようなやり方をするんです。練習で相手になると、必ず痛い打ち方をしてくる。それも僕にだけ。でもそんな人から見たら、わざとかどうかなんてわからない。だから顧問に、そのことを言っても無駄でした」

昼休みの職員室。僕は顧問に、先輩から受けた数々の嫌がらせを報告した。

「気のせいだろ」

「暴言を言われたり、防具を壊してくるのも気のせいですか？」

「そんなこと言っても、豺虎がやったっていう証拠が無いとなあ……」

ドアが開き、本人がやってきた。

「先生、合宿の出欠届け集めてきましたー」

「おう、サンキュー」

先輩は、その時初めて僕を見つけたかのように、わざとらしい笑顔を向けてきた。

「別家じゃーん。お前だけだよー、まだもらってないの」

「今、先生に提出しました」

あんたに渡すと、失くしそうだからな。故意に。

「はぁ？ お前、ナメてんの？」

「すみません」

「まっ、いいや。じゃあ先生、それで全員分なので。お食事中のところ失礼しましたー。おい別家、メシまだなら一緒に食おうぜえ！」

有無を言わさぬ力で首元を引っ張られ、僕は職員室から連れ出された。

そして、彼は僕の胸ぐらを掴んで壁に押さえつけ、顔を近づけ、こう言った。

「おい。あんま変なこと考えてっと、俺、お前のこと本気で潰しちゃうよ？」

先輩は、いつもの顔に戻っていた。

「裏では後輩に、僕の悪い噂を流してたんですよ。だから同級生からも嫌われました。それに先輩は次期主将を期待されて、一年とのパイプ役を任されてて、急な集まりがあった時も、僕にだけ連絡が回ってこないの、いつも無断欠席扱いでした。そりゃあ、顧問からの印象も悪くなりますよね。それでも夏までは我慢してたんです。けど、秋の大会が終わった時、どうしても耐えられなくなって、僕は退部の相談に行きました」

放課後の剣道場。その隅にある、普段は顧問しか入れない小部屋に、僕は連れてこられた。

「……で？ 一週間、何の連絡も寄こさず部活をサボって、出た結論がコレか」

「はい」

机の上に、僕が書いた退部届が投げ出された。

「あのなあ……お前、そんな根性で社会に出ていけるとでも思ってたんの？」

「すみません」

「お前はスポ薦で入ってきたから、部活辞めたら退学だよ？ わかってる？」

「はい」

「はぁ……理由は？」

「豺虎先輩です」

「ったく、合わない先輩がいたからってなんだ。あと一年もすりゃお前らの代だろ？ それまで我慢出来んのか」

「出来ません。あんな奴の下で剣道するくらいなら、死んだ方がマシです」

「あんな奴とはなんだ！！」

顧問は、演技じみた形相で机を叩いた。

「豺虎はなあ、お前を心配して、毎日毎日お前の下宿先まで様子を見に行ってくれてたんだよ。お前は無視してたみたいだけどなあ。そういう先輩の好意を踏みにじるのか！」

知らない。来てない。聞いてない。

しばらく黙っていると、顧問は諦めたように溜め息を漏らした。

「もういい。辞めたいんなら辞めろ。親には話してあんのか？」

「はい」

「じゃあ、手続きの連絡は担任を通して出すから」

「今まで、ありがとうございました」

僕は一礼して、部屋を出た。その扉を閉める間に聞いた顧問の一言が、今でも耳に焼き付いて離れない。

「お前に期待した、俺がバカだったよ」

剣道場を出て、校門に向かって歩いていると、満面の笑みを浮かべた先輩が、楽しそうにステップを踏みながら、やってきた。

「部活辞めて、学校辞めて、次は人生辞めちゃうの？」

その笑顔は、僕が今まで見てきたあらゆる表情の中で、最も怪物じみたものだった。

——悔しいね。

「それからはずっと、自分の部屋にひきこもってました。何をしても無駄だと思ったし、何もする気になれなかった」

——何もしなかった。

「夕方に起きて、夜中はずっとゲームして、朝になったら寝るんです。毎日、その繰り返し」

——一日中、ゲームをしていた。

「やってると、気分が安定するから」

——安定しないときもあった？

[沈黙10秒]

「イライラするんですよ……何もかも」

——イライラする。

「このままじゃいけない、バイトをしようと思って、求人を調べたんです。そしたら、どこも高卒以上って書いてあるじゃないですか。それでやっと、『あっ、僕は中卒なんだ』って。バカですよ、完全に」

——退学したことを後悔した。

「だから……あの時、辞めなけりゃよかった。顧問の言うとおりに、あと一年、我慢してれば……」

——うん。

「自分には、剣道しか無かったのに」

———剣道しか無かった。

[沈黙20秒]

「いや……剣道も無かったか」

———ん？

「勝てなくなっただですよ。高校に入ったら、周りは自分と同じくらいか、強い人たちばかりで。練習試合に行く学校も強いとこばっか。自分の弱さを思い知りました」

———中学時代は勝っていたのに。

「いま思えば、あの頃はヤケクソで剣道してたなあ。相手を斬り殺すつもりでやってたし。それが逆に良かったのかも」

剣道場での練習中、僕は顧問に呼ばれた。

「前のお前には、もっとこう、ウワァーッと相手に襲いかかる、鬼のような気迫があったんだよ。今のお前は考えすぎて一步が遅い。だから先を取られる。前みたいに何も考えずやってみろ」

「そう言われて前のようにやろうとしたんです。でも出来ない。前の感覚が思い出せなかった。練習しても練習しても悪くなるし、威勢だけ出してみても空回り。そのうち同級生が力を付けてきて、団体戦ではレギュラーを外されました」

———辞めたいと思った。

「だからこそ許せなかったんです、先輩が。練習は適当だし、部活だって毎日は来ない。礼節を重んじなければ、性根も腐ってる。だけど試合では勝つ。剣道は心の強さ、正しさを競い合う武道だと教えられてきました。アイツは、その剣道を侮辱してる」

———そう。

「他の人に負けるのはいい。でも、アイツには、アイツにだけは、絶対に、負けちゃいけないんだ！！」

秋の大会、個人戦トーナメント。僕は数回勝ち上がり、先輩と当たることになった。

体育館の廊下で出番を待っていると、僕は先輩から声をかけられた。

「次、お前とみたいだな。お手柔らかに」

「絶対に負けません。先輩には」

「へえ、頑張れよ」

先輩は立ち去ろうとした矢先に振り返り、するすると近寄ってきた。

「そうだ、賭けをしよう」

「はい？」

「次の試合、負けた方は、部活を辞める」

僕は、先輩が言っていることの意味がわからなかった。

「えっ……なっ……それは――」

「“絶対に” 負けねえんだよなあ？ だったらいいじゃねえか。お前にとっても俺は邪魔なんだろう？ もしお前が勝ったら、俺の方から消えてやるよ」

それが本当なら、願っても無いチャンスだ。

「わかりました。いいですよ、“絶対に” 負けませんから」

「約束、な」

「どうせただの駆け引きだと思ってました。それに自信はあったんです。いつかこういう日が来るんじゃないかと、普段の練習や試合などで、先輩の癖や戦法を徹底的に研究してましたから。相手に先を取らせ、散々打たせた後、気持ちの途切れたところを刺してくる防御重視の粘りの剣道。だから僕は焦らずに、メリハリをつけた断続的な攻撃を仕掛けていこうと、考えてました」

二歩進み、互いに礼、三歩進み、蹲踞。そして、試合開始。

「ハァッ！！」

先輩は威勢のいい掛け声とともに竹刀を高く掲げ、上段に構えた。僕は驚きのあまり、声を失った。

通称《火の構え》。防御を捨て、攻撃に特化した型だ。実戦で目にすることは稀で、僕にもほとんど対戦経験が無い。それに僕は、先輩が上段に構えた姿を見たことが無かった。それまでに、たったの一度でも。

ジワジワと、恐怖が僕の身体の内側を侵食していった。まるで虎に睨まれた兎のように、そこには狩る者と狩られる者との関係があった。

一歩ずつ、しかし大胆に、先輩が迫ってくる。その姿は普段の何倍もの大きさに見えた。思わず後ろに退いてしまう。

呑まれるな。攻めなければダメだ。でもどうすればいい？ 足が重い。相手が仕掛けてくる。掛け声とともに頭上に軽い衝撃が走る。旗が揚がる。一本を取られた。まずは落ち着こう。呑まれちゃダメだ。攻めなければダメだ。でも、どうする？ 練習を思い出せ。また上段で来た。負けたら退学だ。間合いが詰まる。躲さなければ。いや、躲せるのか？ 怖い。これ以上は下がれない。頭上に軽い衝撃が走る。旗が揚がる。

試合が終わった。

先輩は特に喜ぶような素振りも見せず、淡々と一連の礼儀をこなし、退場していった。

その後、僕が廊下で面を外している横に、彼は音も無く近づき、僕にしか聞こえないような声で呟いた。

「お疲れ様でした」

「結局、僕は何も出来なかった。悔しいというよりも、ただただ恥ずかしかった。それから一週間は部活に出れず、学校にも行けず、下宿先でボーッとしてました。一度、部屋で練炭を炊いて死のうとしたけど死ねなくて。ひたすら惨めで、何もかもがどうしてもよくなって、退部届を出しに行きました」

———そうだったんだ。

「逃げたんですよ。これ以上、自分の弱さを思い知らされるのが嫌になって。結果的に、僕は顧問の期待を裏切ったんです。悪いのは、全部僕なんだ。僕には、人から必要とされるような、力がありませんでした」

闇の世界。

空には暗雲が広がり、雷が轟いていた。その雲を突き破るようにして、両腕を広げ、ゆっくりと降りてくる者がいる。

邪神官メディクス。彼女は二匹の蛇が絡まった杖を掲げ、漆黒の衣に身を包み、禍々しいオーラを放っていた。その目元は、邪悪な仮面によって隠されている。

邪神官は地上に降り立ち、魔法を唱え始めた。周囲の荒れ果てた大地から、次々と魔物たちが産声を上げ、やがて地上は黒く染まっていった。

邪神官は光の世界と繋がる無数のゲートを開き、その向こう側へと、魔物たちを一斉に送りこんだ。

光の世界。

とある村の人々は、楽しそうに会話を交わし、永遠にも思われた平穏に身を委ねていた。

そんな日常風景の中に、不協和音が鳴り響いた。闇の群れが、光の大地を汚していく。

凶悪な魔物たちに襲われ、為す術も無く逃げ惑う人々。賑やかな笑い声は、瞬く間に耳を貫く悲鳴へと変わっていった。

女王は世界の異変を察知し、あらためて伝承の文言を確認した。

『この世 暗黒に染まりしとき 光の勇者 現れん』

人々は、予言に謳われた、光の勇者の降臨を待ち望んだ。

かつて、幾多の魔王たちを撃ち滅ぼしてきた、一人の勇者を。

目の前に起こる世界の危機も、必ずや勇者が現れ、救ってくれるはずだ。そう、彼らは信じて疑わなかった。

人々は、天に祈りを捧げた。

天界。

そこには、長い歳月を眠らされた勇者がいた。

今や彼に幼子の面影は無く、立派な少年の風貌へと成長していた。

「目覚めよ」

天界に重々しい声が響き、空間が波打った。

「目覚めるのだ、勇者よ」

少年の体が、光を帯び始める。

「世界を救うのだ」

そして少年は光と同化し、天界から放たれた。

空から地上へと、虹の軌跡を描いて光が舞い降り、辺りは白一色に包まれた。

魔導士の姿をした一人の少女が、その光を目にして振り返り、それが落ちていった先へと駆けていく。

少女は、俯せで倒れている一人の少年を見つけ、助け起こした。少女には、彼の顔に見覚えがあった。

「……お兄ちゃん？」

燃えるような赤い髪の子は目を覚まし、聞き覚えのある声に微笑んだ。

「久しぶりだな、テラ」

「やっぱり……！」

魔導士は勇者の胸に飛びこんだ。

「ああ、夢みたい！ お兄ちゃんが帰って来てくれるなんて！ もう……！ 今の今まで何をしていたのよ！？」

勇者は体を起こし、自分の額に手をやった。

「記憶が無いんだ。自分が今まで何をしていたのか、どこにいたのか。あれから何年経った？」

「7年だよ」

「そうか……」

兄は、失われた年月を噛みしめるかのように、妹を抱き寄せた。

「これから俺たちは、ずっと一緒だ」

「うん！」

兄妹は再会の喜びを分かち合った。

しかし、そうしている間にも勇者の耳は、二人の周りを取り囲む魔物の気配を感じ取っていた。

低い唸り声を籠らせ、鋭い牙を覗かせた狼の群れ。

「さっそく、歓迎のご挨拶だ」

勇者は立ち上がり、背中にさしていたはずの剣に手をかけようとした。そして間もなく、異変に気が付いた。

「無い……剣が、無い」

勇者の顔が青ざめていく。

「大丈夫。このくらいなら、アタシ一人で！」

魔導士の前方に、術式の円が浮かんだ。

「おいで、『ゴーレム』！」

魔方阵の中から、岩の組み合わせさった巨人が呼び出され、着地と同時に地響きが広がった。

「へえ、また新しいヤツと契約したんだな」

「ふふん、すごいでしょー。そおれ、やっちゃえー！」

魔導士の命令を受けた岩人形は、持ち前の怪力で大きな拳をぶん回し、狼の群れをいとも容易く葬り去っていく。

「危ない！」

勇者は迫りくる拳を避けようと、魔導士の身を庇った。それは二人の頭上をかすめて、最後の一匹を吹き飛ばした。

どこからともなく勝利のファンファーレが鳴った。

「……たくっ、手応えのないヤツらね」

魔導士は可愛らしくポーズをとり、召喚獣は次元の狭間へと消えていった。

「もうテラは、立派な召喚士だな」

「えへへー、もっとホメてー」

勇者に頭を撫でられ、魔導士は気持ち良さそうに目を細めた。

「それにしても、こんなところにも魔物が出るようになったんだな」

「そうなの。なんかまた悪いヤツが出てきたみたいでさ。だからお兄ちゃんには、どうしても帰ってきてほしかったんだー」

「そうか」

「早くお母さんのところに行こう。お母さんも、お兄ちゃんが帰ってきて、すっごく喜ぶよ！」

二人は、フィールドと街とを隔てる城下町の入口に到着した。

「そうだ！ ちょっと待って」

魔導士は先を歩く勇者を引き止め、彼の装備品を取り換えた。

[イグニス は 旅人の服を そうびした。]

[イグニス は 皮の盾を そうびした。]

[イグニス は 皮の帽子を そうびした。]

「『勇者が帰ってきたあ！』って、大騒ぎになっちゃうでしょ？ だからお城に着くまでは、バレないようにしないとね」

城門をくぐり抜けた先にある市場は、多くの人で賑わっていた。

変装のおかげか、すれ違う人々が勇者の帰還に気付く様子はない。

「そういえば、他のやつらはどうしてる？」

「えっ？ みんな元気だよー……というより、元気すぎるやつが、約一名」

「どいた、どいたあああ！」

「待ちやがれえ！」

前方から、慌ただしい様子の盗賊と、それを追いかける兵士が走ってきた。

盗賊は周りの人々にぶつかりながら、そこを通り過ぎていくかと思いきや、勇者の目の前で急に立ち止まった。

「おっ、イグニス！？」

「よっ」

勇者は右手を上げて答えた。

「さっそくで悪いんだが、俺を庇ってくれ」

「は？」

盗賊は近くにあった樽の中へと、素早く身を隠した。

そこへ、兵士が息を切らせてやってきた。

「姫様！」

「なーにー？」

「たった今、盗賊の野郎を見かけませんでしたか？」

「どうする？ お兄ちゃん」

魔導士が勇者の耳元に囁いた。

彼の脳内に、選択肢が浮かぶ。

[▷そこの樽の中だ]

[あっちへ行った]

「あっちへ行った」

「そうか。旅の者よ、協力感謝する！」

兵士は敬礼をして、走り去っていった。

勇者は樽の蓋を開けた。

「行ったぞ」

「サンキュー。よい、しょっと」

盗賊は樽の中から飛び出した。

「っていうかおい！！ めちゃくちゃ久しぶりじゃねえか！ 何年ぶりだよ！！」

「今さらかよ」

「意外と変わってねえなあ……」

盗賊は勇者の全身を舐めるように見まわした。

「お前もな。今度は何を盗んだんだ？」

「ん？ 聞いて驚くなよお……ジャーン！ 王子の使っていた剣だ！」

盗賊は袋の中から古びた剣を取り出した。

「まっ、城の内部を知り尽くしたオレにとっちゃあ、朝飯前だったけどねえ。いや、今の時間帯からして昼飯前か」

「……俺が、その王子なんだが？」

「あっ……」

一同の間を、風が吹き抜けていった。

魔導士が勇者の背後から顔を出す。

「お母さんにチクッてやるー」

「いっ、いや、それだけは勘弁して！」

「ねえ、お兄ちゃん。どんな刑がいいと思うー？」

「うーん。そうだなー」

「ほっ、ほら！ 日頃からの訓練が無いと、腕が鈍っちゃうだろ？ ごめんごめん、これ返すからさ！」

[イグニス は 王者の剣を てにいれた！]

「そうだ！ あの堅物女のそこ行って、イグニスのこと驚かせてやろうぜ！ たしか、教会にいるはずだ！」

[ヴェントスは にげだした！]

「あぁっ、逃げたー。お兄ちゃん、アイツはあとでアタシがシメとくから」

「いや、それよりも良い方法がある」

町の教会。

その奥に、眼鏡をかけて本を読んでいる、一人の僧侶が座っていた。

彼女の髪は幼い頃のショートカットとは異なり、ゆったりと長く下ろされている。そしてまた、幼き頃よりも遥かに美しく、大人の女性へと成長を遂げていた。

三人は物陰に隠れ、その僧侶の姿を覗いた。

「ホントにやるの？」

「チクられたくなければな」

「はぁ、嫌な予感しかしねえ……」

盗賊は渋々と立ち上がり、僧侶の元へと歩いていった。

「よっ、アクアちゃん元気い？」

「何やら外が騒がしいと思えば、またあなたですか」

僧侶は手元の本から目を離すことなく、寸分も興味が無さそうに答えた。

すると突然、盗賊が窓の外を指さした。

「あっ、イグニスだ！」

僧侶は期待と驚きの入り混じった表情で、すぐさま視線をその先へと向けた。

けれども勇者の姿はどこにも見当たらない。

「いないではないでふっ……か」

不満気な顔で振り返った先に盗賊の人さし指が置いてあり、彼女の頬へと見事に食いこんだ。

「うっそー。やーい、引っかかったー」

僧侶は杖を取り出し、白い光を灯した。

「『ホーリー』」

「えっ、それはっ、マジで、ヤバい……ってー」

僧侶の攻撃魔法が発動し、盗賊は真横へと吹っ飛んでいった。

「派手に飛んだな」

「だねー」

二人の姿を見た僧侶は椅子を倒して立ち上がり、本を落とした。

「イグニス……様……？」

「久しぶりだな」

動揺を隠しきれぬまま、彼女は口に手をやった。

「今まで……どこへ……？」

「記憶が無いんだってー」

「そうですか……ともあれ、お待ちしております」

僧侶が勇者に一礼すると、顔を腫らした盗賊が割って入ってきた。

「元はと言えば、お前がやらせーへボァ！！」

勇者の素早い峰打ちによって、盗賊は真横へと吹っ飛んでいった。

「それでは、城におられる女王様の元へ、御報告に上がりましょう」

「そうだな」

女王の城。

勇者たちが城の中へ入ろうとしたところ、入口の両脇に立っていた二人の兵士から呼び止められた。

「姫様。その見知らぬ旅人は……」

「あー、そっかそっか。変装してたもんねー」

魔導師は勇者の装備を取り換えようと、前に出た。

「いっくよお……そおれ！」

[イグニスは 王者の剣を そうびした。]

[イグニスは 光の鎧を そうびした。]

[イグニスは 勇者の盾を そうびした。]

[イグニスは 皮の帽子を はずした。]

兵士たちは見覚えのある赤い髪に目を丸くし、飛び上がった。

「王子様が……王子様がお帰りに……」

「女王様ああああ！！」

兵士たちは城の中へと駆けていった。

勇者が姿を見せると城内に歓喜の声が上がり、人々は待ちに待った英雄の帰還に笑顔を灯した

。

「懐かしいな、この雰囲気は」

「これで国中が大騒ぎだよー」

だが、城の中には勇者の帰還を快く思っていない者もいた。

その者は勇者の姿をチラリと見ると、彼の正面へと歩いていき、すれ違いざまに肩をぶつめた。不意を突かれ、勇者の体がよろめく。

「これはこれは。誰かと思えば、王子殿ではないですか」

虎柄の腰巻をした剣士は不敵な笑みを浮かべ、勇者を見すえた。

「てっきり、どっかの魔王に倒されて、もう死んだのかと思ったぜ」

「無礼な！」

剣士に食ってかかろうとした僧侶を、勇者の腕が止めた。

「おお、こわいこわい」

剣士は両手を挙げ、わざとらしく苦笑した。

「誰だ？」

「はあ？ 俺のことを覚えてない？」

勇者の胸ぐらを掴んで壁に押さえつけ、顔を近づける剣士。

「あっちの世界では、ずいぶんとお前の世話を見てやったのになあ。恩知らずな奴め」

勇者は思い当たる節も無いというように、顔をしかめた。

「ふっ……まあいい。いずれ思い出すさ」

剣士は勇者から手を離れた。

「この世界は俺が救ってやる。お前は指でも啜えて見とくんだな。ふははははは！！」

彼は身を翻し、その場を去っていった。

「なんだアイツ」

勇者は胸元を手で払った。

「お兄ちゃんのこと、知ってるみたいだったけど……」

「気にすんな。最近多いんだよ、ああいう自称勇者みたいなヤツが」

城の二階、女王の間。

中央の玉座には女王が座っており、その側には一人の大臣が立っている。大広間の左右には十数名の兵士たちが並んでいた。

「イグニス王子の、御帰還である！」

歓迎のファンファーレが鳴り響く。

「《王国に栄光あれ！》」

勇者たちは赤い絨毯の上を歩いていき、女王の前へと進んだ。

「よくぞ戻りました。我が息子、イグニス」

女王は安堵の微笑を浮かべた。

「あなたが去ってから数年の間、この世界は平和でした。しかし再び、新たな闇が姿を現したのです」

女王は玉座から立ち上がり、魔法で幻影の像を創り出した。幻影には、杖を持った黒衣の女性が映っている。

「邪神官メディクスは、この世界を滅ぼさんと、魔王の降臨を目論んでいます」

「俺は、どうすればいい？」

「予言には、『三つのクリスタルを集め、神殿に備わった聖剣を引き抜いた勇者こそが、世界を救うであろう』と伝えられております」

赤、緑、青の三つの結晶が、幻影となって宙に浮かぶ。

「力を司る火のクリスタル、勇気を司る風のクリスタル、知恵を司る水のクリスタル」

女王はその幻影をつまむような素振り、手元に赤い結晶を取り出した。

「そして、これが火のクリスタル。これを、あなたに託します」

幻影は女王の体を包むように取り囲み、魔王と対峙する勇者を映し出す。

「勇者イグニスよ。残り二つのクリスタルを手に入れ、聖剣を解放し、メディクスを倒すのです」

女王は勇者に歩み寄り、火のクリスタルを差し出した。勇者の手がクリスタルに伸びる。

「ちょっと待ったあ！！」

前触れもなく叫ばれた男の声に、その手が止まった。周囲の人々の視線が、一人の男に集まる。

「剣士ティグリス……」

大臣は、その男の名を口にした。

「どうりで剣が引き抜けなかったわけだあ。俺たちは、クリスタルが無いと聖剣が引き抜けないなんて話、聞いていないぜえ？」

虎柄の腰巻をした剣士が、食い止めようとする兵士たちを力強く押しのけながら、前に出てきた。彼の後ろからも、屈強な体をした大勢の戦士たちが加勢している。

「選ばれし者にのみ、予言の真実は伝えられます」

「所詮、血筋だろお？ 公平じゃねえよなあ。俺たちだって、命懸けで世界を救おうとしてんだ。それが、この仕打ちだよ」

剣士は勇者を指さした。

「それに、そいつが予言の勇者であるとも限んねえよなあ？ 偽物の王子だっていう可能性もある」

「それ以上の戯言は許しませんよ」

僧侶が前に出て、杖の先を向ける。女王は彼女の肩に手を触れた。

「王子、左手をお見せなさい」

勇者は周囲の連中に対し、意匠の刻まれた手の甲を向けた。

「これぞ王家の紋章。これまでに数多くの魔王たちを倒してきた、王子の証なのです」

「はあ？ そんなの知ったこっちゃないね！」

剣士は吐き捨てるようにして言った。

「それに聞いた話じゃあ、クリスタルを三つ集めさえすれば聖剣を引き抜けるんだらう？ だったら、誰もが勇者になれるってことじゃねえかあ。お前らも、そう思うよなあ！！」

「そうだ、そうだあ！」「不公平だろおお！！」「ナメやがってええ！！」

屈強な戦士たちが、野太い雄叫びで賛同した。

「それは……」

女王は困った顔をして、言葉を失ってしまった。

「恐れながら、わたくしに提案がございます」

脇に控えていた大臣が、彼らの間に割って入った。

「世界中から、我こそは勇者であると名乗る強者どもを集め、武術大会を開催するのです。そしてその優勝者こそ、名実ともに勇者であると認め、女王様から火のクリスタルが送られる、と」

「しかし……」

「ああん？ 恐えのかあ？ 王子が負けるのが」

勇者が剣士の前に出る。

「いいぜ。俺は“絶対に”負けない」

盗賊と魔導士も、それに続く。

「お前なんか、イグニスがブツ飛ばしてやらあ！」「そうだ、そうだあ！」

一方、僧侶は口をつぐみ、事態を静観していた。

剣士はニヤリと口元を歪めた。

「いいねえ。そうこなくっちゃあ」

諦めたような表情で、溜め息をつく女王。

「それでは、そのようにいたしましょう」

「ふっ……逃げんじゃねえぞ？」

剣士と戦士たちは踵を返し、立ち去っていった。

すかさず大臣が女王の前に跪く。

「出過ぎた真似をしてしまい、申し訳ございません。歴戦の勇者であるイグニス王子であれば、あのような輩など力でねじ伏せていただけたらと考え、つい……」

「いえ、よくあの場を収めてくれました」

「なーんか、面倒なことになっちゃったなあ」

「お兄ちゃんなら大丈夫だよ！ 勝てる、勝てる！」

女王が勇者の方へと向き直る。

「私は、あなたの勝利を信じています」

そして、その想いを込めるように、息子の手を握った。

「あなたこそが、予言に記された、光の勇者なのですから」

武術大会当日、闘技場。

「どうも、話が上手すぎるとは思いませんか？」

僧侶は浮かない顔で、勇者の装備を手伝っていた。

「もしやあの剣士と大臣は、裏で繋がっていたのでは？」

「たとえそうだったとしても、この大会で勝てばいいんだろ？」

「それは、そうですが……」

僧侶は勇者の背中の鞆に、剣を滑りこませた。

「敵が何を仕掛けてくるかわかりません。くれぐれも、お気をつけて」

「行ってくる」

勇者は入場口へと歩きだした。

「私たちは上で応援しています……ご武運を！」

振り返ることなく、左手が上げられた。

入場とともに、その身を圧倒してくるような声援が、勇者の元へと送られた。場内は数えきれないほどの観衆で埋め尽くされている。

前方の二階席には女王と大臣が座っており、目の前には対戦相手の控える門があった。

「よくぞ、おいでになりました、イグニス王子！ 試合は勝ち抜き戦で、5人倒すと決勝戦に出られます！」

勇者の向かい側の門が開き、対戦者が歩いてくる。初戦は格闘家だった。

「王子の健闘を祈っております。では、試合開始！」

勇者は剣を引き抜いた。

「『魔神剣』」

煌めく剣。

「『魔神飛燕脚』」

恐れ慄く敵の顔。

「『魔神双破斬』」

湧き上がる歓声。

「『魔神千裂破』」

倒れる大男。

「『魔神閃空破』」

対戦者たちは、勇者の卓越した剣技の前に、見るも無残に敗れ去っていった。

「イグニス王子、5人、勝ち抜き！」

勇者は剣を鞆に収めた。その表情からは、微かな疲労の気配すらも見られない。

応援席では、魔導士と盗賊が勇者の活躍を喜んでいた。

「やったあ！」

「楽勝じゃん。もう次、決勝だよ！」

「しかし油断は出来ません。決勝には、あの剣士が勝ち上がってきています」

僧侶は神妙な面持ちで腕を抱えていた。

「強えのか？」

「強いと言いますか……異様な剣士ですね。〔モシャス〕という変身魔法を使うのです。もしかすると、相手の戦いたくない人間に化けているのかもしれませんが」

「卑怯じゃねえか！」

「戦い辛い相手であることは、間違いありませんね」

「あんなやつ、ポッコポコにしちゃえ！ お兄ちゃん！！」

入場口へと続く廊下の壁に寄りかかり、勇者は呼び出しを待っていた。

奥から何者かが歩いてくる。

「これはこれは、王子殿。優勝まで、あと一勝ですな」

それは大臣の姿だった。

「思えば王子殿は、幼い頃から何でも人並み以上にお出来になって、わたくしがお教えする前から素晴らしい剣術をお持ちでしたなあ」

「いや、大臣から教わったことも多い。感謝している」

そう言った途端、勇者の頭に一つの疑問が浮かび上がった。

(待てよ……こんな奴、ウチの城にいたか？ そもそも、この国に大臣なんて……)

「わたくしには過ぎたお言葉。是非とも優勝してくださいませ」

「ああ。アイツには、絶対に勝つ」

大臣は無表情にも見える笑い顔を作った。

「その勝利を決定づけるために、わたくしから装備品を献上したいのですが……」

「何だ？」

「あらゆる能力を上昇させるアイテムでございます」

大臣は懐に手を入れ、一本のベルトを取り出した。

「私がお付けしても、よろしいでしょうか？」

勇者の脳内に選択肢が浮かんだ。

[▷ああ、頼む]

[いや、断る]

「いや、断る」

「なんと！ それは、もったいないですぞ！ 私がお付けしても、よろしいでしょうか？」

[▷ああ、頼む]

[いや、断る]

勇者は溜め息をつき、これ以上の問答は時間の無駄だと判断した。

「ああ、頼む」

「それでは」

ニヤリと笑った大臣が、勇者の腰にベルトを巻きつける。その時、不吉な音が鳴り響いた。

[呪いのベルトが イグニスの からだを しめつける。]

[イグニスは のろわれてしまった。]

「これは！？」

「あーあ。呪われちゃったなあ」

大臣のように見えた男は魔法を解き、虎柄の腰巻をした剣士が姿を現した。

「貴様！」

「それじゃあ、先に行ってるぜ。ふふ、逃げんなよ？ ふはははははは！！」

剣士は翻り、颯爽と走り去っていった。

「チィ！ 嵌められた！！」

装備を外そうと試みるも上手くいかない。魔法リストや持っている道具を探してみても、呪いが解けるようなものは何一つ見当たらなかった。

「外せないか……」

勇者が装備の解除を諦め、入場口へと向かったところ、扉の前に立つ二人の兵士に止められた。

「呪われているではないか」「呪われし者よ、出てゆけっ！」

「おい！ 中へ入れろ！！」

「呪われし者よ、出てゆけっ！」「呪われし者よ、出てゆけっ！」

兵士たちは、操り人形のように同じ台詞を繰り返し、まるで聞く耳を持たない。

「クソッ！」

勇者は入場を諦め、焦る自分を落ち着かせるように歩き回るうち、ある記憶を思い出した。

「そうだ……確か前にもこんなことがあった。呪いの装備を、誰かに外してもらったんだ。あれは……どこで……」

勇者は必死に記憶を辿った。間違っって呪いの装備を装着してしまい、城の中に入れなかった、あの時。城の近く、町、老人、呪文――

「隣町の老人！！」

「これより、いよいよ決勝戦！」

場内から大臣の声が聞こえてきた。

「でも今から行ったんじゃ間に合わない！ どうする！！」

勇者は苦悶に満ちた表情で、頭を抱えた。

「呪いなんぞにかかりおって、ノロマが」

勇者の目の前に、一人の老人が現れた。その人は紛れもなく、かつて呪いを解いてもらった、隣町の老人のように見えた。フードを深く被っているため、彼の素顔までは、わからない。

「あんたが……なんで、ここに……」

「そんなことを聞いている場合か？」

「どうしたのだ？ 早く、王子を呼んでまいれ！」

場内から大臣の催促が聞こえてくる。勇者は老人の目の前に片膝をつき、左手を差し出した。

「力を貸してくれ」

老人は、紋章の刻まれた手に、自分の手を重ねた。

「呪いを解いて、しんぜよう」

闘技場内では、剣士が勇者の不在を煽り立てていた。

「ほおら見ろ！ イグニス、俺に倒されるのを恐れて逃げ出した！ あんなヤツが、勇者であるはずがない！！」

剣士の主張に一部の聴衆は賛同し、観客席は喧騒に包まれていた。

盗賊と魔導士の顔にも焦りの色が見え始める。

「どこ行っちゃったんだよ、イグニス！」

「お兄ちゃああん！ 早く来てええええ！！」

対して、僧侶は首を傾げていた。

「イグニス様が試合を棄権するはずがありません。もしや、何かあったのでは？」

剣士は堂々とした振る舞いで、なおも訴え続ける。

「王子は来ない！ ヤツは戦いを放棄した！ 女王！！」

鳴り止まぬ罵声と怒号。もはや場内の趨勢は、剣士の側に傾いていた。

苦々しい顔をした大臣が、女王に耳打ちをする。

「これ以上の延長は、難しいかと」

「そうですか……わかりました。いないものは仕方ありませんね」

女王は逡巡しつつも、立ち上がった。

「武術大会は、剣士ティグリスの――」

その瞬間、門の扉が勢いよく開かれる音がした。

「待たせたな！！」

入場口から勇者が姿を現した。腰に巻かれていた禍々しいベルトは、既に外されている。

「王子！」

大臣は喜びのあまり席から立ち上がり、女王はホッと胸を撫で下ろした。

「そんな……あり得ない……お前は……」

剣士は驚きを隠せない様子で、体を強張らせた。

「それじゃあ、決着をつけようか」

勇者は剣を引き抜いた。

「武術大会、決勝戦！ イグニス王子、対、剣士ティグリス！！ ……始め！！！」

剣士は気を取り直し、剣を構えた。

「ふっ……まあいい。計画は狂ったが、お前を倒せば良いだけだ。『モシャー』」

「『マホトーン』」

[ティグリスの　じゅもんを　ふうじこめた!]

「なにい!!」

「同じ手は、二度も食らわないぜ？」

「チィィ！　だったら!!」

剣士は剣を高く掲げた。

「『まじんー』」

駆けだし、勇者に飛びかかる。

「ーぎり』」

「『みかわしきゃく』」

勇者は振り下ろされた剣撃を軽々と避けた。

剣士は何度も何度も攻撃を仕掛け、勇者は巧みな足さばきでそれらを躲していく。

「ちょこまか、ちょこまかとおお!!」

剣士の顔から苛立ちが見え始めた、その時。

「そろそろいいか？」

勇者の剣に、雷電の火花が迸った。

「『ギガー』」

剣士の背後へ回りこむ。

「ースラッシュ』」

勇者の一撃が、振り返りざまの剣士の腹部を捕らえた。

静寂が、場内を支配する。

剣士は両膝を地面に落とし、前のめりに倒れた。

興奮した大臣が立ち上がる。

「勝者、イグニス王子!!」

何万人もの歓声が、闘技場を揺るがした。

盛り上がりにも動ずることなく剣を収めた勇者は、観戦していた女王と、目と目を交わした。

勝負は決したかのように見えた。だがしかし、傍らで横たわる剣士の両の眼は、己の敗北を認めてはいなかった。

「ニクイ……ユウ……シャ……」

剣士の体は、みるみるうちに膨れ上がり、橙色の巨大な怪物へと姿を変えていく。それは仰々しい双剣を構え、さながら地獄の帝王といった姿へと生まれ変わった。

「ユウシャガ……」

額の中央、第三の眼が覚醒する。

「ニクイイイイイイイ!!!」

怪物は勇者へと鉄塊を振り下ろした。大地が引き裂かれるような轟音とともに、観客席の方まで亀裂が走っていく。

勇者はその衝撃波を素早く回避するも、その一撃の凄まじさに愕然とした。

悲鳴をあげ、逃げ惑う観客たち。闘技場は一瞬にして狂乱の波に吞まれた。

「女王様！　こちらへ！！」

「まだっ……まだ息子が！！」

大臣は頑なに留まろうとする女王を、無理やりに引っ張っていく。

勇者の背後に、仲間たちが集結した。

「うっわあ、でっけえなあ」

「前に倒さなかったっけえ？　こんなの」

「イグニス様、指示を」

勇者は剣を引き抜いた。

「コイツは、俺一人でやる」

「承知しました。私たちは後方で待機しております」

「えっ、ウソだろ！？　オレたちも戦うって！」

「行きましょう」

「お兄ちゃん、ファイト！」

「オレも戦ううう！　戦わせろおお！！」

盗賊の抵抗も空しく、二人の手によって引きずられていった。

勇者は一人、怪物と対峙した。

怪物が三つの眼で獲物を値踏みし、舌舐めずりをする。

「俺は……『にげる』」

[イグニスは　にげだした！]

[しかし　まわりこまれてしまった！]

勇者は強烈な攻撃をヒラリと躲し、体勢を立て直す。

「二回目の、『にげる』」

[イグニスは　にげだした！]

[しかし　まわりこまれてしまった！]

怪物の振る分厚い剣が、地面を抉る。

「三回目」

[イグニスは　にげだした！]

[しかし　まわりこまれてしまった！]

安全な場所で勇者の戦闘を見守っていた大衆は、彼のとった消極的な行動に、落胆の目を向けた。

仲間たちの顔にも、不安が漂う。

「おいおい、ただ逃げてただけじゃねえか！ どうしちまったんだよ！！」

「ボス戦なんだから逃げられないってばあ、お兄ちゃん！」

「イグニス様には、何か策があるのでしょうか」

怪物は断続的に攻撃を仕掛け、それを勇者は淡々と受け流していく。

「五回……六回……七回」

まるで勇者は、自分の勝利を確信しているかのようにも見えた。

「八回」

[イグニスは にげだした！]

[しかし まわりこまれてしまった！]

とうとう勇者は闘技場の片隅まで追いやられてしまった。

怪物の影が勇者を覆う。

その時、勇者の体に規格外の力が漲ってきた。

「いくぜ！ 『こうげき』」

勇者は全身から溢れ出る力を剣に伝え、怪物の前に振り放った。

[イグニスの こうげき！]

[かいしんの いちげき！]

怪物の右腕が弾け飛んだ。怪物は目の前で起こった出来事に理解が追いつかず、かつて右腕のあった部分を眺めた。

そして怪物は、もう片方の腕で剣を振り下ろした。またしても勇者は軽々とそれを回避し、次の攻撃態勢へと移行する。

[イグニスの こうげき！]

[かいしんの いちげき！]

怪物の左腕が弾け飛ぶ。両腕を切り落とされた怪物は、口から炎を吐いて応戦する。

勇者は闘技場の壁面を駆けながら炎の追撃を躲し、怪物の頭を狙った。

[イグニスの こうげき！]

[かいしんの いちげき！]

怪物の頭部が切り落とされた。首無しのまま、それは仁王立ちを続けている。

「これで終わりじゃあ、ないんだろう？」

怪物の腹部から新たな顔が浮き上がった。勇者から強烈な一撃を受けるたび、怪物は次々と新たな頭や腕を生やし、脚を太くしていく。計六度の変化の末、ついに怪物の最終形態が姿を現した。二つの顔、鋭い爪、緑色の皮膚。

勇者は剣を肩に担ぎ、怪物の頭へと飛びかかる。

「これで……トドメだ！！」

[イグニスの こうげき！]

[かいしんの いちげき！]

勇者の一撃が、怪物の脳天を直撃した。

怪物は白目を剥きながら後ろによろめき、ゆっくりと仰向けに倒れていく。その後、魔法のように跡形もなく消え去っていった。

場内に、歓喜と喝采の拍手が沸き起こる。

魔導士と盗賊は、大はしゃぎで勇者の元へと駆け寄った。

「すごーい！ お兄ちゃんすごーい！」

「すげえな！ 何だよあれ！！」

勇者は訳知り顔で微笑んだ。

「ちょっとした裏技だ」

事態を見守っていた大臣と女王も、勇者の方へと歩いてきた。

「お見事です。イグニス王子」

「私は、あなたを信じていました」

女王は赤色に輝くクリスタルを取り出した。

「それでは、これを」

勇者は差し出された結晶を受け取り、天に掲げる。

[イグニスは 火のクリスタルを てにいれた！]

女王は大空を抱くかのように、両腕を伸ばした。

「さあ！ 世界を巡り、残り二つのクリスタルを見つけるのです！！」

光の勇者たちは祝福の大歓声を背に、意気揚々と王国を旅立った。

闇の世界。

邪悪なる城、降臨の間。

邪神官は、台座に乗った黒い水晶を覗き、勇者たちの動向を追っていた。

「ふっふっふ。どうやら、一つ目を手に入れたようだな」

彼女の手には、紫色に輝く闇のクリスタルが握られている。

「残るクリスタルは、あと三つ」

第二章

【リアル】

何もする気が起きない。

おそらく、ここ三日間ゼリーしか食べてないせいだ。食欲が無いのに空腹感に襲われて、昼間なのに眠れない。なんで食べ物を食べないとお腹が空くんだろう。果てしなく面倒なんだけど。

〈おい、そのままだと死んじゃうぞ〉

「それもいいかな」

〈ちなみに餓死で死ぬ場合、水ありで一ヶ月、水なしで一週間程度を見込んでおいた方がいい。そのまま何も食べずにいると、内臓が千切れるような強烈な飢餓感とともに、体力が徐々に消耗して行って、死に際には朦朧と覚醒の狭間で半狂乱になりながら――〉

「やっぱり、やめとくよ……なんか、大変そうだし」

〈まっ、賢明だな。もっと楽な死に方は、いくらでもあるさ〉

またお腹が鳴る。鳴る？ いや、他の音が鳴っている。携帯だ。きっとまた、アイツからだ。

〈友達から電話きてるぞ〉

「いや、友達ではないんだけど……」

〈じゃあ何なんだよ〉

「知り合い」

持ち物を処分する作業の中で、行方不明になっていた携帯を発掘した。久しぶりに充電して、電源を入れてみると、嫌がらせにも近い数の着信があった。全部その一人からのものだ。

鳴り止んだ携帯を取って、着信履歴を見る。[影内壮馬(かげうちそうま)]と表示されている着信が3件あった。ずっと無視してるのに、どうしてこう何回も電話してくるんだろう。

〈お前のこと、好きなんじゃないの？〉

「男だよ」

〈まさかホモ？〉

「いいや、無類の女好きだよ」

コイツと出会ったのは、高校を辞めてから暇つぶしで始めた、とあるネトゲのオフ会だ。

ネトゲには、すぐにハマった。オフラインのゲームでは味わうことの出来ない感動が、そこにあったから。リアルでは救いようの無いダメ人間でも、その世界では仲間たちを守る勇敢な戦士になれる。チャットでは誰とでも気軽に会話ができる。ネットの世界はリアルとは違う。そう思っていた。あのオフ会に出るまでは。

「もしかして、ルー君？」

「あっ、はい」

目の前に現れたのは、銀髪に口ピアスのヴィジュアル系バンドマンだった。

「なーんだ、こんなところにいたんだ！ みんなあっちで待ってるよ！」

彼は、この世に怖いものなど何も無いというような笑顔で、僕の腕を引っ張っていった。

待ち合わせ場所を間違えていたんじゃないかと、あえてその場から距離を置いてたんだ。そばで見ていると、彼らは余りにも華やかで、居たたまれなくなったから。

総勢十二名。その内、女性三名。大人もいれば、中学生みたいなものもいた。彼らはネットスラッグを使いこなしていた姿からは想像も出来ないほどに見た目は一般人で、一人だけ明らかにひきこもりニートな風貌の自分への視線が痛かった。

オフ会では散々な目に遭った。緊張して何も喋れない。目線の置き場に困る。手足が小刻みに震える。体中の穴という穴から汁が出る。そしてトドメは、密かに想いを寄せていた姫ヒーラーの中身が小太りのヒゲオヤジだったと知った時の衝撃。頭の中は、この場から離脱する理由を考えるのでフル稼働だった。

特に、ヤツには失望した。ヤツのアカウント名であるUmbra(ウンブラ)とは、ラテン語で影を意味する言葉だ。たまたま自分も光を意味するLux(ルクス)を名乗っていたため、彼には廚二的な同族意識を持っていたが、フタを開けてみれば、ただのハイスペックなリア充だった。イケメンで、コミュカが高く、人に誇れる武器があり、いつも輪の中心にいて、それを特別なことだとは思っていない。自分も彼ぐらい恵まれていれば人生バラ色だったろうかと、不公平な神を恨んだ。

その後、オフ会はカラオケに行って解散となる。結局、途中で抜けるための口実が考えつかず、最後まで参加してしまった。中でも一番可愛かった女子は、当然のように銀髪リア充がお持ち帰りしていった。所詮、ネットの向こう側にいるのもリアルな俗物なのだと、心の底から理解できた瞬間だった。正直、もうコイツとは二度と会いたくない。別れ際に、リアルでの連絡先を交換してしまったことが悔やまれる。

「じゃあまた、あっちで会おうな！」

この日を境に、ネトゲは辞めた。やはりゲームはソロプレイに限る。

<それはそうと、早めに“それ”買い出しに行っておいよ>

数日前に、死神から買い物リストを渡されていた。リストにはロープや練炭など、典型的な自殺アイテムが並んでいる。

「えー。まだ夕方じゃん」

日の出ているうちは、外に出たくない。この前の嫌な記憶が蘇る。けど、お腹も鳴っている。<コンビニで売ってないやつもあるから、食べ物と一緒にスーパーで買ってこいよ。真夜中じゃ、やってないだろ？>

「はあ……」

仕方なくジャージを着こんで、外に出た。

できるだけ周りの人を見ないようにしながら歩く。こっちが見るから、向こうも見てくるんだ

。 店に入り、最小限の行動で買い物を終え、店を出た。安心して、ホッと息をつく。あとは家に戻るだけ――

「ソーマ！」

何気なく声をした方に振り返り、全身が硬直した。目の前に、あの、例の知り合いの顔があった。そういえば、こいつもソーマって言ったっけ。

それよりもなんでコイツ、ウチの近所にいるんだ？ ヤバい。目が合った。こっち見てる。すぐに目を逸らし、早歩きで立ち去ろうとするも、背後から伸びてきた手に左肩を掴まれた。

「もしかして、ルー君？」

終わった。

「ええっ！！ なんでこんなとこいんの！？ ちょっと、マジかよ！！」

この鬱陶しい絡み方には覚えがある。銀髪、口ピアス、肩にはギターケース。

「つか、ひっさしぶりじゃん！！ 生きてたかー！ 今日も電話かけたんだぞー」

半ば放心状態のコミュ障を、テンション全開のリア充が猛烈に揺さぶっていた。首が座っていない赤ん坊のように、グラグラする。

「えー、なにになにー。トモダチー？」

「そーそー。紹介しまーす！ ショータ君でーす！！」

「おおお！ ぱちぱちぱちぱち」

彼の仲間らしき人たちも周りに集まってきた。類は友を呼ぶとは言うけど、みんな黒ずくめで、奇抜な髪型をし、見事なまでのロックンローラーだった。何これ怖い。

「そうだ！ これからパーリーナイトなんだけど、ユー来ちゃいなよ！！」

「え、嫌です」

「はい、これ」

ドクロの形をしたヘルメットが押しつけられた。こっちの言うことはスルーですかー？

バイクのエンジンがかかる。キョドっていると、後ろから誰かに持ち上げられ、その後部座席に載せられ、ヘルメットが被せられた。

「行くぜえ！！」

「うっわああああああ！！！」

バイクが走り出すと同時に有無を言わさぬ慣性がかかり、体が後ろに持ってかれ、慌てて前にあったギターケースに手を回した。

エンジンが嘶く。カーブを曲がるたびに、体が前後左右に振り回される。法定速度を過ぎてんじゃないかと思うような爆走っぷりに、意識が遠のきかける。今この手を離したら死ぬ。確実に。

「おい、着いたぞ」

気が付いた時、バイクは止まっていた。

連れて来られた場所はカラオケで、十数人は入れそうな大部屋に通された。彼の仲間たちも続々と部屋に押し寄せて、居心地の悪い雰囲気、胸がムカついた。周りで交わされる会話を解析した結果、今日はメンバーの誕生日会らしい。部屋の電気が消され、ロウソクを立てたケーキに火が灯り、恒例の歌が歌われた後、火が吹き消された。

「お誕生日、おめでとおおお！！」

「ありがとおおお！！」

クラッカーが鳴る。

なにが『お誕生日おめでとう』だよ。生きてるのが当たり前になった現代社会で、めでたいもクソも無いだろ。

それでも空腹に負け、目の前のお菓子とジュースに手を付けた。適当に食べたら、そっと帰ろう。それにしても騒々しいな。

「ソーマのダチ？」

隣にいたモヒカンの男に声をかけられた。部屋の中が騒がしくて、よく聞こえない。

「アイツ！ イイヤツだよなー！！」

周りの喧騒に負けまいと声が張り上げられ、耳が痛む。

「ここ！ 何の集まりなんですかー！！」

片耳を塞ぎながら、こちらも負けじと叫んだ。

「高校の連中！」

「へー！」

「でもツーシンだから、一癖あるヤツらが集まってんだ！ ドロップアウトしたヤツばっか！」

なるほど。確かに違和感を感じていた。どこことなくコミュニケーションが空回りしてるし、ずっと黙ってる人もいれば、無理やりにテンションを上げて盛り上がりようとしてる人もいる。各学校から、クラスに馴染めなかったボッチを選抜したような、そんな感じ。ボッチ日本代表。

「楽しんでるー？ はい、これケーキ」

隣にいた見知らぬ女子から差し出された紙の皿には、綺麗に取り分けられたケーキが乗っていた。

「どうも」

「こんなとこ、いきなり連れて来られてもビックリしちゃうよねー。アイツ強引だからさー」

まるで腫れ物に触るかのような気遣いで、人との距離を測ってる。みんながみんな、それぞれの影を背負っているようにも見えた。言うなれば、リア充への敗者復活戦みたいなものか。あの弱肉強食のサバイバルを、もう一度やり直してるんだ。必死だな、どうせ無駄なのに。この人たちは、どう足掻いたって友達のフリから抜け出せない。そんなもの、本当の友達じゃない。

——『ほら。取ってこいよ、ガリ勉』

友人の豹変。

——『なっ！ お前もソーマにいじめられてたもんな！』

濡れ衣。学級会。

——『今まで友達のフリしてやってたんだよ！』

無視。猿山の笑い声。絶交。

嫌な記憶を思い出し、ストレスゲージが限界まで達した。

帰ろう。こんなところ、もうウンザリだ。お金は三千円くらい置いとけばいいか。

さて、どうやって帰ろう。そうだ、トイレに行くフリをして——

「トモ来るよー」

急に騒がしくなって座り直す。誰かが部屋の中に入って来る。

「ごめえん。遅くなっちゃったあ」

意味もなくハイタッチし合う偽リア充たち。

どさくさに紛れて部屋を出ていこうと立ち上がり、すれ違う瞬間、その女子と目が合った。

「えっ、別家先輩？」

「は？」

途端に場が静まりかえり、こちらへ視線が集まった。

いや、知らないんだけど、こんな女。

「カワセミです！ 中学の、剣道部の！！」

「あ」

知ってた。コイツ、トン子だ。そういえば、こんな声だった。というか前と変わりすぎだろ。肌はメイクで真っ白だし、頭は金髪だし、何より最後に目にした時と比べて明らかに痩せ細ってる。チラリと見えた八重歯の他に、まるで原型を留めちゃいない。わかるはずないだろ、こんなの。

「先輩、なんでこんなところにいるんですかあ？ ビックリしたあ」

「なになに、二人とも知り合いなのお？」

無数の好奇心旺盛な目に囲まれた。

「いっ、いやあ……あの、ごめん、ちょっとトイレ行ってきます」

人の波を押し通り、その場を飛び出した。

「どしたー？」

廊下で銀髪から声をかけられたのも無視して、走る、走る、走る。

「おい！ 待てよ！！」

ソーマの叫び声だ。振り返ると、追いかけてくるのが見えた。

「なんで！？ もう、ほっといてくれよ！！」

行き先もわからずに知らない道を駆けていくと、見覚えのある大通りに出てこれた。これなら帰れる。

「待ってば！！」

心臓が悲鳴をあげているのがわかる。ダメだ、もう走れない。肺がキツイ。脚もつりそう。部

活やってた頃は、もっと走れたはずなのに、体力落ち過ぎだろ。

後ろを見ると、フラつきながらも銀髪が追ってきていた。どこか隠れる場所は無いか。近くにゲーセンが見えた。

ゲーセンのドアを開け、中へ入る。そして瞬時に格ゲー筐体の後ろへと身を隠した。

銀髪が息も絶え絶えに、ゲーセンの中へ入ってくるのが見えた。ヤバい。いずれ見つかる。

「なーんか、追われてるみたいだけどー？」

背後から声がした。箱型のシューティングゲームの筐体から顔を覗かせた、黒いコート姿の女性が立っている。その顔には見覚えがあった。

「どーお？ 中に入って、お姉さんと一緒にゾンビ狩りしていかなーい？ てか、私のこと覚えてるー？」

「えっ？ あっ、えっと……はい！」

この前クリニックで担当してもらったカウンセラーの女性だった。名前は、たしか鏡さんだったっけ。あの時とは服装が違ったし、眼鏡もかけてなかったから、すぐにはわからなかった。確かに、この中になら隠れられそうだ。

グラグラする。頭が、目の前で起こっている奇跡的な現実を追いついてこない。たまたま外に出たら、特に会いたくなかった強敵と三連続エンカウントするとか、ラスボス前かよ。

銀髪は、もう目の前まで迫っていた。考えている暇は無い。シューティングゲームの筐体の中へと滑りこむと、カーテンが閉められた。

「ほらよ」

手元にライフルが渡され、台の上には大量の百円玉が並べられた。

ゲームが始まり、画面の奥から無数のゾンビたちが群がってくる。

鏡さんは手慣れた動作でヘッドショットを決めていく。迅速かつ的確に、ゾンビたちは処理されていった。

銃を構え、撃ってみるものの、まるで敵に当たらない。そうこうしているうちに弾が尽きた。どうやってリロードすんだよ、これ。

「リロードは下に向けて、こう！ ……ったく、イマドキのガキはゲーム下手クソだなー」

見よう見まねでリロードする。

「シューティングは専門外なんで！」

「避ける！！」

大柄な敵が振った棍棒が直撃し、左の画面が真っ赤に染まる。

「あっ、死んだ」

「おおショータ！ 死んでしまうとは何事だ！」

並べられていた硬貨が一枚、機械に投入された。

「仕方の無いやつだな。お前にもう一度、機会を与えよう」

それ以降、死んでも死んでもコンティニューを繰り返し、何度も何度も生き返ることになった

。何これ、オートフェニックス？

「これじゃあ……どっちがゾンビだか、わからないですね」

「ラスボスだ！ 気合い入れろよお、ルーキー！！」

もはやキャラ変わりすぎで、あんた誰だよって感じなんだが。

「今だ！ コアを！！」

巨大なモンスターが、撃ってくれとばかりに弱点を曝け出した。無我夢中で銃を連射する。死んでも死んでも生き返り、捨て身でラスボスに立ち向かう。いつの間にか、絶叫している自分がいた。放たれた百発の内の十発ほどが命中し、モンスターは倒された。

「っしゃあ！ クリアアアア！！」

鏡さんから突き出された手の平に、不慣れなハイタッチをした。並べられていた百円玉は、もの見事に無くなっていた。

夜も遅いから家まで送ると言われ、HP、MPともに尽きかけていた自分に、それを断る選択肢は出てこなかった。

「私さあ、今では偉そうに学校行けとか言ってるけど、自分自身、まともに学校通ってなかったんだよねえー」

「はあ……」

「でも、毎日家は出なくちゃいけなかったから、学校行くフリしてゲーセン行って、ゾンビ倒してた」

どうりで強いわけだ。

「そうそう。前に来てくれたクリニックの二階で、カウンセリングもやってるんだ。今度一回来てみたら？ 話をするだけじゃんって思うかもしれないけど、結構それでスッキリすることもあると思うよー。はいこれ」

手元に細長いパンフレットが渡された。

「あっ、ここが家です。見送り、ありがとうございました」

「いいえー。じゃあ……またね！」

鏡さんは、わざとらしいくらいに大きく右手を振っていた。

玄関のドアを閉め、鍵をかけた。

〈睡眠薬は貰ったんだから、もう行くことないじゃないか〉

「うん。でもカウンセリングだけ受けに行こうと思って。それに、お金も返さない」と

〈今さら何したって無駄だと思うけどな。どうせお前、もうすぐ死ぬんだぜ？〉

「だから行くんだよ。あの人って泣いてくれそうでしょ？ ……僕が死んだあと」

クリニックでは、この前とは違う部屋に通された。こじんまりとした部屋に、一つのテーブルと二つの椅子がポツンと置いてある。なぜか椅子は向かい合わせではなく、テーブルに対して直角に配置されていた。

「こないだぶり」

鏡さんは恥ずかしそうに笑っていた。

「あの……これ」

千円札を二枚、テーブルに置く。

「なにこれ」

「ゲーセンで、二十回はコンティニューしたと思うので」

「あっ、あれえ？ いいのいいの、あれは私が付き合ってもらっただけだから」

「いや……でも……」

困らせちゃったかな。でも、さすがに悪いし。

「それじゃあ、こうしよう」

片方の千円札が抜き取られ、もう片方が戻された。

「半分はあなたを守れなかった私のミス。もう半分は自分を守れなかったあなたのミス。これでもっと強くなってね」

「はあ……」

しつこいと思われても嫌だし、ここは引き下がろう。

「別家君は、しっかりしてるんだねー」

「ええっ！？ そんなことないですっ！」

「そーお？」

「先生に、謝らなきゃいけないことがあって」

「なになに」

「あっ、あのっ……うっ、嘘ついてたから」

「そうなの？」

「あっ、あのっ……ほっ、本当は、行ってないんです、学校に。もう辞めちゃって……本当は、ひっ、ひきこもってるんです！」

「へえ、すごいじゃん」

「ふあ？」

変な声が出てしまった。

「いやあ、根性あるなあと思って。なかなか一人で外出できないって人も多いから。別家君は一人で外出も出来るし、オトモダチもいる」

「オトモダチ？」

「この前ゲーセンで追いかけっこしてた子って、そうじゃないの？」

「いっ、いやあ……ちょっと違う、かなあ。向こうが一方的にそう思ってるだけで」

「あなたは友達だと思ってない」

「友達というか、知り合いですよ。一方的に連絡が来るんです」

「連絡が来ても、返さない」

「あまり、人と関わりたくないの」

「どうして？」

「だって、人といったら気を使わないといけないし、裏切られることも……あるし」

「一人でも、寂しくない」

「寂しくない……というか、人と一緒にいたって、寂しいじゃないですか」

「ふむ」

「結局、一人でいた方が楽なんです。人と関わらない方が、寂しくないんです」

クリニックを出ると、携帯が震えた。またアイツからだ。既に着信が12件って、おい。

携帯をしまおうとした、その時。操作もしていないのにアプリが起動し、画面上にメッセージが表示された。

[ねえねえ アイツの逃げっぷり 見た？]

[見た見たw]

[漏れそうだったんじゃね？]

[ウケるwwww]

[明らか浮いてたし]

[ボッチだもんね。仕方ないね]

[なんかアイツ見ると、イラッとするよな]

[知り合い？]

[いや？知らねーよ あんなやつ]

メッセージが止まらない。

[キモいきモいきモいきモいきモいきモいきモいきモ]

[あなたのせいで、不愉快です]

[消えろよ]

[迷惑だから]

[やめよう。酸素の無駄遣い]

[うわ こっち見てる]

[ハブろうぜ]

[さんせーい！]

[ショータが退出しました]

震える手を押さえ、なんとか携帯の電源を切った。

涙の雫が頬を渡り、地面に落ちていく。

死神の嗤う声がする。

〈お前、なんで生きてんの？〉

【対話】

「どうせ、僕はコミュ障ですから」

———そうなの？

「人を怒らせてしまうんじゃないかと思うと、何も言えなくなるんです」

———ふむ。

「剣道場に通り始めてから、だんだんと話せるようになりましたが、それでも、まだ……」

———人見知りなんだ。

「小さい頃から、いつも人が僕のことをどう思っているのか気になって……人が、怖いんです」

———人の会話とか。

「気になります。小声だと、特に。学校の休み時間は地獄でした。授業が終わると、みんな楽しそうに話しますじゃないですか。でも僕一人だけ、話す人がいなくて、ずっと机に座ってるんです。何もせず、ただじっと、何かの刑を受けてるみたいに」

———うん。

「そうしてると浮くんですよ、周りから。目立たないように何もしないでいると、かえって目立ってしまう」

———ああ。

「小学校時代は、よくいじめられてました。ふざけてるフリして殴られたり、蹴られたり、倉庫に閉じこめられたり」

———酷い。

「……ノートを、窓から放り投げられたり」

———辛い。

「……昨日まで仲良くしてたのに、いきなり無視されたり」

———辛かった。

「それも友人だと思ってた人にですよ！ たった一人の！ いきなり絶交されて！ そりゃあ、誰も信じられなくなりますよ！！」

———友人だと思ってたのに。

「……いや、友人だと思ってたのは、僕だけだったのかな。そういや向こうは、友達のフリって言ってたし」

———どんな人？

「同じクラスで、通ってた塾も一緒だったんです。それで、向こうから話しかけてきて」

塾の教室、授業前。

僕はいつものように、じっと机に座っていた。

廊下の方から誰かが走ってくる音が聞こえたかと思うと、乱暴にドアが開けられ、一人の男子生徒が駆けこんできた。

「オレのこと、ダメっとけよ！」

「あ……」

僕は突然話しかけられたため、上手く声が出せなかった。彼は黒板の裏にある狭いスペースに、まるで忍者のように身を隠した。

そこへ、塾の先生がやってきた。

「おい、ソーマ見なかったか？」

僕は首を横に振った。

「そっか、サンキュー」

先生が出ていった後、彼はそこから飛び降りた。

「ところでお前、宿題やった？」

「うん」

「わりい、写させてくんない？」

「先生におこられるよ」

「バレやしねえって」

この後、ご丁寧に丸々と写された宿題は先生に見つかり、僕まで巻き添えをくらって叱られた。

「次は、もっと上手くやってみせるぜ」

彼は人懐っこい顔で苦笑した。それが永友颯真(ながとも そうま)との出会いだった。

「それから塾の休み時間に話すようになって。ウチへ来て、一緒にゲームしたりもしてました。剣道場に通うようになったのも、友人の誘いで。彼は僕が入ってすぐに辞めちゃいましたけど」
———仲良かったんだね。

「便利だったんじゃないですか？ ゲーム貸してくれたり、宿題を写させてくれたり」
———そうかなー。

「ふっ、図々しいヤツで。僕のいない時に、ウチへ勝手に上りこんでたこともありました」

自宅の前。

学校帰り、僕は家の鍵を持っていき忘れたことに気が付き、誰かがいることを期待して、インターホンを鳴らした。

「うーい。おそかったじゃん」

ドアを開けたのは、右手でアイスを食べながら、左手にゲームのコントローラを持った友人だった。

「そうじ当番で……って、なんでいるの！？ どっから入ったの！？」

「ところがどっこい、ウラ口が開いてたのさ。まったくブ用心な家だなあ。ドロボー入りホーダイだぜ」

「それ、ボクのアイス……」

「おっ、当たりだって。よかったな！」

友人は無邪気な笑顔で、僕の肩をたたいた。

———図々しいね。

「でも、何かを盗まれたことは無かったですね。せいぜいお菓子とか、そのくらい。外では万引きしてたみたいですが」

———万引き？

「友人は悪い集団とも付き合ってた……まるで、猿の群れのような。ボス猿が真ん中にいて、それに媚びるように周りを取り囲んで。友人は普段、すごく良いヤツなんですけど、その集団の中にいるときは、人が変わったようになるんです」

———人が変わったようになる。

学校の教室、休み時間。

僕は妄想の物語を書いていたノートを友人に取り上げられ、必死に取り戻そうとしていた。

「……返して」

「ほーら、ほーら」

僕は友人を追いかけた。

友人が僕を茶化せば茶化すほど、猿の群れは盛り上がった。

「……返してよ」

「そんなに返してほしいなら、返してやるよ！！」

ノートは窓から放り投げられ、下の階へと落ちていった。

「ほら、取ってこいよ。ガリ勉」

「わざと僕にぶつかってきたり、僕を体育館倉庫に閉じこめたり、僕の物を盗んだり」

———物を盗られたの？

「まあ、演技が終わったら、ちゃんと返してくれて。だから盗られたわけじゃない」

———演技って？

「僕をいじめてるっていうフリです。友人が猿の群れの中で上手くやっていくのに、必要だったんです。だから僕が倉庫に閉じこめられたときも、助けに来てくれました」

体育館倉庫。

僕は演技の流れで閉じこめられ、じっと助けを待っていた。

しばらくすると、天井近くの小窓が豪快に割れる音がした。見上げると、友人が外から顔を出していた。

「助けに来たぜ！」

「えっ……そこから出るの？」

「カギ、取ってこれなかったんだよ」

僕は用具の入った棚をよじ登り、小窓から外を覗いた。すると梯子がかかっていたので、それを使って下に降りた。

「どうも」

僕は不機嫌そうに答えた。

「なんだよー。おこなだよー。いつものことじゃーん」

「そうだね」

僕は体操着に付いた埃を掃った。

「帰りにジュースおごってやるからさあ、またたのむよお」

「わかったって。いつものことでしょ？ ほら、もうジュギョウ始まっているから行こう」

「あっ、オレ、体調悪くてホケン室行ってることになってるから。じゃあな！」

そう言うと、友人はどこかへ走って行ってしまった。

「全部ボスの命令だってことは、わかってました。彼は、友人が僕をいじめる姿を見て喜んでたんです。友達付き合いも大変なんだなあと思って……だから、友人を責められないですよ」

――あなたは辛くなかったの？

「え？」

――小学生の、あなたは辛くなかった？

[沈黙10秒]

――あなたは友人の演技に付き合わされていたんでしょう？

[沈黙12秒]

――唯一の友人だったのに。

「そりゃあ……辛かったですよ。まるで二重人格みたいで、どっちが本物の友人だか、わからなかった。もしかして、一緒にいるときの、仲の良かった友人の方が偽物なんじゃないかって思ったり。二人でいるときも、いつ裏返るかと思って、ビクビクしてた」

――うん。

「でも、仕方ないじゃないですか！！」

――仕方ない？

「友人だって、言っていましたよ」

自宅、僕の部屋。

僕は友人とゲームをしている横で、何気なく聞いてみた。

「なんでボスの命令を聞かなきゃいけないの？」

少しの間が空き、友人はテレビ画面から目を離さずに言った。

「アイツの父ちゃんは、オレの父ちゃんのジョーシなんだよ。だから言うこと聞かないと、父ちゃんがクビになんの」

「へえ」

「大人の世界にも、いじめがあんだって。しかもそっちの方が、インシツらしい」

「ふーん」

「それに、オレも前はアイツをいじめてたんだよ。バイキン、バイキンって。だから今度はアイツのターン」

「何それ」

「この世界のルールってやつ」

「ワケわからん」

「だからこの先、オレがお前に何をやっても、何を言っても、それはウソだからな」

「そうだ、思い出した……全部、ウソだったんだ……なのに……僕は……」

——ん？

「……ある時を境に、友人が僕のことを無視するようになったんです。始めは、いつものフリだと思ってたんですが、それが、いつまでも続いて。学校だけじゃなくって、塾でも話しかけてこないし、僕から話しかけてみてもまるで聞こえてないようなフリをするようになったんです。それで、あの日……」

学校の屋上、体育の時間。

ペアを作ることになり、僕は友人に声をかけた。

「ねえ、いっしょにやろう」

友人は背中を向けたまま、他の友達と話していた。僕は友人の肩をそっとたたいた。

「ねえ、ムシしないでお」

友人は振り返ろうともしなかった。僕は友人の肩を強く揺すった。

「ねえ、ボクたち、友だちでしょ？」

「はあ？ なにカンチガイしちゃってんの？」

「え」

「今まで友達のフリしてやってたんだよ！ もう二度とオレに話しかけんな！！」

伏し目がちに、そう唸るように叫ぶと、友人は僕に背を向け、猿の群れへと帰っていった。

ボス猿が、群れの猿たちと共に、笑っていた。

――たった一人の友人に拒絶された。

「違う。彼は、僕を庇ってくれたのかもしれない」

――庇ってくれた？

「友人から絶交されたその日から、僕はいじめられなくなったんです。そういえば、その時期からでした。友人が、群れの仲間たちからいじめられるようになったのは」

――代わりに、友人がいじめられるようになった。

「自業自得だと思ってました。だから、僕からは何も話しかけなかったし、そばでいじめられても気付かないフリをして。友人だって、僕には何も言ってこなかった」

――それで？

「転校させられたんですよ。濡れ衣を着せられて」

放課後、学校の屋上。

僕は一人で掃除を行い、他の当番は遊んでいた。友人とボス猿集団だった。

友人は首にヒモを巻かれ、自殺ごっこという遊びに付き合わされていた。ふざけているようにも見えたが、友人がいじめられているのは明らかだった。

すると突然、友人はボス猿の顔を拳で殴った。

ボス猿は体をよじらせ、そのまま仰向けに倒れた。友人は首に掛けられたヒモを外し、ドアを開け、屋上から出て行った。

取り巻きたちは言葉を失い、次の支配者が誰になるのかを、目と目で探り合っていた。

しばらくするとボス猿は立ち上がり、自分の着ていた白いコートをその場に脱ぎ捨て、上履きで踏みだした。手下の一人が近づいて聞いた。

「なっ、何やってんの？」

「アイツをハメんだよ！！ ザコが！ ぜってえゆるさねえ！！」

ボス猿の目は血走っていた。

「お前らも踏め！ ボロボロにしろ！！」

「おっ……おう」

手下どもはコートを足で踏んだり、カッターで切ったり、墨汁を掛けたりして、親方の指示通りに作業を進めていった。

僕は危険な空気を察し、掃除を切り上げて帰ろうとしたところ、後ろからボス猿に襟首を掴まれた。

「お前、このことチクったら殺すかな」

この時の彼の言葉には、生々しい狂気を感じた。

「翌日の朝、学校で学級会が開かれました。友人がボス猿をいじめていた実態という題目で。笑っちゃいますよね。事実と正反対のことを、大真面目にやってるんですから。まるで学芸会でし

たよ。みんな、自分の配役を全うしようと、必死でした……僕も含めて」

仕立てられたばかりの真っ黒なボロ雑巾が黒板に飾られ、主演女優の演技じみた絶叫が、教室を支配していた。

「いじめは絶対にあってはならないことです！ 決して許してはいけません！！」

事情聴取をするということで、既に友人は教室から連れてかれていた。

「わかってるんですか！？ これは、あなたの責任でもあるんですよ！！」

「すみません」

P T Aの役員だと名乗るボス猿の母親が教室までやってきて、生徒たちの前で、先生をいじめていた。

後ろの席にいたボス猿が、僕の肩を大げさに揺すってきた。

「なっ！ お前もソーマにいじめられてたもんなっ！」

「え」

「先生、コイツもヒガイ者なんです。ソーマからパシられたり、暴力を振るわれたりしてました。なっ！ そうだよなっ！！」

僕の肩をボス猿の指が抉った。

心臓が高鳴る。

先生が僕の方まで歩いてきて、同じ目線の高さになるように屈んだ。

「そうなのか？ 別家くん」

言うんだ。本当の犯人はコイツだって。

怖い。

今まで指図してたのはお前だろって。

殺される。

けど、言わなきゃ。

「わからない……です」

僕は先生から目を逸らした。

違うだろ。そうじゃないだろ。このままじゃ――

「こういうことは言い辛いよな。ゴメンな」

先生は僕の頭を撫でると、教壇に戻っていった。

後ろからボス猿の舌打ちが聞こえた。

「僕は、たった一人の友人を裏切ったんです。人に見下されて当然なんです」

――そんなことないよ。そのときのあなたには、それで精一杯だったんだよ。

「友人が学校を出ていく日、事情が事情だったので、特にクラスの皆で見送るような機会はありませんでした。でも友人は、僕にだけ会いに、教室まで来てくれたんです」

友人がドアを開け、平然と中へ入ってきた。教室は一瞬で静まりかえった。

「これ」

友人は僕のところまで歩いてきて、ビニール袋を手渡してきた。中に入っていたのは、貸していたゲームソフトと、過去に窓から放り投げられて行方不明になっていたノートだった。

「このノート……」

「お前のを投げるわけねーだろ。本物とすりかえといたんだよ。返すの、わすれちゃってさ」

「そう……だったんだ」

「今まで、ゴメンな」

違う。謝らなきゃいけないのは、僕の方なんだ。僕のせいで、君は……。

僕が言葉を探しているうちに、友人は教室を走って出て行ってしまった。

そして、教室中にドス黒い歓声が沸き起こった。生け贄を血祭りに上げた高揚が、群衆どもを熱狂させたのだ。

先生は見て見ぬフリをして、授業を進めた。

「全部、ウソだったんですよ。友人だって辛かったはずなのに、僕を庇ってくれて、それが本当に申し訳なくて、情けなくて。覚えているのに覚えていないフリをして、今まで誤魔化してきたんです。もし友人が自殺とかしてたら、僕の責任だ」

——あなたのせいじゃないよ。

「僕は卑怯者です。僕みたいなヤツが、人と関わっちゃいけない。どうせまた、最後には裏切るんだ。だったらずっと、一人ぼっちでいい。僕には、友人を助けるだけの、勇気がありませんでした」

とある村にて、勇者は村人たちから話を聞いていた。

「このところ物騒だよ。盗賊団が村を荒しまわっているんだ」

「首領はシミウスっていう黒いマントを着た奴よ」

「店にある武器や防具が盗まれちゃった。それも銀製品ばかりさ」

「今あんたが持っている銀の装備も盗まれるかもしれんぞ、気をつけな」

なかなかクリスタルについての情報を聞きだせずにいる中、勇者は一人の老婆に話しかけた。

「クリスタル？ ああ、知っているよ」

「どこにある？」

「クリスタルは全部で四つ……その中の一つ、風のクリスタルは悪魔の塔にあるに違いない」

（おかしいな。クリスタルの数は、三つじゃないのか？）

ふと勇者は疑問に思ったが、黙って老婆の話を聞き続けた。

「私の息子のシミウスに頼んで、塔の入口を開けてもらうといい」

「シミウスってのは、盗賊団の首領か？」

その途端、老婆の眉間に皺が寄った。

「冗談じゃない。私の息子が盗賊なものか。最近、盗難が相次いでいるらしいが、息子の仕業だとは、とても信じられんよ」

家の外で待っていた魔導士と僧侶は、聞きこみに奔走している勇者の姿に感心していた。

「すごいよねえ、お兄ちゃん。私だったら人見知りしちゃって、上手く話しかけられないもん」

「そうですね。なかなか、何度話しかけても同じ内容のことを答えてくれるものではありません。きっと、イグニス様の巧みな話術と、人徳あってのものなのでしょう。それに引き替え……」

「バッカヤロウ！！ 偽物じゃねえか！！ とっとと失せやがれ！！」

「ウボァ！」

盗賊が道具屋から蹴り出され、道端に転がった。

「あなたは何をしているのですか？」

「〔複製〕つつうアビリティを覚えたから、試しに使ってみたんだよ。道具屋のオヤジにはバレちゃったけどな」

僧侶は、盗賊が手に持っていた二つのアイテムを見比べた。

「そもそも、色が異なるのですが……」

「パッと見じゃわかんねえんだよ、パッと見じゃ」

「さすが盗賊。やることがゲス」

そこへ勇者が戻ってきた。

「わかったぞ、クリスタルの在り処が。どうやら、あの遠くに見える悪魔の塔にあるらしい」

「えっ！」

盗賊が顔色を変えたのを、勇者は見逃さなかった。

「入口が閉まっているから、盗賊団の首領シミウスってやつに開けてもらうよう頼めとき。ヴェントス、お前の知り合いか？」

「いっ、いやぁ……知り合いっつうか、なんっつうか……」

「むむっ、あやし〜」

「白状するなら、今ですよ」

僧侶は盗賊に詰め寄った。

「なっ、なんでもねえよ！ ただの商売相手だ、商売相手。わかったんなら、さっさと行こうぜ！」

悪魔の塔の入口には、盗賊団が築いたであろう砦が構えていた。

盗賊を先頭にして、勇者たちはその中へと入っていく。砦の中は薄暗く、人相の悪い盗賊たちが、首領の周りを取り囲んでいた。

「命知らずの小僧だな。こんな所に何をしに来た？」

首領は漆黒のマントを羽織り、大そうな椅子に、ふんぞり返るようにして座っている。

「この塔に、風のクリスタルがあると、お前の母親から聞いてきたんだ」

首領は勇者たちを品定めするように、怪訝な顔で見まわした。

「俺たち盗賊団は、塔から魔物を一掃しようとしたが逆に返り討ちにあっちまった。悪魔の塔は、それほど危険な場所なんだ。生半可な奴を、中に入れるわけにはいかねえ」

首領は勇者の身に付けている装備を見定め、ニヤリと笑った。

「ふむ……その銀の盾と銀の鎧、そして銀の剣を使いこなせれば何とかなるかもしれない……いだらう、扉を開けてやる」

首領が先導し、勇者たちは固く閉ざされた扉の前まで案内された。

「そこの石造りの扉は一方通行になっていて、中に入ったら最後、向こう側からは開けることができない。おまけに、音も完全に遮断している。だから簡単には出してやれん。かと言って、この塔にいるのは、せいぜい一日が限度だろう。そこで明日の朝……クリスタルが手に入らなくても、必ず扉の前に戻ってくるんだ。その時に、扉を開けてやる」

「わかった。協力感謝する」

首領は、盗賊の方をチラリと見やった。盗賊はその視線に気づき、慌てて目を逸らした。

悪魔の塔、六階。

勇者たちは頂上へ向け、順調に塔を攻略していった。

「あっ！」

先頭を歩いていた盗賊が、通路の先に置かれた、三つの彫像を見つけて立ち止まる。

「ちょっとオレ、後ろ下がるわ」

そう言って、最後尾にいた魔導士の後ろへと回った。

「アタシだって怖いんだけど！」

「何か、嫌な予感がしますね」

「とは言え、今は前に進むしかないからな」

勇者を先頭にして、四人は暗がりの中を進んでいく。

そして、三つの彫像の中心地点まで足を運んだ時、それらの像が一斉に天井へと光を放ち始めた。

「きゃあああ！！」「うっ……」「トラップか！」

勇者たちは魔法の効果で気を失い、その場に倒れた。

「すまねえな」

ただ一人、手元に隠し持っていたブルーネックレスを掲げた、盗賊を除いて。

牢屋の中。

勇者は目を覚まし、持ち物を確認して、装備がいくつか無くなっていることに気が付いた。

「あれっ……お兄ちゃん？　ここは？」

勇者の隣に横たわっていた魔導士が目を開けた。

「どうやら私たちは、ヴェントスの策略に嵌められたようですね」

僧侶は壁を背に、腕を組んで立っていた。

「私も装備が奪われていました。彼に裏切られたんですよ、私たちは」

そこに、盗賊の姿だけが無かった。

「彼は、首領と何か企んでいるようにも見えました。私たちを、彼に売ったに違いありません」

「大丈夫だ。あいつは俺たちを裏切ってなんかない。その証拠に――」

勇者は、服の内側に入っていた赤い結晶を取り出した。

「一番大事なクリスタルは奪われてない。装備だって、銀製のもの以外は手元に残ってる。盗もうと思ったら、簡単に盗めたはずだ」

「だけど、なんでこんなことになっちゃったんだろう。ヴェントス、アタシたちに何も言っていなかったよ」

「まっ、あいつにも何か考えがあるんだよ。少し待ってれば、そのうち助けに来るだろ」

そう言うと、勇者は再び寝ころんだ。

「しかし……」

僧侶は不服そうな顔をしたが、反論を諦めて溜め息をつき、その場に座りこんだ。

塔の一階、盗賊団の砦。

「はっはっは。それで今は牢屋の中か。よくやった、ヴェントス」

「ほらよっ、お目当ての品だ」

盗賊は、盗んできた数々の銀製の武器や防具の束を、テーブルの上に投げた。

「これで父ちゃんを解放しろ」

部屋の隅の柱には、口を塞がれた一人の男が、縄で縛りつけられていた。

「ところで奴らは、この塔を攻略できるのか？」

「はあ？」

盗賊は、思ってもみなかった返答に驚いた。

「なんでも噂では、予言された光の勇者たちが、クリスタルを求めて旅をしているそうじゃねえか。そいつらは、魔王を倒せるくらいに強えらしい」

「さあな、初耳だ」

「さらに聞いたところによると、だ。その中の一人に、お前の名前が入ってるんだよ」

盗賊の体が固まった。

「なあ……お前は、どっちの味方なんだ？」

首領が彼の背後に迫る。

「どっ、どっちって、首領の味方に、ききっ、決まっているじゃねえか！ しっ、知らねえよ！

あんな奴ら！！」

「決めた。お前、奴らと組んで、最上階のクリスタルを取って来い。それまで父ちゃんは、お預けだ」

「なっ……！！」

首領は、勝ち誇ったような、薄汚い笑顔で見返した。

牢屋の外で、何者かの足音がした。

「助けに来てやったぜ」

鉄格子の向こう側には、盗賊が立っていた。

「ヴェントス！！」

魔導士は跳ね起きた。

「ちょっとばかり、そこから離れてくれ」

「えっ、なにになに？」

魔導士が壁際から離れる。

「……行くぜ……おりゃあああああっ！！」

盗賊の拳が壁を突き破り、人が通り抜けられるほどの大きな穴が空けられた。

「まさかの力技！？」

「遅えよ」

勇者は体に付いた埃を払いながら、立ち上がった。

「すまん。ここ来るまでに、ちょっとばかり手間取ってな。うおっ！」

穴をくぐった盗賊の目の前に、杖の先が向けられた。

「なぜ私たちを罠に嵌めたのか、きちんと説明してください」

その杖は光り輝き、今にも魔法を発動させようとしていた。

「わかった、わかった、話すから、話すからあああああ——」

放たれた魔法によって、盗賊は穴の向こう側へと吹っ飛んでいった。

「あら、すみません」

勇者たちは牢屋を抜け、塔の攻略を再開した。

顔をパンパンに腫らせた盗賊が、歩きながら僧侶の回復魔法を受けている。

「シミウスとは騎士学校からの長い付き合いだ。厄介な奴で、なるべくなら関わりたくなんかねえんだけど、奴が首領として辺りを束ねてるから、我慢して付き合いやってんの」

「つまり、あなたは彼の言いなりなのですね」

「仕方ねえだろ。オレが盗賊として食ってくために、必要なことなんだ」

勇者たちは先ほど罠にかかった、三つの彫像の階へと戻ってきた。

「これまで盗賊団は、塔にある仕掛けを使って、通りすがりの旅人たちを罠に嵌めてきたんだ。やったのは魔物のせいってことにしてな。オレも、何人か連れてきたことがある」

盗賊は目の前にブルーネックレスを掲げ、罠の発動を無効化した。

「クリスタルがあるってのも嘘なのか？」

「それは本当だと思う。もともとオレたちは、頂上にあるお宝の伝説を聞いたから、この塔までやって来たんだ。オレは、そのお宝がクリスタルだとは聞かされてなかったけどな。ところが塔に入ってみたら、トラップはあるわ、モンスターは強えわで、なかなか攻略が進まなかった。そのうち、旅人から装備を奪った方が楽に稼げることに気が付いて、攻略そのものを止めちゃったんだよ」

「なぜ私たちを騙したのですか？」

「だから、他に方法が無かったんだって。奴らが塔の入口を塞いでんだぜ？ どうやって中まで入るんだよ。だったら騙されたフリして塔の中に入って、奴らが寝てる夜のうちに攻略して、トズラしまえばいいって考えたのさ」

「しかし、出口は閉じたままなのですが……まさか」

盗賊は目の前にあった扉を、力任せにブチ抜いた。

「へへ……俺様の「壁壊し」にかかれば、ざっとこんなもんさ。こればかりは伝説の勇者にだって、負けるわけにはいかねえからな」

魔導師は呆れながら、空けられた穴を眺めた。

「盗賊なんだからさあ、カギ開けることくらいできないわけえ？」

「オレはそういうスキル持ってねえんだよ！ いいだろっ、通れんだから！！」

盗賊はそう言いながら、後ろ歩きで向こうの部屋へと入っていった。

勇者が前方に何かを見つけて指をさす。

「ヴェントス、後ろ」

「えっ？」

盗賊の後ろには、大きなカマキリが待ち構えていた。

「ウボァ！」

魔物の強烈な一撃によって、盗賊は真横に吹っ飛んだ。

「あーあ」

「どうされますか？」

「俺、ガンガンいこうぜ」

勇者は単独で魔物へと切りかかり、ものの見事に一刀両断した。魔物は、たちまちのうちに消えていく。

「ひえー、瞬殺じゃん。モンスターより、お兄ちゃんの方が怖いんだけど」

勇者は塔の外に広がる風景を眺めた。

「そろそろ頂上だろ、一旦休むか」

「さんせーい」「承知しました」

ボロボロになった盗賊が、這いつくばりながら僧侶の袖を掴んだ。

「アクア、治して」

「手持ちの薬草を使って下さい。私のMPが惜しいので」

「トホホ……」

この時、勇者は気付いていた。自分たちの後ろをつけてくる何者かの気配に。しかもそれが、大勢の人間たちであるということに。

勇者たちは残りの仕掛けを難なく突破し、凶悪なモンスターたちを瞬殺し、いよいよ塔の頂上に続く扉の前まで辿り着いた。勇者は道中で手に入れたブルーアミュレットを掲げ、扉を開けた。

「いよいよだね」

「しゃあー！！ ボスこそはオレ様が倒してやるぜえ！！」

盗賊が一番乗りをしようと、扉の先へと飛び出していった。

「ほんと、学習しないよねー」

魔導師は呆れた様子で、頭の後ろに手を組んだ。

「あれ？ 何もいない？」

盗賊は周りを見回した。

「モンスターの気配は無いな」

中央の台座には、緑色に輝くクリスタルが置かれていた。

「これが、風のクリスタル」

盗賊は台座の前へと進み、クリスタルを手にとった。

「よくやった、ヴェントス」

扉の方から、首領を始めとした盗賊団が現れた。

「シミウス！！」

「さあ、約束通り、二つ目のクリスタルを渡してもらおうか……ここから父ちゃんを落とされたくなければな」

首領は、縄で縛った男を腕に抱えていた。

「ああ、そのつもりだ」

盗賊は、手に持っていたクリスタルを握りしめた。

「えっ……どういうこと？」

魔導士は驚き、振り返った。盗賊の表情には、確固たる決意が表れている。

首領は満足気に微笑んだ。

「と、その前に、お前の忠誠心を見せてもらおうか。まずは、そいつらを黙らせろ」

「……わかった」

盗賊は魔導士の方へと足を向けた。

「やめて……ヴェントス」

魔導士は、目の色を変えた盗賊を前にして、思わず後ずさりした。

「何かほかに、ワケがあるんじゃないの！？ これもまた、冗談なんでしょ？」

「……まいったね。俺はただの半端者なのよ」

盗賊は腰に差していたナイフを抜き取り、逆手に構えた。

「楽しく暮らせりゃ、それでいい。ただ……それだけだ！」

そして迷わず、ナイフを振るった。

[ヴェントスの こうげき！]

「いやああああああああ！！」

魔導士は何の抵抗も出来ぬまま、背中に一撃を受けた。

[テラは たおれた。]

僧侶が彼の行く手を塞ぐ。

「結局あなたは、また私たちを裏切るのですね……」

構えられた杖から、白い光が迸る。

「ならば、受けて立ちましょう」

盗賊は目にも止まらぬ速さで、僧侶の背後へと回りこんだ。

「オレに勝てるつもりか？」

彼女は身動き一つ取れない。

[ヴェントスの こうげき！]

「ううう……あああ！」

[アクアは たおれた。]

勇者は躊躇いながらも、剣を構える。

「よせ……俺は、お前を斬りたくない」

一瞬、盗賊の顔に迷いの色が滲んだ。しかし――

「……ここまで来て、今さら引き返すことなんて……」

ナイフを握る手に、力が込められる。

「出来るもんか！」

[ヴェントスの こうげき！]

勇者は胸を押さえ、右膝を落とした。

「……あ……ヴェ……ヴェントス……この……大バカ野郎がああっ……」

[イグニス は たおれた。]

首領は大満足の笑みで拍手を送った。

「あっはっはっは。なかなか良いものを見せてもらった」

「父ちゃんを解放しろ」

「いいだろう……だが、クリスタルを渡すのが先だ」

首領は手元に男を抱えたまま、右手を差し出した。

(チィ……イチかバチかだな)

盗賊は胸元からクリスタルを取り出した。

「そんなに欲しいなら……くれてやるよ！！」

そしてクリスタルを首領の頭上へと放り上げると同時に、彼の懐を目がけて飛びこんだ。

投げ出されたクリスタルを掴もうと、首領の手が男から離れる。

すかさず、盗賊の腕が伸びる。

[ヴェントスの めすむ！]

[ヴェントスは 父ちゃんを めすんだ！]

[ヴェントスは にげだした！]

「大丈夫か！？ 父ちゃん！！」

口を塞がれた男は繰り返し首を縦に振り、自らの無事を伝えた。

「ふんっ、まあいい。クリスタルさえ手に入れば、こっちのもんさ」

恍惚とした表情で翡翠色のクリスタルを眺める首領に対し、盗賊がニヤリと笑った。

「それが本当のクリスタルだったら、良かったのにな」

盗賊は胸元から、緑色のクリスタルを取り出した。

「なにい！！ どういうことだ！？」

「どうしたもこうしたも、お前に渡したのは偽物だ。一つ目のも含めてな」

「一つ目のクリスタルってのは、これのことか？」

倒れていた勇者が立ち上がり、赤い結晶を取り出して見せた。

「お前!？」

たじろぐ首領。

「芝居にしては、ダメージが大きかったですね」

僧侶が起き上がり、仲間全体に回復魔法をかけた。

「ふっかーつ!!」

魔導士は飛び起き、両腕を上げた。

「なっ……お前ら……」

目の前で次々と起こる計算外の出来事に、首領の思考は停止した。

塔で休憩をしていた時、勇者は盗賊に問いかけた。

「ヴェントス。お前、まだ何か隠し事してないか？」

「ええっ!？ かつ、隠し事なんか、しっ、してねえよ??」

「じゃあ、俺たちの後ろをつけてる奴らは何なんだ？」

「ギクッ!」

勇者の視線の先には、物陰に隠れようとして隠れきれない下っ端たちがいた。

「たしか、盗賊団の奴らは寝てるはずだったよなあ？」

盗賊は溜め息をつき、肩を落とした。

「……ちょっと、こっち来てくれ」

他の仲間や、盗賊団の連中からは見えない場所へと、勇者を引っぱって行く。

「実は、頂上でクリスタルを手に入れたら、首領に渡すことになってんだ。もちろん本物は渡さねえよ？ 複製した偽物を渡すつもりだ」

申し訳なさそうな素振りで訳を話す盗賊を見て、勇者は顔を曇らせた。

「なあ。どうしてお前は、そこまでして奴に怯えてるんだ？ ただの商売相手なら、手を切ってもいいはずだろ？」

「……オレの……父ちゃんがさ。アイツの人質になってるんだ。商売で失敗して、借金背負ってさ」

盗賊は懐から銀色に輝くナイフを取り出し、それに視線を落とした。

「オレは刺し違えてでも、アイツから父ちゃんを取り戻す。だから、オレ……」

小刻みに震える唇から、声が絞り出される。

「お前らと一緒に、旅を続けられないかもしんねえ……」

勇者は友人の両肩を力強く掴んだ。

「どうして相談してくれなかった！ どうして一人でやろうとした！ 俺たち、仲間だろ！ 友達だろ！ どうして、どうして黙ってたんだ！」

そして、友人の目を真っ直ぐに見つめた。

「“俺たち”で取り戻すんだ！」

「こんなことしてどうなるか……わかってるよなあ？」

首領は語気を強め、盗賊を睨んだ。

「もう後戻りは出来ないぜ？」

「ああ、望むところだ」

勇者が剣を引き抜き、首領に向かって駆け出し、攻撃を仕掛ける。

「ふん！ この鉄壁のマントをもってすれば、貴様の攻撃など……」

[イグニスの こうげき！]

「ぐおおおお！！」

首領のマントが剣の軌跡に斬り裂かれた。

「まさか、そんな……そっ、その武器は……」

勇者の手には、銀色に煌めく一本の剣が握られていた。

「あいにくだが、それは出来ない」

盗賊は力無く答えた。

「アイツの着ている黒いマントは、どんなに強力な攻撃も受け付けられないんだ……この、銀で作られた武器を除いてな」

手元のシルバーナイフが、虚しく握られた。

「なるほど。それでアイツは自分の弱点になる銀製品を、片っ端から奪っていったんだな」

「ああ……だから――」

「あるんだけどな、その銀の武器」

勇者は道具袋からシルバーソードを取り出した。

「お前！ それ、どこに隠してたんだよ！！」

「隠してたんじゃない。そこの宝箱に入ってたんだ。この階は、まだ攻略されてなかったみたいだな」

勇者は剣を肩に担ぎ、盗賊の肩に腕を回した。

「お前は一人で抱えこみすぎなんだよ。俺たちに話してくれれば、解決策が見つかるかもしれないだろ？」

「イグニス……」

「お前は父ちゃんを助けることだけを考えろ。あとは俺たちが、何とかする」

「すまねえ……」

盗賊は目を潤ませた。

すると勇者が何かを思いつき、悪戯っぽく笑った。

「そうだ。裏切るフリってのはどうだ？」

「おおのおおれえええ！！」

首領は負傷した肩を押さえ、怒りに震えた。

「じゃっ、あとはボコるだけだな」

「おうよ」

勇者たちは戦闘陣形に並んだ。前衛に勇者と盗賊が構え、後衛に僧侶と魔導士が控える。

「お前たち、なにボサッと見てんだあ！！ さっさとかかれええ！！」

「おっ、おう！」

下っ端集団は、前衛の二人を取り囲んだ。

盗賊が、背中合わせになった勇者に問いかける。

「多勢に無勢だ。どうする勇者？」

勇者は振り返ることなく、その背に相棒の息遣いを感じた。

「ガンガンいこうぜ」

「りょーかい！」

勇者と盗賊は二手に分かれ、敵の群れに斬りこんだ。

盗賊は疾風怒濤の連続攻撃で下っ端たちを薙ぎ払い、勇者は首領の相手を買って出た。

魔導士と僧侶は後方から、強化と回復の魔法を繰り返す。

下っ端たちは次々と倒され、首領は刻々とHPを削られていく。

勇者と盗賊は息の合った連係で、敵の集団をまとめて蹴散らし、格の違いを見せつけた。

[シミウスは たおれた。]

どこからともなくファンファーレが鳴り響き、勇者たちは勝利のポーズを決めた。地平線から顔を出した朝陽が、彼らの横顔を染めていく。

「またお前に、借り作っちゃったなあ……」

盗賊は、緑色に輝くクリスタルを取り出し、勇者に差し出した。

「別に、借りでも何でもないさ」

[イグニス は 風のクリスタルを てにいれた!]

勇者はそれを懐に放りこむと、戦友に向かって右手を上げた。

「友達ってのは、苦しい時に、助け合うもんなんだぞ」

その意図を察した友人は、照れくさそうに手を交わした。

「お取込み中のところ、恐れ入ります」

僧侶が勇者の側へとやってきた。

「どうした？」

「先ほどあちらに、正体不明の黒いゲートが出現したのですが……」

僧侶の視線の先には、身の丈ほどもあろうかという黒い渦巻が浮かんでいた。

「ああ、よくあるじゃないか、ああいうの。塔の一階に繋がってるんだろ？」

「そおそお、だから大丈夫だってえ。お腹も空いたし、早く帰ろうよお」

「嫌な予感がします。ヴェントス、まだ何か隠し事は？」

「もうねえよ」

「まっ、とりあえず入ってみればわかるだろ」

「先ほどもそう仰られて畏にかかっ……て……」

勇者はゲートの方に歩いていき、渦の中へと消えていった。

「はぁ……私たちも参りましょう」

ゲートを抜けた先は、全くの別世界だった。

世界全体に重たい空気が漂っており、辺りは昼とも夜ともつかぬ薄暗がりに覆われていた。かろうじて周囲には木々が見え、ここが森の中であるということだけがわかった。

「ここは、いったい……」

「ヤバいここに来しまった……」

「なんか怖いんだけどお……」

「しっ……」

先頭を歩いていた勇者が立ち止まり、人さし指を口に当て、仲間たちの歩みを止めた。

「何か来る……後ろだ」

地面を叩く蹄鉄の音が、一定のテンポを刻みながら迫ってきていた。

霧の向こう側から、ボンヤリと影が浮かび上がる。黒き馬、黒き鎧、黒き骸骨。

勇者たちは武器を出して身構える。

とうとう目の前に、骸骨の兜を被った黒騎士が姿を現した。漆黒の馬が前足を高く振り上げ、威圧的な重低音で嘶いた。

黒騎士は斧を構え、馬の上から四人を見すえている。その後ろにも、三騎の仲間が控えていた。

勇者は直観から、今の自分では黒騎士たちに敵わないと判断を下した。

「逃げるぞ」

四人は木々をかき分け、一目散に森を駆けた。道無き道を、無我夢中で走った。

しかし黒騎士たちは、執拗に勇者たちを追い続ける。威嚇するような馬の鳴き声が、森の中を木霊する。

「アイツら何者だよ！！」

「おそらく、闇の世界のモンスターだ」

「逃げ切れるのでしょうか？」

「さあな！」

突如、先導していた勇者の目の前を、金の鬣が横切った。その正体は、鋭い牙を剥き出しにした、大きな猪にも見える、黒き魔獣だった。

勇者は慌てて足を止め、進路を変える。

「こっちだ！！」

なおも勇者たちは木々の隙間を縫って走った。

魔導士の表情に疲れの色が見え始め、勇者との距離が離れていく。

「もうダメ……走れないよう……」

とうとう魔導士はその場に手をつき、倒れこんでしまった。

「テラ！」

勇者は引き返し、魔導士を背負った。彼方から、蹄の音が迫り来る。

「これまでか……」

「なーんか追われてるみたいだけどー？」

勇者の目が、声の発信源を追った。木の上に、何者かが座っている。白い衣を纏い、白い杖を持ち、白い仮面で目元を隠した、さながら賢者という風貌の女性。

「今度は何なんだよ……」

盗賊はウンザリした顔で、膝に手をついた。

「お姉さんが、あなたたちを助けてあげよう」

賢者は二匹の白い蛇が巻きついた杖を振るい、勇者たちの目の前に、先ほど目にしたものと同様の、黒い渦巻を出現させた。

「さあ、どうする？」

賢者の口元は、まるで勇者たちを試すかのように、笑っていた。

勇者は視界の端に、追ってきた黒騎士の影を捉えた。

「行くぞ！」

勇者の掛け声と共に、盗賊と僧侶もゲートの中へと駆けこんだ。

倒れこむようにして出てきた先は、女王の住まう城の付近、とある丘の上だった。四人が出てくると同時にゲートは閉じられ、消えていった。

「助かっ……た？」

「ふうー、危なかったあー」

「それにしても、先ほどの賢者は何者なのでしょうか？」

「さあな。ただ一つ言えることは……」

勇者は眼下に広がる、この国の風景を眺めた。

「まだ俺たちには、知らないことがあるってことだ」

白衣の賢者は自らにかけた魔法を解き、黒衣の邪神官へと姿を変えた。

黒騎士が邪神官の前で馬の歩みを止め、邪神官に手を取られながら、馬から下りる。

「あなたこそが魔王の希望、世界統合の鍵」

邪神官は、片膝をついた黒騎士から恭しく捧げられた、闇のクリスタルを手にとった。

「残るクリスタルは、あと二つ」

第三章

【リアル】

昼間なのに眠れない。

生活リズムが狂ってしまった。いや、正されたと言うべきか。起きていても特にやることなく、ただボーッとゴロゴロしてやり過ごす。

〈この先、どうするんだ？〉

死神がゲームをするようになった。見ていたら、自分もやりたくなかったらしい。今プレイしているのは、64版『ゼルダの伝説 時のオカリナ』だ。

〈さんきゅ〉

死神は再び背を向けて、ゲームの世界へと帰っていった。最近、彼の後ろ姿がボンヤリと見えるようになってきた。こいつの身体は意外と小さい。まるで子供だ。

〈なあ。この真ん中の三角形には、何があるんだ？〉

「真ん中？」

死神はテレビ画面を指でなぞっている。トライフォースの中央、空虚な逆三角形。

「何も無いよ」

〈いや、そんなはずはない。きつとここには、何かが隠されてるんだ。一番大事な、大切な、何かが〉

「厨二か」

そんなことを考えてた時期が、僕にもあったよ。

〈おい、携帯鳴ってるぞ〉

携帯の画面に「トン子」と表示されていて、気が滅入る。久しぶりに再会してからというもの、トン子と、もう一人のソーマから、怒涛の勢いで連絡が届くようになっていた。正直、かなり鬱陶しい。

〈お前にも女友達がいたんだな〉

「友達じゃない。中学時代の部活の後輩だよ」

トン子というのは、僕が勝手に付けたアダ名だ。本名は川蟬朋子(かわせみともこ)。で、中学の時は丸々と太ってたから豚子。もちろん本人には言ってない。部員としての彼女の記憶は、剣道がド素人だということと、八重歯と、何にでもマヨネーズを付ける重度のマヨラーであることを除いて、他に何も無かった。

この前、偶然カラオケで出くわした時は驚いた。まず原型を留めてないほどに痩せてたし、化粧をして、髪も染めてたから、声を聞くまで本人だとは気付けなかった。

その前に、どうしてソーマとトン子が繋がってしまったのかがわからない。片方はネットの知り合い、もう片方はリアルの知り合いだったのに。世の中わからないことだらけだ。

招待されたSNSから二人の履歴を調べてみると、ソーマとトン子の仲良さげな写真が見つ

った。それも大量に。きっと、トン子もソーマの餌食になったんだろう。

〈羨ましいか？〉

「誰が？」

〈その女ったらしの銀髪が〉

「別に」

〈イケメンで、コミュカもあって、女には困らないんだろうな。食っちゃ捨て、食っちゃ捨てしてるんだろうな〉

「興味ないね」

〈嘘だ！ お前は嘘をついている〉

死神の顔と思われる部分がグニャリと伸びて、こちらに近づいてくる。

〈俺にはわかる。もっと素直になれよお〉

「僕にとって、恋愛はリアリティが無いんだよ。“遠い国で流行ってるファンタジーな文化”みたいな。所詮モテる奴なんて一握り、イケメンに生まれて、たくさん愛されてきた奴らだけが楽しめる文化なの」

それにもう、コリゴリなんだよ、そういうの。

〈可哀想に。お前は甘い甘い恋の味を知らないまま、死んでいくんだな〉

「はいはい」

怒ったら負け。怒ったら負け。

〈そーいや。お前、遺書は書いたのか？〉

「書いたよ」

一通は警察宛て。一通は家族宛て。一通は鏡さん宛て。

〈オトモダチには書かなくてもいいのか？〉

「書いた。メールだけど」

〈見せてみるよ〉

死神に携帯を手渡した。

[これから僕は死にます。さようなら]

(添付：首吊り用ロープに頭を入れたところを後から撮った写真)

〈うーん。なんか、インパクトに欠けるな〉

「インパクト？」

〈もっと、こう……『これはヤバい』ってのが欲しいんだよなあ〉

「『リスカして血が滴り落ちてる』みたいな？」

〈いいね！ それだよ！！〉

急にテンションが上がったよコイツ。もう手にはカッターを持っている。

「いやあ、さすがに、ちょっとそれは……」

〈は〜い、じゃ〜、構えて〜〉

死神に左の手首が掴まれ、刃を剥き出したカッターが添えられた。

「えっ、ホントに切るの？」

〈ホントに切るよ〉

カッターがスライドし、鮮やかな赤い線が走った。

「いってえええええええ！！」

後から鋭い痛みが追ってきた。意識が切り口に集中していく。右手で傷口を押さえる。

「ホントに切るなよ！！」

〈アハハハハハハ〉

「痛い！ 痛い！ 痛い！ 普通に痛い！」

誰だよ！ 気持ち良いとか言ったの！！

血がポタポタと垂れていく。

「どうしよう……血が止まらないんだけど……」

〈さあな。死んじゃうかもな〉

左手で携帯を操作し、応急処置の方法を検索しようとするも、手が震えてどうにもならない。

血がポタポタと垂れていく。

「とりあえず血い止めなきゃ……ほ、包帯！」

肘を使ってドアを開け、階段を駆け降り、救急箱の入った収納を開けた。

けど、無い。探しても探しても救急箱が見当たらない。

「ここにあったはずなのに……」

片っ端から収納という収納を調べていくも見つからない。

血がポタポタと垂れていく。

「何やってんの？」

背後から声がした。振り返ると、一人の女の子が立っていた。いやに見覚えのある顔だと思ったら、妹だった。

「あっ……」

突然のことに言葉が浮かばない。

それでも妹は目の前の状況を瞬時に理解したようだ。腕を引っ張られるままに連れて行かれた先は台所で、妹はノズルを上げて水を出した。

「手首出して」

傷口を流された時はヒリヒリと痛んだが、兄としての最後のプライドが勝り、なんとか堪えることができた。

妹は棚からラップを取り出すと、傷口の周りをグルグル巻きにしてセロハンテープで留めた。乱暴ながらも、実に手際が良くて感心してしまった。

「あれっ……包帯は？」

「私がいちいち使ったから、無い。これで十分」

妹は左の袖をまくり、手首を見せつけてきた。そこには何本もの横線が刻まれていた。これでも兄妹だったのに、なんで今まで気付かなかったんだろう。というよりも何年ぶりだっけ、コイツと二人で話したの。

「大丈夫なのか？ その……外を、出歩いてても……お腹とか」

「はぁ？ 大丈夫だよ歩くぐらい。それよりも自分の心配したら？ パパ、マジでアンタたち追い出す気だから」

「そうだな」

「死ぬなら外で死んでよね、事故物件になるし。それと、この血の痕も自分で拭いておくように。すみやかにね」

「わかったよ」

「ええええ！！ 何だよおお！ これ血い！？」

玄関のあたりで大きな声がした。野太く低い、大人の男の声。

「うわっ、大丈夫ですか！？ 血まみれですよ！！」

やたらとガタイが良くて日焼けをした、スーツ姿の男が現れた。

「ちょっと、ケガしちゃって……」

「ああ……お兄さんも……」

憐れむような視線が、胸に刺さる。ってその前に、誰だよ、このガテン系は。お兄さん？

「なんでもねえよ、こんなもん。かすりキズだって」

妹は置いてあった荷物を肩に担いだ。

「あっ、申し遅れました。私、優佳さんとお付き合いさせていただいております、モリヤと申します」

ご丁寧な素振りで名刺が差し出された。守屋圭(もりやけい)と言うらしい。

「あ、どうも」

そうか、この人が例の彼氏か。結婚するんだっけ？

「お兄様はご病気ということで、一度もご挨拶に伺えず、申し訳ありませんでした。その後、具合は良くなりましたか？」

「あー、あれ嘘だから。ただのひきこもり」

この妹、容赦ない。

「ほら行くよ」

「でも、そういうわけにもいかないよ」

「いいよいいよ。どうせコイツ、悲劇のヒロイン演じて酔ってんだよ。相手にすんな！」

そう言うと妹は背を向け、歩いて行ってしまった。

「あっ、ちょっ、ちょっと優佳！！ そっ、それではまたの機会に、あらためてご挨拶に伺いますのでっ。失礼しますっ」

男はキチンとした礼をすると、慌ただしそうにして出ていった。

それから部屋へ戻り、ベッドに倒れると、どっと疲れが押し寄せてきた。あれが妹との最後の会話になるんだったら、もっと色々とお話しておけば良かったな。

そうだ。早く血痕を拭きにいかなきゃ。でも面倒だなあ。事故物件？ 知るかよ。どうせ死ぬんだし、それぐらい許してくれよ。

さっきから鳴ってるのは携帯か？ バイブの長さからして電話だ。しかも鳴りっぱなし。画面を見ると、もう一人のソーマだった。コイツもしつこいな。

携帯の電源を切った。

外で大きな音がして、目が覚めた。何かが何かに衝突して割れた音だ。家のすぐ近く、というよりも家の玄関先か？ バイクのエンジン音と、人の声が聞こえる。

慌てて跳ね起き、カーテンの隙間から玄関前を覗いた。

ヘルメットを脱ぎ捨てる二人の人影が見える。一人は銀髪、もう一人は金髪。

「ソーマとトン子？ ……えっ、なんでウチ知ってるの？ っていうか何しに来たんだよ！？」

二人は玄関のドアを開けて中へと入ってきたようだ。どうやら妹は鍵をかけて行かなかったらしい。下の階から、叫び声と足音が聞こえてくる。部屋のドアに耳を当てる。

「ショオオタアアア！！ どこだあああ！！ 生きてたら返事しろおおおお！！」

「せんぱああああい！！ 死なないでええええええ！！」

なんで僕は死ぬことになってるんだろう？ ああ、血の痕を見られたのか。いや、その前に、なんで二人がそれを知ってるんだ？ もう訳がわからない。二人が階段を登ってくる音がした。

「マズい、隠れないと。でも、どこに？」

とりあえず布団に潜る。ヤバい、部屋の鍵を閉め忘れた。

「ショータ！！」「先輩！！」

ドアが豪快に開けられる音がした。

布団を剥がされるも、死んだフリを続ける。

[へんじがない。]

[ただの しかばねのようだ。]

とはいかず、体を乱暴に揺さぶられた。

「おい！ しっかりしろ！！」

「動かさないで！！ 呼吸は？ ってゆうか、リスカしてる？」

「救急車か！？」

「でも、ちゃんと処置してある……」

もう限界だ。生き返ろう。

「ザオリク」

目を開けて勢いよく起き上がる。二人の驚いた顔が、横目に見える。一瞬、時間が止まったかのように感じられた。そりゃあダメだよな。死人が復活の呪文を唱えちゃあ。

「生きてたあああ！！」

「せんぱああい！ 死んじゃダメエエ！！」

両脇から二人にガシッと抱きつかれた。

「苦しい苦しい、死んじゃう死んじゃう」

これは冗談じゃなくて、わりとマジで。

血痕の汚れは早めに落としておいた方が良いというトン子からの助言があり、血の付いた衣類を洗濯機に入れた後、三人で手分けして掃除した。二人は訳も聞かず、淡々と作業を手伝ってくれた。

掃除が終わり、台所から部屋にジュースを運んでくると、二人は部屋の中を漁っていた。

「せんぱあ〜い。私があげたチョコ、食べてくれなかったんですかあ〜。せっかく作ったのにい、ショックなんですけどお〜」

トン子は、二年前に自分が送ったチョコを、自らの手で発掘したようだ。

「ああ、それ、押入れを整理してたら出てきて……って、それ開けて大丈夫か？」

トン子はチョコの匂いを嗅いでいた。

「あっ、でも意外と原型は留めてますね。ちょっと歪んじやったけど。まあ、また作り直してきますよ」

いや、もういらないんだけど。

「『闇を胎児が 駆け抜ける 母を殺して 立ち上がる』」

「うわあああああ！！！」

ソーマの手から奪い返した。厨二的ポエムがギッシリと詰まった、黒歴史ノートその二を。

「なかなか良い詩じゃーん」

ソーマがニヤニヤ笑っている。

「勘弁してください」

「いや、そういうのも才能なんだって。俺、バンドで歌詞担当やらされてんだけど、そういうの書けなくってさあ、まいてんだよねえ。お前、代わりに書いてくんねえ？」

「いえ、お断りします」

ソーマから猛然と距離を詰められ、馴れ馴れしく肩に腕を回された。

「だからさあ！ その敬語やめろってえ。一緒にタイタン狩った仲だろお？」

この人の絡み、ホントめんどくさい。

「そういえばトモから聞いたんだけど、お前ら先輩後輩だったんだな！」

「はあ……」

「先輩スゴかったんだよお。強すぎて、一年の時から部長を任されるくらい」

「へえ！」

「あの学校が弱かったんだ」

「でも先輩、県大で優勝したじゃないですか！」

「スゲェじゃん！」

「上には上がいるって」

「しかも学校一の美人さんとも付き合ってたし」

「マジで！」

「とっくの昔にフラれたよ」

その話は地雷だから止めてくれ。

「というか、なんで二人はウチに来たわけ？」

再び一時停止ボタンが押されたかのように、二人の表情が固まった。

「なんで……って。お前が俺たちにメールしてきたんじゃん……これから死にます、さようなら……って」

「アタシたち学校でそれ見て、先輩に電話したんだけど繋がらなくて、心配で抜け出してきたんだよ！」

「えっ……メール？ 送ってないけど」

「なに、じゃあこれ、誰かのイタズラなの？」

ソーマから携帯を見せられる。信じがたいが、それは確かに僕のメアドだった。それに、例の首吊り写真も添付されている。間違いなく自分で書いておいたメールだ。けど、それはまだ送ってないはず。もしかしたらあの時、死神が送ったのか？ でも、なんで？

「トモに聞いてもお前んち知らないって言うから、メールに付いてた写真の位置情報から、住所を割り出したんだ」

情報化社会こわい。

「で、玄関あけたら血まみれじゃん？ 正直、心臓止まりかけたね」

「でも良かったあ、生きててくれて。もう会えないかと思ったよお」

再び、部屋の中に沈黙が満ちる。

ソーマの頬から、何かが零れ落ちた。

「俺さあ……前にも友達が逝っちまったんだよ。学校の屋上から……飛び降りて」

その腕からは、震えが伝わってくる。

「メールが、来てたんだ……今まで、ありがとう…って……でも俺、そんなとき外で遊んでて、気付かなかった……止められたかも……しんねえのに……」

いつの間にか、トン子も泣いていた。

「だからもう、嫌なんだよ！ お前にも、死んでほしくないんだよ！！」

なんだこの茶番劇は。二人に巻き込まれて、もらい泣きしそうになってる自分もいた。

「ごめん……」

「先輩……ほら、お揃い」

トン子は右腕のリストバンドを外し、手首の生々しい傷跡を見せてくれた。さっき見たばっか

だよ、そんなの。

トン子の不器用な笑みが痛々しかった。なんか嫌だなあ、こういう空気。もう帰ってくれないかなあ、二人とも。何か理由をつけて……そうだ。

「ごめん。もう時間だから支度しなくちゃ。いま、カウンセリングに通ってて」

ホントは今日じゃないんだけど。

「そっか。じゃ、帰るか」

「先輩、また来るからね」

二人を玄関まで見送り、鍵を閉めた。

廊下の隅に、赤黒くなってしまった痕が残っていた。

インターホンが鳴る。

「せんぱあ〜い。作ってきましたよお〜。チョコレート」

玄関のドアを開けると、買い物袋を提げたトン子がいた。

「はい、どうぞ」

手元にハート型の箱が戻ってきた。

「いや、まだバレンタインじゃないんだけど……」

「これは二年前の分ですよ〜。次のバレンタインには、また新しいのあげますから」

「はあ……」

あの日の翌日から、トン子がウチへ寄るようになっていた。バイト帰りの夕方に。今日で三回目だ。

予定日まであと一週間だし、本音では来ないでほしかったけど、トン子の楽しそうな顔を前に、強くは言えなかった。

いつもトン子は夕食を作りに来て、それを食べながら当たり障りの無い話をし、夜には帰っていった。

「ちゃんと栄養を摂らないと、鬱になっちゃいますからねえ〜」

「マヨネーズじゃ太りませんってえ〜」

「そういえば髪、伸びましたよねえ〜。よかったらアタシ切りましょうかあ〜？ ガーッて」

あらためてトン子の顔を見る。以前は肉で埋もれていた輪郭が、いまではハッキリとわかる。この娘は可愛い……のか？ 決して美人とは言えないが、愛嬌はあると思う。

「ちゃんと話、聞いてますかあ〜？」

「お前さ、なんでこんなことしてんの？」

「はい？」

トン子の表情が半笑いで固まった。

「だってお前、彼氏いるわけじゃん」

「誰に？」

「お前に」

「いないですよ！」

「ソーマと付き合ってるんじゃないの？」

「ソー君は、ただの友達ですよ。というか、友達の友達。どうしてそう思ったんですかぁ？」

「いや、美人局なんじゃないかと思ってさ。それなら俺、金無いから」

「ツツモタセ？」

「ヤクザが自分の女に浮気させて、男から金を巻き上げる行為」

「どこで覚えたんですか！？ そんな言葉！！」

「言っとくけど、俺に尽くしても何も得しないからな」

トン子は苦笑している。

「やだなあ、恩返しですよお」

「いや、俺、お前に何もしてないけど」

「してくれましたよお。ボッチだったアタシを、部活に勧誘してくれたりー」

新入部員が辞めた穴埋めで必死だったんだ。

「部活でも浮いてたアタシを、輪の中に入れてくれたりー」

お前が抜けたら廃部だったから。

「アタシがハーフで悩んでいた時も、『ハーフは美人が多い』って慰めてくれたりー」

お前のことじゃなかったんだけどな。ってお前、ハーフだったの？ たしかに肌の色が違う
と思ってたけど、ずっと日焼けだと思ってた。

「誕生日に、マヨネーズくれたりー」

ああ、あったな、そんなことも。

「先輩はアタシに、いっっぱい優しくしてくれたので、そのお返しです」

なるほど。マヨネーズ、美味しかったんだな。

急に黙りこくったトン子の顔が、みるみるうちに赤くなっていった。

「それに……それだけじゃ……なくてですね……」

途端に空気が重くなっていくのがわかる。

「先輩……なんで来てくれなかったんですか？ ……卒業式の日……アタシ待ってたのに！」

「なにそれ」

「なにそれ……って。アタシ、言いましたよね！？ あの最後の朝練で、式が終わったら、剣道
場に来て下さい……って」

「えっ、初耳なんだけど……」

それは全く記憶に無い。

「うそ……あれえ？ やっぱ聞いてなかったぁ？ ……そんなのってないよお……アタシ、そ
れで……」

トン子は勢いよく、こちらに向き直った。

「じゃあ言う！ 今、言う！！」

嫌な予感がする。

「アタシ、先輩のことが好きでした！！ 今も好きです！！ 大好き！！！」

ほらきた。

「いや、困るし……そんなこと言われても……」

脳内にメッセージウィンドウが開く。

[なんと トン子が おきあがり]

[かのじょに なりたそうに こちらをみている！]

[かのじょに してあげますか？]

[はい]

[>いいえ]

なんて返そう。

「もうすぐ俺、死ぬから」

ストレートすぎるだろ。

「それでも、彼女いるんだ」

バレるわ。アホか。

「今でも忘れられない人がいて……」

よし、これだな。

「だから、ごめん……」

「そう、ですか……」

トン子の顔から、生気が抜けていくように見えた。

「私、諦めた方が、いいですか？」

言葉が出ない。何も考えられない。胸が締めつけられる。

——『心を許してるの、君だけなんだよ……ホントだよ……』

背中傷跡。

——『待って！ 行かないで！！』『行ったら私、死ぬから』

クスリ。カッター。ゴスロリ。

——『いつまでも女に夢見てんじゃねえよ！ 童貞が！！』

駐車場。黒いワゴン。

我に返った時、そこからトン子の姿は消えていた。

「モテない人って、モテなかったが故に、永遠にモテないんですよ。人に愛されたことがないから、自分が愛されたい一心で、相手のことを思いやれない。愛されなかった可哀想な自分は、無条件に人から愛される権利があるはずだと思いこむ。だからモテない。誰だって、自分が一番かわいいですもんね。愛してほしいだけの人は、避けられて当然です」

「なるほど」

「で、モテない人が経験を積めない間に、モテる人はドンドン経験を積んでいって、差が広がる。モテる人は増々モテるようになり、モテない人は増々モテなくなる。永遠にモテないまま。頑張るだけ無駄」

「でも、あなたは告白されたんでしょう？」

「向こうは本気で好きになっちゃいけないですよ。雨に濡れた可哀想な捨て犬を、拾ってあげようとするくらいのノリ」

「そうかなー」

「もしくはトラップってのもありえますね。ソーマと繋がってるみたいだし。笑いものにされるのがオチですって」

「どうかなー」

「だって、それまで何も無かったんですよ？」

「その気が無いフリをしたのかもしれない。あるいは、連絡が途絶えてしまったとか」

溜め息が漏れる。

「もう……わかんないです。人が、何を考えてるのか」

「うん」

「本当の鏡さんは、どっちなんですか？」

「“どっち”って？」

「全然違うじゃないですか。ここにいる時と、外にいる時と」

「ああ……」

「外で見た時の鏡さんは演技なんですか？ それとも、あっちの方が本当で、こっちの方が演技なんですか？」

「どっちも私なんじゃないかなー。カウンセラーとしての私、プライベートの私」

何だよそれ。

「それどころか、娘としての私、彼氏の前での私、ゲーマーとしての私、コスプレしてる時の私――」

「鏡さん、レイヤーなんですか？」

「ええー……見ちゃうー？」

鏡さんは携帯を出して、写真を見せてくれた。

「TOEのファラ、FFVIのバツツ……」

年齢どころか、性別まで違うし。

「みんな、その場その場で適当な役割を演じてるんじゃないかなー。どの自分も自分の一部なんだって思えると、気が楽になるよー」

カウンセリングが終わって家に戻り、部屋に入ると、頭がグラグラしてきた。いつものやつだ

。頭の中がグチャグチャになる。

隣の部屋から、誰かが電話をしている声が聞こえる。女の声？

「そーそー。あんまりにも可哀想だったから冗談でコクってやったらさあ、真に受けて勘違いしちゃってんの、ウケるー」

トン子の声だ。

「だいたいさー、あんなヤツ好きになるわけないじゃーん。キモいきもいきもい。マジないわー。思い上がんなっつーの」

「ひきこもりニートで、コミュ障、メンヘラかまってちゃん。おまけにブサメン童貞とか、コンボしすぎ」

「まっ、見てて面白いから、もうちょっと遊んであげよっかなあ。何かあったら、また報告すんねー、じゃねー」

電話が切れた。

腹の中のもものが暴れて、外に溢れ出そうになる。口を上げて手を当て、必死に堪えると、目が潤んだ。

死神の嗟う声がする。

〈お前、なんで生きてんの？〉

【対話】

「僕は非モテなので」

———モテないの？

「特に中学の時ですね。いろいろと言われてきました」

少女A「恋愛対象には見れないよお」

少女B「ちょっと……無理」

少女C「うっわ、キモい」

少女D「友達のままでいようね」

少女E「もう私に話しかけないで」

「その度に、剣道で強くなれた気がします」

———はは。

「美人ばかり好きになるんですよね。周りからは勇者だと崇められました」

———美人ばかり好きになる。

「というよりも、美人しか好きになれないんです。これも、コンプレックスの裏返しなんじゃないか？」

———コンプレックス？

「だって醜いでしょう？ こんな顔」

———そうは思わないけど。

「なるべく鏡とかガラスとか、自分の顔が映るようなものは見ないようにしてます」

———ふむ。

「写真とかも撮られたくない」

———逆に、自分の身体で自慢できる部分を、一つ挙げるなら？

[沈黙12秒]

「……声、ですかね。一度だけ、いや二度か。褒められたことがあります」

———良い声してるよね。誰に褒められたの？

「知り合いと……あと……」

———あと？

「……彼女に」

———彼女いるんだ。

「もっ、もう、とっくの昔にフラれましたよ！ ……それに、僕はただ、弄ばれただけだったから」

——ほう。

「結局、最初から最後まで、僕の片想いでした」

——どんな人？

「学校一の美人と言われていた人で、モデルみたいに華奢な体と、育ちが良さそうな黒髪ロングのストレートに、男子たちの目は釘付けでしたね。僕はショートの間の方が好きだったけど」

——いつ知り合ったの？

「彼女も小学生の頃、僕と同じ塾に通ってたんです。いつも一番前の席に座って、誰とも話さずに、じっと座ってました」

塾の教室の後ろで、僕と颯真たちはコソコソ話し合っていた。

「おい、アイツのカタ、たたいて来いよ」

颯真は、前の方に一人座っている、ショートカットで眼鏡を掛けた女子を指さした。

「ええっ！ やだよ」

僕らの間で、人の肩をたたき、人さし指で振り向いた頬をさすという遊びが流行っていた

。

「いいから行ってこいよ。やらないと、またナカマハズレにすっからな！」

僕は溜め息をついて、仕方なく彼女の後ろまで歩いていき、人さし指を立てた手で彼女の肩をたたいた。彼女は振り向き、予想通り、頬に指が食いこんだ。

「何ですか？」

「へ？」

彼女は、頬に指が食いこんだまま、まるでそれに気付いていないかのような真顔で答えた

。

「何か、私に御用ですか？」

その大きな瞳に見つめられた途端、僕は恥ずかしさで消えてしまいたくなった。

「なっ、なんでもないです！」

僕は手を放して、急いで颯真たちのところまで戻った。

「こっわあ」

颯真たちは大げさに身震いをした。

それ以来、僕の方から愛女泉純(まなめいずみ)に話しかけることは無かった。もちろん彼女の方からも。

——その時から彼女のことは好きだった？

「うーん。好きではあったと思うんですが、その感情が恋愛だったかどうか……どちらかというと、同族意識の方が強かったと思います。同じ痛みを抱えているように見えた、というか」

——ふうん。

「でも彼女は僕のことなんて全く覚えてませんでした。入学式の日ですれ違ったんですが、見事にスルーされて。それから三年で同じクラスになるまで、一言も話さなかった」

———全く？

「声を、かけられなかったんです。まるで別人みたいにガラリと雰囲気が変わってしまっていて。前から静かな方だったんですが、さらに人を寄せつけないような……眼鏡を外して、髪も伸ばすようになったし……」

———雰囲気が変わった。

「それで気が付くべきでした。彼女に、何かあったんだって」

———ふむ。

「同じクラスになってからも、こっちから話しかけることはありませんでした。席も遠かったですし、向こうも話しかけてこなかったの」

———何か、キッカケがあった。

「放課後の部活中、忘れ物を取りに教室まで戻ったら、彼女が何人かの女子に囲まれてて。明らかにいじめだとわかったんですよね。口調とか、態度とかで。僕は思わず女子たちの間に割って入って。何と言ったか覚えてないんですが、女子たちが出てったんですよ。それで、教室に彼女と二人きりになって」

「覚えてない？ 小学生の時、塾で一緒だったんだけど」

彼女は、長い髪を指先で遊んでいた。

「覚えてるよー。塾、一緒だったよねー」

「そっか……覚えてて、くれたんだ……」

僕は喜びで満たされた。

「それで？」

「へ？」

「君は私をどうしたいのかな？ 天才剣士くん」

心臓が凍りついた。

「どうしたいって……えっ？ 別に、何も……僕は……えっと、そのっ……」

言葉が口をついて出た。

「ぼっ、僕と……付き合ってください！！」

「うん、いいよー」

「ええっ！？ ホントに？ ……逆に、なんで？」

それを聞いてどうする。

「ん？ なんか、カワイイなーって思って」

彼女の人さし指が、僕の輪郭をなぞっていた。

——弄ばれてるね。

「その時に、ちょっと違和感は感じてました」

——違和感？

「彼女が、僕の想像してた人とは違うんじゃないかって」

——どんな人だと思ってたの？

「両親から愛されて育った、お淑やかな、お嬢様って感じ」

——なるほど。

「でも、あまり気にしてなかったかな。というよりもむしろ、彼女と付き合えるようになって、舞い上がってました」

——うん。

「いま思い返すと、人生で一番幸せな時期だったなあ。教室で一緒にお昼を食べたり、図書館で一緒に勉強したり、部活の無い日は一緒に帰ったり、夜は携帯のやりとりで寝るに寝れなくなったり、休みの日にはデートしたり。ただ彼女と一緒にいられるだけで、僕は幸せでした」

——青春だなあ。

「たった三ヶ月の青春ですよ。でもその三ヶ月間、僕は世界で一番幸せだった」

——なんでフラれちゃったのかな。

[沈黙10秒]

——弄ばれただけだった。

[沈黙12秒]

——好きだったのに。

「……好きだったのは、僕だけだったんです。彼女は、僕を好きになんかなってなかった」

——彼女は僕を好きじゃなかった。

「自分に貢いでくれる、何人かの男たちの一人としてしか、見てなかった」

——お金を渡していたの？

「現金ではなかったですけど、事あるごとにバックとか洋服とか買わされてました。やけに高いんですよ、その服が」

——いくらくらい？

「さあ、数えてません。まあ、結構な額を持ってくれましたよ」

——何人かの男っていうのは？

「彼女、僕だけじゃなくて、何人かのおっさんに貢がせてたんです。つまり援交です、援交。怪しいと思うことは多々ありました。二人でいるときも、誰かにサブの携帯でメール打ったり、電話したりしてて。デートの途中で、急に友達から呼ばれたとか言って帰ったりもしたし。友達なんて、一人もいなかったはずなのに」

——悪い子だね。

「そうだ、思い出した。彼女が知らないおっさんと手を繋いでるのを見ちゃったんですよ」

夕暮れ、他校での練習試合の帰り道。

街を歩く人々の中に、見覚えのある少女の姿を見つけた。中年の男と手を繋いだ、黒髪ロングの女の子。

すれ違いざまに目が合った。メイクはしていたが、見慣れた顔だ。すぐに本人だとわかる。彼女は僕に、気付いていたのに無視をした。

二人の後を追いかける。いや、あの女は泉純じゃない。そんなはずない。

震える手で携帯を取り出し、電話をかける。

出るな。出るな。出るな。出るな。

聞き覚えのある着信音が聞こえた。目の前の女が携帯を取り出し、耳に当てた。

「もしもーし」

間違いなく、自分の耳元からも声がした。

「今どこにいるー」

「君の目の前だよ」

電話が切れた。

何かの間違いだ。きっとお父さんか、親戚の人だ。

二人は腕を組んだまま路地裏に入り、あらかじめ示し合わされていたかのように、ある建物の中へと消えていった。

[休憩3800円～ 宿泊6500円～]

壁を流れ落ちる水の音が、駆け巡る思考をかき消していった。

「中学生なりに、それがどんなことかは何となくわかりました。あれはトラウマだったなあ……
数日間、何もする気になれなかった」

———そう。

「その割に彼女、束縛もすごかったんですよ。携帯なんか、自分のは絶対に見せないくせに、僕のは毎日チェックされて。夜中の二時に突然『今すぐ来ないと死ぬから』ってメールが来て、近所に呼び出されたこともありました」

———うん。

「リスカとかも酷くて。左腕なんて、もう切るところが無いくらいにズッタズタでしたよ。切らないように何度頼んでも、全然聞かない。よくわからないクスリを飲んだり吐いたりもして……
そのうち心が折れました。何を言っても、僕の声は届かないんだな……って」

———辛かったね。

[沈黙20秒]

———辛い。

[沈黙45秒]

——辛かった。

「……彼女を……僕が、彼女を見捨てたんです……僕には、彼女を背負いきれなかった……」

——うん。

「彼女だって、辛かったんだ。なのに僕は、彼女の気持ちを、悩みを、わかってあげられなかった。知ろうともしなかった」

——彼女の声。

「いま考えると、おかしいと思うことは、たくさんありました。でも僕は、それに気付かなかった」

——たとえば？

「彼女は自分の家の場所を、絶対に教えようとはしなくて。一緒に学校から帰っても、いつも途中で別れてたんです。きっとすごい豪邸に住んでるんだろうなあ、と勝手に想像してたんですが、まさか、あんなとこだったとは……」

——“あんな”って？

「彼女からフラれることになる日、僕は彼女の家まで行ったんです。風邪で何日も学校を休んで、担任から様子を見てくるよう頼まれて。教えてもらった住所に向かうと、二階建ての古びたアパートがありました」

僕は部屋の番号を確認し、ベルを鳴らした。が、反応は無い。ノックをしても、声で呼んでも応答なし。郵便受けは封筒で溢れかえっていた。

近所の人らしき女性が、僕に向かって手招きをしてきた。

「その人、変な宗教やって頭おかしいから、相手にしない方がよいよ」

それでも僕は帰るに帰れず、彼女の携帯に、自宅の前まで来たことをメールした。しばらく途方に暮れていると、アパートのドアが開いた。ドアの内側から半分だけ顔を出して、外を見まわしている人が見える。僕は意を決して声をかけた。

「あのお、愛女さんのお宅でしょうか？」

「誰？」

その顔をよく見て驚いた。僕は一瞬で、この人が彼女の母親であることを確信した。

「えっと、愛女さんの……クラスメートなんですけど……」

「ああ、泉純のお！」

「最近休んでいるようなので、プリントを届けに——」

「そうなのお。もう、誰かと思っちゃった。ささっ、上がって上がって」

家の中は雑然として、なんとなく居心地の悪さを感じた。壁に一枚、髭の生えた中年男性のポスターが貼られていた。

「ゴメンねえ、散らかってて」

緊張したまま立っていると、隅にあったチャブ台の横に座らされた。

「泉純は……ちょっと出かけてていないんだけど、帰ったら渡しておくから……それでー」

彼女の母は僕が手に持っていたプリントを奪うと、満面の作り笑いで迫ってきた。

「あなたは泉純と付き合ってるのお？ 隠さないでいいのよお」

僕は動物的直感から、YESは危険であると判断した。

「いっ、いえ、そういうアレではないんですけど……友達っていうか……」

「彼女はいるのお？」

「いっ、いません」

「あっらあ、清い子なのねえ。恋愛なんかダメよお、悪魔が憑りついちゃうから」

それから数時間、自身が鬱になってから、いかにして宗教に出会い、神に救われたかという話を延々と聞かされた。まもなく世界が終わるらしい。

信者の気迫は凄まじく、絶え間なく震えている携帯を取り出すことすら叶わない。僕が帰るタイミングを失っているうちに、外は暗くなってしまった。

「あのお……そろそろ帰ってもー」

「泉純が帰るまでいなさいよ！」

「また出直してきますので……」

「じゃあ！ パンフレットだけでも持ってって！」

僕と彼女の母が、パンフレットを押しつけ合っていたその時、玄関のドアが乱暴に開かれ、息を切らせた彼女が飛びこんできた。

「なんでこんなとこいんの！？」

彼女は派手なメイクをし、僕の買ってあげたゴスロリの服を着ていた。

「泉純！！ 今まで、どこ行ってたの！！」

すると彼女の母親は、どこからかゴムホースを取り出し、振り上げた。

「うっせえ、ババア！！」

母は娘に蹴とばされ、祭壇を引きずり倒しながら、仰向けに倒れた。

「行くよ！！」

僕は彼女に手を引かれ、外に連れ出された。

「えっ……お母さん、大丈夫？」

「あんなやつ、親なんかじゃねえよ」

「彼女から、これまでの話を聞きました。小さい頃から母親の宗教に振り回されたこと。父親が亡くなって、母親の歯止めが効かなくなり、家にいられなくなったこと。業者を通じて稼げるようになり、アパートを借りて、何とか一人暮らしをしていること。どこからどこまで本当の話かはわかりません。でも少なくとも僕には、どれも本当の話に思えました」

雨が降りだしていた。僕も彼女も、傘を持っていなかった。

久しぶりに見た彼女は痛々しく痩せこけて、不治の病にかかっている少女のようにも見えた。

「ウリやって、お金稼いで、そのお金で全身整形して、アイドルになって、もっともっとお金を稼ぐの。そのお金で外国人の殺し屋を雇って、あの女をブツ殺してもらうのが、私の夢」

「もっと何か、別の人生があるんじゃない？」

「別の人生って何？ あんたが私のこと、幸せにしてくれるワケ？」

「それは……」

彼女は携帯を取り出し、電話に出た。

「今？ うん、大丈夫、フリー……はい、はい」

彼女に連れてこられた場所は、ビルの中に挟まれた薄暗い駐車場だった。

「君にフラれてわかったんだ。私とは、生きてる世界が違いすぎる」

彼女は、そこに停まっていた黒いワゴンのドアを開けた。中には何人かの少女がいた。

「誰そいつ」

運転席から、狐顔の男が身を乗り出した。

「あっ、こいつストーカーだから、シメちゃって」

男がドアを開け、車から降りてきた。その手には金属バットが握られていた。

身構えるよりも先に、そのバットが振るわれた。あばら骨の軋む痛みから、息が出来なくなる。

蹴とばされ、跨られ、何度も何度も殴られた。

「あーもう、そんなんでいーよ」

車から見ていたであろう彼女の声が聞こえてきた。視界がボヤけて、ほとんど何も見えなかった。

「うちの商品に手え出してんじゃねえよガキ。殺すぞ」

男が僕の上から離れ、彼女が僕を覗きこんでいるのがわかった。

「なーんだ、あっさりとヤラれちゃうんだね。もっとケンカ強いかと思ってた」

「出るぞ！！」

エンジンのかかる音がして、彼女は車に乗りこんだ。

「いつまでも女に夢見てんじゃねえよ！ 童貞が！！」

ドアが閉まる音。車が出ていく音。

降りしきる雨の中、僕は呟いた。

「いっそ、殺してくれよ」

――変じゃない？

「何がですか？」

――彼女もまた、あなたにフラれたと言っていた。

[沈黙8秒]

———あなたは、自分がフラれたと言っていたでしょう？ それにさっき、『僕が、彼女を見捨てた』とも言っていた。

「さあ？ 言いましたっけ？」

———どうということだろう？

[沈黙12秒]

「……連絡を切ったのは、僕からなんです。もう、ウンザリして」

———うん。

「浮気のことを問い詰めても、むしろ逆ギレされました」

「もし私が浮気してたとしても、私のことを放っておいた、君の責任なんじゃないの？」

「これ以上、どうしろってんだよ」

「抱いて」

僕は腕を引っ張られ、その建物の中へと連れこまれた。

[休憩3800円～ 宿泊6500円～]

ロビーは不気味なほどに薄暗く、通路の両脇を水が流れていた。彼女のブーツが刻む硬質な音が、僕の頭蓋の中を反響した。

慣れた動作で手続きを済ませ、部屋まで足を運んでいく彼女を見て、切なさを乗り越して現実感が無かった。

「先、あびていいよ」

「あびる？」

「シャワーだよ」

理由もわからず、言われるがままにシャワーを浴びて出てくると、彼女は下着姿でベッドに寝っ転がり、テレビを見ていた。

「ハァ？ なんでまた服着てんの？」

「えっ？」

彼女は溜め息をつき、何かを悟ったような表情で、こちらに背を向けた。

「もういいや、ギュッてして。後ろから」

僕は息を呑んだ。その背中は一面のミミズ腫れで、まるで皮膚の下を寄生虫の群れが蠢いているかのようにも見えた。

恐る恐るベットの中へ足を入れ、彼女の肩に手を伸ばした。首元に顔を近づけると、大人の女性の香りがした。

「心を許してるの、君だけなんだよ……ホントだよ……」

腕を通して彼女の震えが伝わってくる。僕の頭の中はグルグルになり、何も考えられなくなった。

そして、気を失うようにして眠りについた。

朝を迎え、僕はその日が大事な日であったことを思い出し、跳ね起きた。

鞆を抱え、財布を取り出し、一瞬迷った末、なけなしの五千円札を枕元に置いた。彼女は寝ボケながら、こちらを見ていた。

「何してんの？」

「もう行かないと。今日は試合なんだ」

「休んで」

「いや、無理だよ」

「無理じゃない。今日は世界の終りなんだよ」

また訳のわからないことを言う。

「じゃ」

「待って！ 行かないで！！」

彼女はバックからカッターを取り出し、その刃を首すじに当てていた。

「行ったら私、死ぬから」

出たよ。いつもの死ぬ死ぬ詐欺。どうせ死ぬ覚悟なんて無いくせに。

心が黒く染まっていくのを感じた。

「もうウンザリなんだよ！ 死ぬなら一人で勝手に死ねよ！！」

そう言って威勢よく部屋を出ていこうとしたが、自動ロックがかかっていたドアに阻まれた

。

「彼女にとって、その日は本当に世界の終わりだったのかもしれませんが。でも、僕は見捨てた。僕には、彼女を抱えきれなかった」

———そう。

「その後も連絡は来ましたが、全部無視しました。自分が狂ってるんだか、相手が狂ってるんだか、何もかもわからなくなって。ただ彼女とは関わりたくないという一心で、僕の方から関係を切った。あの男に殴られてからは一度も会ってません。学校にも来なくなったし、卒業式にもいなかった」

———うん。

「僕は、自分のことしか考えてませんでした。きっと、もっと何か出来たはずなんだ。でも、どうすれば彼女が幸せになれるのか、わからなかった。僕には、彼女を救えるだけの、知恵がありませんでした」

旅の途中で立ち寄った村にて、勇者は何人もの若い娘たちに取り囲まれていた。

村の少女「イグニスさん！ わたしも旅に連れてって！」

騎士の妹「私と結婚して、町で一緒に暮らしましょう」

女の戦士「いや、あたしとだ」

海賊の娘「あたいとだって！」

獣人巫女「イグニスおにいちゃん」

「いや、困るよ……」

勇者は苦笑いで彼女たちから逃れようとしたが、抵抗も空しく、しばらく解放されそうになかった。

「はぁ……」

僧侶は腕を組み、五人の女たちに追い回されている勇者の方に視線をやっていた。

「よくもまあ、行く先々で新しい女に付きまとわれますね」

「アクア、怒ってる？」

魔導士が尋ねると、僧侶は渾身の作り笑いで振り返った。

「あら、わたくしは全然気にしてませんわ。楽しんでいらっしゃればよろしいんじゃないですか？」

彼女は背を向け、一人で村から出て行ってしまった。

「あ～あ。アクア怒らせちゃった～」

「それにしてもアイツ、モテすぎだろ」

二人は、なおも追い回されている勇者の姿を、呆然と眺めていた。

「おや？」

彼らの近くに立っていた村人が振り返る。

「あの子、神官の娘さんじゃなかったかしら……」

村を出てすぐの森。

僧侶は暗い表情で、物思いに耽りながら歩いていた。

「世界救済を前に、行きずりの女に現を抜かすなど、言語道断です。私が、どれだけの覚悟で旅をしているか――」

〈勇者は知らない〉

僧侶は驚き、歩みを止めた。

〈怖いだろう？ 苦しいだろう？〉

男のものだと思われる声が、どこからともなく彼女の心に語りかけてきた。身構え、周囲を見

まわす。

〈命に代えて守る価値が、この世界にあるのか？〉

「誰ですか！」

〈お前には無限の可能性はあるはず。己を犠牲にしてしまっているのか？〉

「正体を現しなさい！」

〈後ろだ〉

僧侶は自分に覆いかぶさる影の存在に気づき、振り返った。そこにはトロールが待ち構え、今にも棍棒を振り下ろそうとしていた。

彼女はヒラリと攻撃を躲した。棍棒が地を抉り、土の飛沫が宙を舞う。

「この程度の敵、私一人で！！」

[アクアは チェンウィップを そうびした。]

[アクアの こうげき！]

「はああああ！！」

僧侶は鞭を振るった。ところが敵の巨体はビクともしない。

次の瞬間、反撃の強打が僧侶を襲い、吹き飛ばした。

「ぐっ……ああっ」

やっとのことで震える体を起こし、立ち上がる。彼女はダメージを受けながらも自らを回復しようとはせず、一心不乱に攻撃を続けた。HPが削られ、戦闘不能へと近づいていく。

「アクア！！」

勇者たちが駆けつけた。

瀕死寸前の僧侶に対し、すかさず勇者は命令を下す。

「いのちだいじに」

ところが僧侶は、勇者の命令を無視して鞭を振るった。もはやその攻撃は、敵に届きもしない。

「チッ！ こうなったら……『ブレイバー』」

勇者は全身から覇気を漲らせ、敵の頭上へと飛びかかり、一直線に剣を振り下ろす。魔物は真っ二つに切り裂かれ、霧のように消え去っていった。

僧侶は力が抜けたように片膝を落とし、今にも気を失いそうな虚ろな目をして、息を切らした。魔導士が僧侶の元に駆け寄る。

「アクア、大丈夫！？」

「……はい。私は……」

僧侶の服はボロボロに破れ、その四肢には、見るに堪えないほどの傷が刻まれていた。

「なかなかの重傷だな」

「やっべ、薬草切らしちまってる。慌てて村を出てきたから買い忘れちゃった」

「アクアもMP残ってないみたい。アタシは回復魔法、持ってないし……」

「私なら問題ありません。先を、急ぎましょう……うっ！」

僧侶は“声”の気配を感じ、左手で額を押さえた。

〈その男は、お前の痛みなど気付いていない〉

再び、僧侶の脳裏に声が響く。周りの仲間たちには、その声が聞こえていないようだった。

〈私はお前の辛さをわかっている。告げられた使命を知っている〉

僧侶は苦悶の表情で、虚空を見つめていた。

「どうしたの？ アクア、なんか変だよ」

「私は……お前の魔法などに、屈しはしない！！」

僧侶は杖を支えに立ち上がろうと試みたが叶わず、よろめき倒れこんでしまった。

「どうした？」

勇者が僧侶の顔を覗きこんだ。

〈フフッ……いつまで抵抗してられるかな〉

謎の声は途切れた。

「無理するな。それから、これは没収だ」

勇者は僧侶の手から鞭を取り上げた。

「さっきの村まで戻るぞ。アクアは、俺が背負ってく」

僧侶には抗う余力が残されておらず、おとなしく勇者の背中に担がれた。

村の宿屋の一室。

僧侶は、自分がベッドに寝かされていることに気が付いた。

「目が覚めたか」

「……はい」

隣で勇者が椅子に座っていた。

「良いところじゃないか、この村は。なんで急いで出ていったりしたんだ？」

「あら。ご婦人方に気を取られていた割には、よく御存じですね」

僧侶が真顔で言ったので、勇者は苦笑した。

「悪いな、モテモテで」

僧侶は顔を曇らせ、俯いた。

「ここにはあまり、良い思い出が無いので……」

「さっき様子がおかしかったのも、そのせいかな？ 命令を無視するなんて、お前らしくもない」

「私は最善の行動をとったまでです」

「あの時のお前は、死に急いでいるようにしか見えなかったけどな」

「私の使命は世界を救うことです。私の命は、この旅が終わるまであれば、いいですから」

「世界を救っても、お前がいなくなったら意味無いんだよ」

僧侶は紅潮していく顔を見せまいと、顔を背けた。

「まあいい。いずれにせよ、これからが大事だからな。今はゆっくり休めよ。水もらってくる」
勇者は椅子から立ち上がり、部屋を出た。

「これからなんて、あるわけ、ない」
誰もいなくなった部屋の底へ、呟きが重く沈んでいった。

勇者が部屋を出た先では、盗賊と魔導士が聞き耳を立てていた。
「ダメだろ！ もっと積極的にいかなくちゃ！！」
「はあ？」
勇者は盗賊の言葉の意味が汲み取れず、怪訝な顔をした。
「もっと心配してあげなよお～。まったく、女心がわかってないんだからあ～」
彼は何となしに彼らの思いを察したが、あえて無視をした。
「アクアは俺が見ておく。お前らも早く休め」
二人は顔を見合わせる。
「《は～い》」
お互い意味深な表情で笑い合い、隣の部屋へと入っていった。

僧侶は夢の中で一人、うなされていた。
〈あの男は、お前を見ていない。だが、私はお前を見ている〉
「うっ……」
〈あんな男など捨ててしまえ。私には、お前を救える〉
「う……あ……」
〈さあ、私の元へ来い！ クリスタルを奪うのだ！！〉
「あああ……ああああ……」

勇者は扉を開け、すぐに部屋の異変に気が付いた。
世の男どもを惑わせるであろう妖艶な香りが、部屋中に充満していたのだ。
「フフ……そばにきて……」
「ア、アクア……！」
勇者は思わず水瓶を落とした。
僧侶が恍惚とした表情で、彼を誘惑するように手招きしていた。
「大丈夫……わたしは正気に戻ったから」
不審に思いながらも、彼女との距離を詰めていく。
「ねえ、はやくきて……じらさないで……」
「ゴクッ……」
勇者が僧侶の隣に腰かけた、その時。

「かかったな、イグニス！」

「うっ……」

僧侶は彼を蹴り飛ばし、仰向けにした。そして跨りながら懐を探り、二つのクリスタルを奪い取ると、何かに導かれるようにして部屋から出て行ってしまった。

「アクアァ！！」

勇者の叫び声を聞きつけ、魔導士と盗賊が駆けつけた。

「お兄ちゃん！？」「イグニス！！」

魔導士は勇者のそばに寄り、薬草を使った。

「あれっ、アクアは？」

「出ていった。クリスタルも持ってかれた」

「マジで！？」

「細かい話は後だ、追うぞ！」

三人が外に出ると、目前に黒い飛空艇が停まっていた。

「アクア！」

乗り口には男が控え、乗りこもうとする僧侶の手を取っていた。

「追ってきたか」

「誰だ！？」

「我が名はヴルペス。かの星の魔術師」

「アクアを返せ！」

「返してどうする？ まもなく、この世界は滅ぶのだ」

勇者が前に出た。

「俺たちが魔王を倒して、世界を救ってみせる！」

「新たに生まれる魔王を倒したところで何の意味もない。魔王は黒の卵より生まれし者。何度でも生まれかわり、この世界を滅ぼさんと企むであろう」

「なら……その黒の卵を壊す！ 二度と魔王が生まれないようにしてやる！」

「黒の卵を壊す……か。やはり真実は告げられなかったようだな」

魔術師は不敵な笑みを浮かべた。

「黒の卵を破壊すれば、アクアも消える」

「なっ……」

勇者は絶句した。盗賊が前に出る。

「騙されるなイグニス！ でたらめだ、でたらめに決まってる！」

「信じるかどうかは、おまえたちの自由。だが、真実は一つだ……やれ、アクア」

僧侶の杖が、彼女の蓄えていた魔力を、上空の一点へと送り始めた。大気が震え、無数の氷刃が形を成していく。

「あなたは、勇者なんかじゃない」

氷刃の雨が三人の頭上に降りそそぐ。彼らは抵抗を試みることにすら許されず、身体を切り刻まれ、その場に倒れた。

その後、ハッチを閉じた飛空艇は浮上し、遠く彼方へと飛び去っていった。

翌朝、宿屋で傷を癒した勇者たちは、憂鬱な面持ちで外に出た。

「アクア、魔法で操られてたんだね」

「あいつ言ってたんだ。『私の命は、この旅が終わるまであればいい』って」

「アクアは、この世界の秘密を知ってたんじゃないか？」

「そういえば、村の人がアクアのこと、神官の娘だって言ってたよね？」

「教会へ行ってみるか」

村の教会。

正面奥に飾られた荘厳な祭壇の前に、神官の女性が祈りを捧げていた。

「正しき神は、正しき者の味方なり。我が教会に、どんな御用でしょうか？ 光の勇者たちよ」

神官が勇者たちの気配を察し、振り返る。まるでその様子は、勇者たちが教会に訪れることを予見していたかのようだった。

「神官に聞きたいことがあって来た」

「どうぞ、何なりと」

「あんたがアクアの母親か？」

「いいえ、私はアクアの姉です」

その面影は僧侶を思い出させ、双子と言っても過言ではないほどに似通っていた。

「アクアさんが悪い魔術師に連れてかれちゃったんです。魔法にかけられて」

「そうですか……」

眉一つ動かさず、平然とした素振りで答えた神官に、勇者は詰め寄った。

「そうですか、って。心配じゃないのかよ！ 自分の妹なんだから！！」

「あの子はあなたたちの元へ、きっと帰ってくることでしょう。予言には、四人の光の勇者たちが、世界を救うと示されています。何も問題はございません」

勇者は、あまりにも平坦としたその口調に、怒りの感情を失ってしまった。代わりに盗賊が神官に質問をしようと歩み出る。

「その予言のことで、聞きたいことがあんだけど」

「どうぞ、何なりと」

「ある奴から聞いたんだ。魔王が生まれる黒の卵を壊せば、アクアも消えちゃうってな」

「その通りです」

「えっ……」

魔導士は思わず手を口にやった。

「そんなの聞いてないよお……アクア、いなくなっちゃうのお？」

「私とアクアは女神」

突如、それまで何も無かったはずの神官の背中から、真っ白な翼が広げられた。それは大きく羽ばたき、無数の羽根が舞い散った。

「黒の卵が消滅する時、アクアもまた……」

「……そ、そんな……！」

「アクアが、女神だなんて……」

三人は、語られた言葉をすぐには呑みこむことが出来ず、呆然と立ち尽くしてしまった。

神官は構わずに語り続ける。

「アクアを攫った魔術師は、水のクリスタルを求め、古代遺跡のある南の島へと向かいました。遺跡には、あの子にしか開けることの出来ない水門の仕掛けがあるのです。彼は、アクアの力を使ってクリスタルを手に入れようとするでしょう。港に船を用意してあります。どうぞ、お使いください」

古代遺跡内部。

魔術師は多くの女性たちを引き連れ、遺跡の最深部まで辿り着いた。彼らの行く手に、魔方陣の刻まれた巨大な水門が立ちはだかる。

「アクア、開けろ」

「いえ、お断りします」

「なに？」

「あなたの思い通りには……なりません」

僧侶は洗脳魔法の解けかかった目で魔術師を睨み返し、呪いの蝕みに抗っていた。

「うっ……」

魔術師の杖が振るわれ、腹部を打たれた彼女が手をついて倒れる。

「チッ、魔法の効果が弱まってきたか」

「ヴルペス様」

女たちの中にいた一人の巫女が、手元の水晶玉を見ながら魔術師に話しかけた。

「なんだ？」

「勇者たちが、こちらへ向かってきているようです」

「ほう、それは好都合だ」

魔術師は腰を落とし、僧侶の顔を指先で掬い上げた。

「お前の未練を断ち切ってやろう」

海上を進む帆船。

勇者たちは南の島を目指し、航海を続けていた。

「俺……あいつのこと、何もわかってなかったんだな」

勇者は、遠く後ろに消えていく大陸の方を眺めていた。

「なあに落ちこんでんだよ！」

盗賊は彼の背中をたたいた。

「今からでも遅くねえ。お前の想い、全部ぶつけて来い！」

「ああ」

「見て！ あの島じゃない！？」

勇者と盗賊は魔導士の声に振り向いた。魔導士の指さした先に、不気味な島が浮かんでいる。島の中央には、人々から見捨てられた廃墟のような遺跡が待ち構えていた。

「でも、なんか変だよ。あの島の上にだけ、雲がかかっている」

一転、辺りは暗くなり、ポツポツと雨が降りだした。島へ近づくにつれ、雨足が急速に強くなっていく。荒れゆく波に持ち上げられ、船が上下に揺さぶられた。

「何かに掴まれ！！」

三人は柱やロープに手を伸ばし、しがみついた。

盗賊は横目に、洋上を走る渦の柱を捉えた。

「おいおい。あの竜巻……こっちに向かって来てねえか！？」

「きゃあああああ！！」

そのまま船は竜巻の外縁に捕まり、螺旋を描くように巻き上げられた。そして放り出されるようにして軌道を外れ、不吉な島に引き寄せられるかのごとく落下していく。

船体はバラバラに砕け散った。三人は、石畳の上に打ちつけられた痛みに耐えながら、やっとのことで瓦礫から這い出した。

僅かに開かれた勇者の眼に、宙に浮かんだ僧侶の姿が飛びこんできた。

「アクア！」

僧侶の背中からは神官と同様、真っ白な翼が広げられていた。その眼は虚ろで、心を失っているかのようにも見える。彼女の背後には魔術師の姿があった。

「これがアクアの、本当の姿だったのか……？」

「アクア！ 俺の声が聞こえるか？ アクア！」

「ふん。おまえたちには姫は救えぬ。救えるのはこの私だけ」

勇者が剣を構え、魔術師に立ち向かう。しかし、僧侶の杖から放たれる氷刃の、格好の餌食となってしまう。

「道具は使われてこそ、その本懐を遂げるのだよ」

「アクアを物呼ばわりしないで！！」

魔術師が洗脳魔法の出力を上げた。

「いやああああああ！！！！」

「アクア！！」

清らかな純白の羽が抜け落ち、艶やかな漆黒の翼へと生え変わっていく。

「これ以上……皆さんを傷つける前に……」

その瞳が邪悪に染まっていく。

「お願い……殺して」

瞳孔に、服従の印章が浮かんだ。

氷刃の勢いが増し、剣の暴風雨となって勇者たちを切り裂いていく。盗賊は痛みに屈して膝を落とし、魔導士は風圧に耐えかね吹き飛ばされていった。

荒れ狂う嵐の中、勇者は一人、彼女に向き合った。

「お前……女神だったんだな」

地面に突き刺した剣を支えに、一步を踏み出す。

「ごめん……今まで、俺、全然気付かなくて……ごめん」

一步一步、近づいていく。

「最後には自分だけ消えるのわかってたのに、誰にも言えなくて……辛かったよな、寂しかったよな」

全身に刻まれた傷口からは血飛沫が吹き出し、後ろに靡いていく。

「でも、もう大丈夫だ。俺が、お前を守る！」

僧侶の瞳から涙が零れ、すぐさま氷結し、光を反射して虹色に煌めく。

「たとえ世界と引き替えにしても……俺はぜったいに、アクアを選ぶよ！ だから！！」

勇者は残された力を振り絞り、右手を伸ばした。

「帰ってこい。アクア！」

僧侶の瞳から、呪いの印章が消えた。

黒き翼が剥がれ落ち、揚力を失い落下する。勇者は自らの体を投げ出すようにして、彼女の体を受け止めた。

二人の間を、沈黙が埋める。そして、どちらからともなく、視線が交わされた。

「本当に、ごめんな」

僧侶は首を横に振る。

「もういいの……ありがとう」

回復魔法が勇者の傷を癒す。

二人は照れ笑いしながら、お互いの気持ちを確かめ合った。

「ああっ！！ アイツ、逃げようとしてる！！」

魔導士は、魔術師が乗った飛空艇を指さした。

「うおおおおお！！」

盗賊は全速力で駆けていき、上昇し始めた飛空艇に飛びつき、ハッチを狙って腕を振りかぶった。

「必殺、『壁壊し』！」

ハッチを突き破って飛空艇へと乗りこみ、しばらく喧騒があった後、魔術師の首を引きずりながら盗賊が出てきた。

「ヴルペスは人を操ることのほか能の無い、三流魔術師です。恐るるに足りません」

僧侶の杖が輝きを放ちだすも、勇者の手が重なる。

「待て、俺がやる」

勇者の前に突き出され、膝を落とした魔術師が口を開く。

「この世に悪と呼べるものがあるとすれば、それは人の心だ。そして最も恐れるもの、勝たねばならない敵、それは――」

勇者の剣が男の体を貫き、引き抜かれ、男は前のめりに倒れた。

「なーんか飛空艇の中に、いっぱい女の子が乗ってたぜえ。眠ってたけど」

「この人、何がしたかったんだろう？」

「彼はクリスタルを使って、自分の星を救うのだと言っていました。その真意は図りかねますが」

僧侶は向き直り、勇者たちの方へ頭を下げた。

「この度は御迷惑をお掛けしました。申し訳ございません」

「いや、謝らなくちゃいけないのはオレたちの方だ」

「ごめんね、アクア」

盗賊と魔導士は、僧侶に歩み寄る。彼女は顔を上げ、恥ずかしそうに微笑んだ。

「これからは自分の気持ちに素直になろうと思います。ヴェントス、ナイフを貸していただけますか？」

「お、おう」

僧侶は右手でナイフを受け取ると、左手で後ろ髪を束ねた。そして躊躇うことなく、それをナイフで切り落とした。

水のように澄んだ青髪が、風に流され、飛んでいく。

僧侶の風貌は、幼い頃に目にした姿へと戻っていた。

「クリスタルを、お返しします」

勇者の手に、二つのクリスタルが渡された。盗賊が首を傾げる。

「あれっ、三つ目のクリスタルは？ そこの遺跡で取ってきてないのかよ」

「私にも少しだけ、抵抗する意志があったようです」

「勇者さま「勇者さま「勇者さまああああああ！」

眠りから覚めた少女たちが、飛空艇の方から走ってきた。

「お兄ちゃん、どうする？」

「えっ……どうする……って」

「ここはオレに任せろ！ お前たちはクリスタルを取りに行け！」

盗賊は両手を広げ、勇者に背を向けた。

「とりにいけ！」

魔導士もそれに続いた。

僧侶が勇者の腕を掴む。

「行きましょう！ イグニス様！」

「あっ、ちょっ、ちょっと……」

彼女に引っ張られていく形で、勇者は遺跡の中へと連れこまれていった。

古代遺跡の内部は洞窟のような造りになっており、川や滝の流れる音が反響していた。僧侶は勇者の手を取り、奥へと進んでいく。

「なんだか、すごいところだな」

「小さい頃、二人で冒険に行ったのを思い出すね。あれからもう7年か……」

「話し方も、昔に戻ったな」

僧侶は顔を赤らめた。

「久しぶりに会った時、なんか別人みたいに見えて……気後れしちゃったんだ。イグニスったら、すごく遅しくなってるんだもん。びっくりしちゃった！」

二人は水門の前に辿り着いた。

「大丈夫。私に任せて」

僧侶は杖を掲げ、魔法で扉の封印を解除した。重々しい音を響かせながら水門が開いていき、奥から波が押し寄せ、膝下を流れていく。

中央の台座に、聖なる水を湛えたクリスタルが、青く光っている。勇者は一人、それに近づいていき、青色に輝く結晶を手にとった。

「イグニスは 水のクリスタルを てにいれた！」

「やったね、イグニス。これで聖剣を引き抜くことができるはずっ」

彼女は涙声になっていた。

「アクア？」

「……ううん。なんでもない。聖剣を手に入れば、世界を救えるもんね」

その精一杯の笑顔が、勇者には痛々しく思えた。

僧侶が勇者に向かって両腕を広げる。

「……なんだ？」

「ハグハグ」

「……はぐはぐ？」

「ギューって。触れていたいよ。生きてるって、実感したいよ」

「なあ、アクア……俺……」

「想いを伝えられるのは、言葉だけじゃないよ」

僧侶は勇者の目を真っ直ぐに見つめた。

「イグニスと一緒になら……イグニスが、そばにいてくれるなら……こわくても……負けないよ、私……」

「……アクア……」

彼の腕が、ゆっくりと彼女を包みこんだ。

すると水面が輝きを帯び始め、まるで彼らのことを祝福するかのよう、辺りは眩いばかりの光の海へと姿を変えてゆく。

二人は、流れゆく水の揺らぎに身を任せた。

とけあい、もつれあい、からみあい、一つのものになってゆく。

永遠にも思われた刹那の時が、その器を満たしていった。

翌朝、遺跡の入口から出てきた二人を、盗賊と魔導士は意味深な含み笑いで出迎えた。

「ゆうべは、おたのしみでしたね」

「うっせ」

二人は罰が悪そうに顔を背けた。

「クリスタルは取ってこれたあ？」

「はい」

「じゃあ、神殿に行くぞ」

勇者が空高くキメラの翼を放り投げると、瞬く間に四人は神殿の前へと移動した。

神殿の中央、据えられた台座に、聖なる剣が屹立していた。

勇者は剣の前に置かれた石板の上に、三つのクリスタルを置いていく。

「いよいよだな……」

「ドキドキするね……」

「はい……」

三人は固唾を呑んで、その様子を見守った。

「いくぞ……」

勇者は聖剣の前に立ち、その柄を握り、ひと思いに引き抜かんと、足を踏ん張った。

「ん？」

しかし、剣は台座から微動だにもしない。

「……あれ？」

勇者が何度試みたところで、結果は変わらなかった。

「お兄ちゃん……」「おいおい……」「なぜ……」

「どういうことだ？」

勇者たちが困惑している中、神殿内に不穏な空気が漂い始めた。

そして彼らの背後に、見覚えのある黒い渦巻のゲートが現れた。

「これって……あの……」

「なんでオレたちの居場所を知ってんだ!？」

ゲートから二体の魔物が飛び出した。一体は骸骨の兜を被った黒騎士、もう一体は金の鬘の魔獣。

黒騎士は電撃を纏った斧を振りかざすと、勇者たちの方へ突進してきた。

四人は散り散りになって回避する。

間髪入れず、魔獣が雄叫びを上げ、勇者へと襲いかかる。剣で攻撃を受け止めるも、その衝撃で後ろに転がっていく勇者。すかさず魔獣は追い打ちをかけてきた。

「彼は、やらせない！」

[アクアは ビーストキラーを そうびした。]

魔獣の右腕を走る一筋の傷跡に、僧侶の鞭が打ちこまれる。呻き声を上げながら、魔獣は後方へと仰け反った。それに対して黒騎士は、盗賊の背後を狙って斧を振り下ろし、電撃波を放つ。

「おおっと」

盗賊は飛び上がり、続く二撃目も駆けながら躲した。

「おいおい、こいつら倒せる気しねえんだけど！」

魔導師が呪文を詠唱し、魔方陣が周囲を取り囲む。

「おいでっ、『ゴーレム』！」

人間の倍はあろうかという巨体が、地響きを上げて降り立った。

[『アースウォール』]

岩人形は腕を左右に大きく広げ、向かってくる二体の攻撃を受け止めた。

「頑張ってるじゃーん」

勇者たちの背後、神殿の天井の方から、気の抜けた女性の声がした。四人は驚き、振り返る。

「あんた、あの時の！」

白い衣を纏い、双頭の蛇が巻きついた杖を持ち、目元を仮面で隠した女が、壁面のふちに寝そべっていた。かつて勇者たちが闇の世界へと迷いこんだ時、救いの手を伸ばした賢者。

「このままじゃあ、ゲームオーバーかもねー」

「ちょっとお！ あんた、そこで見てるだけかよ！」

「死んじゃうってばあ！」

「だあって、助けてくれって言われてないしー」

賢者は指で髪を遊びながら、そっぽを向いた。

勇者が鬼気迫る表情で訴えかける。

「助けてくれ！」

賢者は振り返り、ニヤリと笑った。

「合点承知」

杖が振るわれ、二体の魔物の上方に新たなゲートが生成された。

魔物たちは、まるで質量を失くしたかのように浮き上がり、ゲートの中へと吸い込まれ、それ

と共に跡形も無く消えていった。

「助かったあ」

魔導師はペタンと座りこみ、召喚獣も異界へと帰っていく。

「ご協力、感謝します」

「どういたしまして」

賢者はフワリと降り立った。

「ところで、あなたは何者なのですか？ 私たちを二度も助けていただきましたが」

「あら、女神ちゃん。さっきは大変だったねー」

「なっ……」

僧侶は訳知り顔の賢者に動揺した。

「大丈夫。あなたが死ななくても、この世界は救えるんだよ」

「本当か！？」

「まっ、それよりも先に聞きたいことがあるんじゃない？ なーんでクリスタルを三つ集めたのに、聖剣が引き抜けなかったのか、とか」

「教えてくれ」

「光のクリスタルは全部で四つ。あなたたちは、まだ最後のクリスタルを見つけてない」

「ええっ？ 四つ目なんてあるのお??」

「最後のクリスタルは、愛を司る土のクリスタル」

賢者が広げた掌の上に、黄色の結晶を映した幻影が創り出された。

「それは、あなたたちの身近な場所に隠されていることでしょう」

「なるほど……って、それどこだよ！」

「さぁねー？」

賢者はクルッと回って背を向けた。

「どうされますか？」

「まずは女王に話を聞いて来よう。何か知ってるかもしれない」

「『世界救済の真実』は、あっちの世界まで来たら、教えてあげる」

勇者たちは神殿を後にした。

その直後、再びゲートが一つ現れ、中から魔獣が飛び出した。

魔獣は神殿内を駆け回りながら、何かに気が付き、悲しそうな呻き声を上げた。

「あなた、来るのがちょっと遅かったみたい」

魔獣は賢者の前で立ち止まり、口から紫色の結晶を吐き出した。

「はい、どうも」

賢者が涎でベトベトになった闇のクリスタルを拾い上げる。

「残るクリスタルは、あと一つ」

第四章

【リアル】

「『両親はいません』って言ってたけど……」

「いるには、いるんですが……」

「ですが？」

「なんか……アレを家族と言うには、違和感があるんです」

「違和感がある」

「はい」

「どうしてだろう？」

理由はわかってる。でも、誰にだって言いたくないことはある。

「今日は、ここまでだねー」

鏡さんは手元のファイルを閉じた。

ダメだ。カウンセリングが終わっちゃう。言わなきゃ。これで、最後だって。

「あの……」

「ん？ どしたー？」

屈託のない顔で、首が傾げられた。

「あっ、いえ……なんでも……」

「また来週、ね」

言えなかった。どうせ死ぬって言ったところで止められるのがオチだろうし、これで良かったのかもしれない。

——『さわんないで！！』

犬のぬいぐるみ。

——『おまえなんか、おにいちゃんじゃない！』

魔法のステッキ。

——『あたしに、おにいちゃんなんていない！！』

妹の睨んだ横顔。

ここ最近、思い出したくなかったことを、やたらと思い出すようになった。これもカウンセリングのおかげなんだろうか。話したら楽になるって言われたけど、話したら余計に辛くなることの方が多かった気がする。いずれにせよ、これで何もかも終わりだ。鏡さんは、僕を救えなかった。

家に戻ると、玄関に黒い革靴が置かれているのに気が付いた。無数の靴が散乱している中、その靴だけが整然と揃えられていた。

一階のリビングから騒音が聞こえてくる。怒鳴り声やガラスの割れる音。それらを見殺して階

段を上がり、自分の部屋へと向かった。どうせまた、戦争やってるんだろう。

階段を上がっていく途中、窓辺に置かれていた家族写真に目が留まり、手にとった。嘘くさい笑顔の四人が写っている。そういえば彼の指示で、写真は何度も撮らされたな。毎年毎年、わざわざ写真屋まで足を運んで。その度に、その場で即席の笑顔を取り繕って、みんなが幸福そうに振る舞うんだ。その一瞬の間だけ。

〈羨ましいか？ 幸せな家族が〉

「いや、別に。ってというか、いるのかな？ そんな家族」

幸せな家族なんて求めてない。人間は自分勝手な生き物だから、人に優しい方が不自然だ。人を思いやってるように見える人だって、人に感謝されることで、自分が必要とされていると思ひこみたいから、人を思いやってるフリをしてるだけだ。

あれこそが、人間本来の姿なんだ。

写真立てを伏せ、二階へ上がる。自分の部屋と、隣の部屋のドアが開けられていた。久しぶりに覗いたその部屋は、無数のゴミ袋で埋め尽くされていた。

その部屋のドアを閉じ、自分の部屋に入り、ドアを閉め、カギをかける。

〈いよいよだな〉

「何が？」

〈決まってるだろ、お前を殺す日だよ。言っとくけど明日だからな、契約の日は〉

「わかってるよ。残して困るものは全部捨てたし、ゲームも売ってきた」

〈まだ一つ残ってないか？〉

「ああ、これは……」

颯真から返してもらった『イースDS』。

「これだけは売れなかったんだ。だから一緒に焼いてもらおうと思って……ところで」

〈ん？〉

「死体って……残るよね？ 　というかそもそも、どんな死に方するの？」

〈ああ、それな〉

目の前に、自殺方法のイラストが描かれた模造紙が広げられた。

〈一応、俺の方で計画してるのは四つだ。睡眠薬、首吊り、溺死、練炭〉

「うわあ、なんか一気に現実感が……」

〈それで組み合わせに迷ってるんだが……いっそ全部やってみるか？〉

「い、いやあ……それは、どうだろう……」

ノックの音がした。

相手は誰か、わかってる。模造紙を慌てて片づけ、鍵を開けると、スーツ姿の彼がいた。

「まだいたのか」

圧迫感のある低い声。冷たい表情。彼が部屋の中に入ってきた。

「片づいてないじゃないか。明日までに部屋を引き払うよう言っておいたはずだが？」

一つ一つ点検するように、見まわしている。

ヤバイ。机の上に遺書を置いたままだった。

「残ってるものは全て処分して頂いて構いません。明日、いなくなりますから」

「そうか……」

彼は机の方から目を離し、窓の外へと視線をやった。

「アレも、お前が何とかしておけよ」

……アレ？ ああ……あの人のことか。もう、どうしようもないと思うけど。

こちらに背を向けたまま、彼は部屋を出ていった。

「ふう……」

遺書は依然として、そこに置かれていた。

彼はそれに気付かなかったのか。あるいは“気付いていたのに、あえて無視をした”のか。

イライラする。イライラする。イライラする。

全身がゆったりと揺り動される感覚で目が覚めた。

まただ。知らないうちに、知らない場所にいる。今度はどこだ？

ここはバスの中だ。一番後ろの席に座っている。流れていく外の景色には見覚えがあった。そうだ、これは道場へ向かうバスだ。小学生のとき、このバスに乗って通ってたっけ。

両脇には竹刀と防具があった。これを捨てに行こうとしてたのかな。停留所への到着を告げるアナウンスが流れ、チャイムを押し、バスを降りた。

その途端、鼻先が熱くなり、目に涙が溜まった。

ここは何も変わってない。あの時のままだ。最後に来たのは中学を卒業したときだから、だいたい二年前か。行き先を考えなくても、足が勝手に向かっていく。久しぶりに目にした道場は、少しだけ小さくなったように見えた。

掛け声、竹刀のぶつかり合う音、踏みこみのリズム。

そうだよな。もう夕方だし、稽古は始まっているよな。そう思うと、急に恥ずかしくなってきた。さっさと道具を玄関に置いて帰ろう。

「久しぶりじゃねえか」

背後から声がした。聞き慣れた、野太くて、しゃがれた声。

振り返ろうとした矢先、背後から伸びた腕が首に巻きつき、冗談とは思えないほどの力でキツく締められ、頭に血がのぼる。って、なんでチョークスリーパーアアア！？

「ギ、ギッ、ギブギブ！！」

慌ててタップする。死んじゃう、死んじゃう。

腕が解かれ、その場に這いつくばり、息を切らす。この人も、二年前から何も変わっちゃいない。

「お久しぶりです……先生……」

鬼も恐れぬ剣道の師範、金居(かない)先生。小柄なのに、威圧感がハンパじゃない。

「ったく、おっ前はあ……はよう、着替えてこんか！！」

「いっ、いやっ、今日は稽古をしに来たのではなくて用具を寄付しに……って、あれえ？」

まるで聞いちゃいない。先生は稽古場に入って行ってしまった。どうしよう。このまま帰ろうか。でも、さすがにそれは――

「しょーたあ！」

あーあ、見つかった。道場の先輩だ。

「ひっさしぶり！」 「うおおお！ しょーちゃああん！！」

数人の男どもが押し寄せ、もみくちやにされる。変わってないなあ、主にテンションの高さが。

その後、先輩から道着を貸してもらい、面を着け、形だけ稽古に参加させてもらった。久しぶりに構えた竹刀は鉄剣のように重く、まともな軌道で振り抜くことが出来なくなっていた。先輩と打ち合えるだけの体力が無かったため、小学生の相手をして、稽古が終わるまでの時間を潰した。それにしても小さい子が増えたなあ、この道場。

「おい、お前は残ってる」

稽古が終わって防具を外し、誰もいなくなった道場で、先生と二人きりになった。

「こっち帰ってるって聞いたんだよ。それなのに電話しても繋がらねえし、手紙送っても返事が来やしねえ。おっかしな話だよなあ？」

「すみません……」

「なんだあ、あの負けっぷりはあ」

「えっ？」

「上段相手にビビリやがって。冗談じゃねえ」

……上段？ まさか――

「試合、見に来てくださってたんですか？」

先生が溜め息をついた。

「ウチ寄ってけ」

先生の自宅には、何度か伺ったことがある。木造二階建てで庭のある立派な日本家屋だ。先生が玄関の戸を開けると、中から若い男の人が出てきた。

「おかえりなさい」

「おう、ただいま」

あれ？ こんな人、見たことないな。今は一人で住んでるんじゃないか？ 確か、事故で奥さんと子供を亡くしたって。

「お客さんですか？」

「ああ、弟子だ。こいつの分のメシも用意してやってくれ」

「わかりました。いらっしやい」

居間に通され、座布団の上に座らされた。既に食卓には様々な料理が所狭しと並べられており、しばらく待っていると、どこからともなく四人の男たちが現れ、それぞれの場所へと納まっていった。

それから二十分ほど、おそらく年上だと思われる無愛想な男たちに囲まれながら、夕食をとることになった。

奇妙な光景だ。男たちは食べ物を黙々と口へ運んでいく。彼らは他人を拒絶するようなオーラを放ち、誰とも目を合わせようとはしない。たまに先生が話しかけても会話は続かず、皿をつつく箸の音が際立った。

謎の晚餐が終わり、食器が片づけられ、お茶が出された。彼らはバラバラに、居間から散っていった。

「それで……今は何してんだ？」

「えっ？」

「高校辞めたんだろ？ プータローしてんのか？」

「通信制の学校に、通ってます」

鋭い眼光で、網膜を射抜かれたような気がした。

「嘘だろ。目を見りゃあ、わかる」

「はい、すみませんでした」

先生は溜め息をつき、お茶をすすった。

「家族は元気か？」

「はい」

「そうか……お前んとこの母ちゃんは干渉しすぎるからなあ……どうだ、俺んどこ来ないか？」

「はい？」

「いま、ウチの道場でなあ、ひきこもりとか不登校のやつら集めて集団生活させてんだ。アイツらがそうだよ。お前みたいなのを一人前にするまで、面倒見てやってんの。まっ、言ってみりゃボランティアだ、ボランティア」

「はあ……」

なるほど、そういうことだったのか。感じたくもない親近感を、彼らから感じてしまったのは。でも、どうせ血の繋がってない奴らが集まったって、家族ごっこで終わりだよ、無駄無駄。結局、このお爺ちゃんも一人で寂しいんだな。偽物の家族を作って、孤独を誤魔化してるんだ。でも、その偽善は報われない。報われるはずがない。

「お前をなあ……半端な形で送り出しちまったんじゃないかって、ちょっとばかし心残りでなあ……お前、剣は強くなったが、心は弱いまんまだ」

「そうですか……」

「剣道は勝ち負けが大事なんじゃない。そう教えてきたはずだ」

じゃあ、なんであんな厳しい稽古させられたんだよ。

「それに、人生は剣道だけでもない。これからだ。これからが大事なんだ」

先生の家を出て、バスに乗り、家へと戻った。

リビングに入ると、まるでそこを台風が通り抜けたかのような惨状が、目に飛びこんできた。ガラスの破片、散らばる食器、倒された家具や家電製品。今回は過去最高記録かもしれない。

いつものように片づけようと手を伸ばしてはみたものの、ウンザリして止めた。

「どうせ明日で、何もかも終わるんだ」

そう言った瞬間、背筋に悪寒を感じた。誰かが階段を下りてくる音がする。酔っぱらい特有のリズムで、それは迫ってきた。

「カオちゃあああん」

無理して絞り出された、甘える子供のような声。鼻をすする音。

「お母さんねえ、カオちゃん以外にい、頼る人がいないのお……」

酒、たばこ、香水、不愉快な体臭。

「ねえ……これからはあ、あんたがお母さんを養っていくのよお？」

嘘くさい涙、崩れた厚化粧、刻まれた皺、年齢不相応な服、ボサボサの茶髪。

「ねえ……わかってるう？」

それら全てが忌まわしい。

「ねえ、カオちゃん聞いているのお？」

その名前で呼ぶなっつってんだろ。

両肩を掴んできた、死人のような腕を振り払い、リビングを飛び出した。

「お母さんを捨てないでえ……一人にしないでえ……」

階段を駆け上がる。

「まあああてえええやあああああ！！！」

声のギアが切り変わった。

急いで部屋の中に駆けこみ、ドアを閉め、鍵をかけ、背中で押さえつけるようにして座りこんだ。

「オラッ！ 開けろっ！ 開けろよっ！！」

ドアが殴られ、蹴られ、背中に振動が伝わる。

「産んでやった恩を、忘れやがって！」

こっちは産んでくれと頼んだ覚えは無い。

「ほんっと……お前なんか、産むんじゃなかったよ……」

つかえながら、鼻水をすする音。

「お前さえ生まれなきゃあ、あんな男となんか、結婚しなかったのに……」

悲劇のヒロイン演じやがって。クソババア。

「あの男、ずっと前に会社クビになって、借金してたんだよ……どうりで急に家売るとか言い出すと思った……負け犬が」

お前が言うな。

「こんなことになるんだったら……あの時、一緒に死んじゃえば良かったねえ」

死ぬんだったら、一人で死ねよ。こっちを巻き込もうとすんなよ。

「いいい？ おかあさんを捨てたらねえ……お前を包丁で殺しに行つてやるから。よおおく、覚えておきなさいねっ」

それは立ち去っていった。

気が付くと携帯を耳に当て、電話をかけていた。受付の人に、鏡さんと呼んでもらうよう頼んだ。

「はい、替わりましたー、鏡でーす」

「これから死にます。今までありがとうございました」

「えー。それは急な話だねー。どうしたのー？ 何かあったー？」

まるで動じてない。僕が死ぬって言ってるのに。

「鏡さんにはお世話になりました。いずれ遺書が届くと思うので、読んでやってください」

「うーん。やっぱり照太くんと話がしたいなー……そうだ！ 明日の朝9時に来れる？ さっきキャンセルが出たから空いてるんだけど……」

その後、なんやかんやと言いくるめられ、カウンセリングを受けることになってしまった。

これで本当に最後だ。覚悟は決まった。

頭痛が止まない。この、血管を針で刺されるような痛みのせいで、結局あのあと一睡も出来ずに朝を迎えた。

「おはよう」

鏡さんは微笑んでいた。いつもと変わらない笑顔だ。いや、いつもと変わらないように振る舞っているだけか。グラグラする。

「まったく、めんどくせえなあ。朝イチからメンヘラの相手かよー。やってらんねー」

鏡さんが肩を回してカルテをめくった。

「あーはいはい、家庭環境が悪かったヤツなー。よく来るんだよ、お前みたいな。家族に愛されなかったから、愛情に飢えてて、人を愛する余裕が無い」

――『しっ、しっ』

父さん。愛人。レベル上げ。

「誰も愛さないから、誰からも愛されることが無い。誰からも愛されずに育った愛情乞食は、希望を求めて家庭を築く」

――『お前も甘いんだよ』

義理の父。雷の音。

「けれど悲しいかな。そういう生い立ちのヤツは、家庭を持ったところで家族を愛せない。親から殴られたように子を殴り、親から罵倒されたように子を罵倒する。他人はおろか、自分の子供からも憎まれ、軽蔑され、誰からも愛されることなく、一生を終える」

――『死んでちょうだい、ねっ』

アイツ。クスリ。心中。

鏡さんの嗤う声がある。

「お前、なんで生きてんの？」

振り向いた鏡さんの顔に、ポツカリと大きな穴が空いていた。

「照太くん！」

肩を揺さぶられた。目の前には、ちゃんとした鏡さんの顔があった。

「大丈夫？ 何か言っていたみたいだけど」

今のは幻想だったのか？ じゃあ“どこから”幻想だったんだ？

「もう、どうでもいいでしょ。死ぬんだから」

「死なないで」

鏡さんは真剣そうな顔で、こちらを見ている。試してみたくなった。

「本気で言ってんのかなあ？ どうせ、いいカモだって思っているでしょう？ 最初から治す気なんて無かったんだ。毎週通ってくれた方が、お金になりますもんね。責任が掛かりそうなことは言わないで、適当に相槌打って聞き流してればいいんだ。楽な仕事だよなあ。僕にだって出来ますよ。でも、もう終わりです。あなたには、僕を救えなかった」

鏡さんは視線を落とし、こちらに右の手のひらを差し出してきた。

「手、出してもらえる？」

言われるがままに右手を出す。握手をした形から、鏡さんの左手が添えられ、包まれた。

その温もりは、僕の欠けていた部分に染みこんでいった。思わず目頭が熱くなる。

「私には、あなたを救うことが出来ない。私に出来るのは、あなたが、あなた自身を救おうとするのを、お手伝いすることだけ」

鏡さんは一呼吸おき、僕の目を見つめた。

「いい？ あなたを救ってあげられるのは、他ならぬあなたなの。あなたしかいないの」

堪えきれず、嗚咽が溢れだした。まるでダムが決壊したかのように、全てを洗いざらい押し流していった。背中が摩られるたびに全身が波打ち、止めようにも止められなかった。母親から引き離された赤ん坊のように唸り声を上げ、恥ずかしさで死ねそうだった。今すぐ消えてしまいたかった。けれど、自分では自分をどうすることも出来なかった。ただただ目の前で荒れ狂う洪水が収まるのを待った。鏡さんは待ってくれていた。見守っていてくれていた。どうしようもない僕を、許してくれた。

終了を告げるタイマーが鳴っていた。すると僕は、五十分近くも泣いていたのか。

「すみません……なんか、取り乱しちゃって」

袖で目元を拭う。

「すっきりした？」

「……はい」

なんだろう。この、懐かしいような、でも今まで一度も味わったことの無かったような、幸せな倦怠感。もっと浸っていたかったのに、これで終わりか。

「『大丈夫。なんでもやれば、何とかなるもんだって！ イケる、イケる！』」

それ、誰の台詞だったっけ。ダメだ、思い出せない。

帰り際は、普段と変わらなかった。

「またね！」

鏡さんは大げさな素振りで手を振り、見送ってくれた。この人とは、もっと早くに出会っておきたかったな。

すれ違う人々は、今からこの人間が自殺しようとしていることに、気付いていない様子だった。

「もう少し、時間をくれないか？」

〈はあ？〉

要求は到底受け入れられないというようなトーンだ。

「もっと他に、方法は無かったのかな……って」

〈何を今さら〉

死神は、小石を蹴っ飛ばした。

〈この世界に希望なんて無かったじゃないか〉

「でも……」

〈お前さあ、もうほとんど死んでんの。“お前に”殺されてんだよ。自覚無いの？〉

「僕は――」

〈時間だ〉

高架下へと入り、辺りが暗くなった途端、死神の姿が異様にハッキリと見えた。

〈安心しろ。お前は俺が、楽に死なせてやる〉

違う。こいつは死神なんかじゃない。僕は、この子を知ってる。

〈あとは――『おれにまかせとけ』〉

思い出した。この顔。この声。

「そうか……君は――」

列車が通り過ぎていく音によって、僕の声は叩き消された。

〈おやすみ、相棒〉

死神のが伸び、僕の体の中へと侵入してくる。呼吸が出来なくなる。頭の中がザワザワする。全身から力が抜け、膝から地面に崩れ落ちる。意識が朦朧として――

【対話】

「僕も立派なメンヘラですね」

———どうして？

「情緒不安定だし、薬だって飲んでるし、人に迷惑ばかりかけてるし」

———そんなことないよ。

「もう毎日、毎分、毎秒、死にたいと思ってますよ」

———死にたいくらいに、辛い。

「僕みたいなクズは、生きてたって仕方ないですよ。生きてちゃいけないんだ」

———どうして、そんな気持ちになるのかな？

[沈黙8秒]

———そもそもの原因は、何かな？

[沈黙10秒]

———いつから、そう思うようになったのかな？

「.....わかりません」

———最近かな？

「いや、最近ではないです。いつからだろう.....高校を辞めた時も、彼女にフラれた時も死にたいって思ったし、友人に無視された時だって、死にたいくらい辛かった.....でも」

———でも？

「物心ついた時から漠然と、この世界は偽物で、本当の世界がどこかにあるはずだと思ってました」

———幼稚園生くらいの時？

「幼稚園には行かされてなかったけど、そのくらいの頃です」

———ふうん。

「前に、妄想世界のことをノートに書いて遊んでたって言ったじゃないですか」

———言ってたね。

「あれで現実逃避のやり方を覚えたっていうか。何か辛いことがあったら、周りとの関係を一切遮断して、ひきこもるんです」

———妄想することで、心のバランスを保ってきた。

「まあ、気休めなんですけどね。問題は何も解決しないまま、そこに残ってる」

———問題が、ある。

「やっぱり.....」

[沈黙30秒]

「やっぱり、家族関係が歪んでいたと思うんです。何度思い返してみても、最後はそこに行き

着く」

——うん。

「始めから狂ってると、狂ってるのに気が付かない」

——普通の家族ではなかった？

「表面的には普通でしたよ」

——四人家族だったよね。ご両親と、一個下の妹さんと、あなた。

「離婚する前はそうでした。仕事熱心な父、教育熱心な母、成績優秀な妹、出来損ないの僕」

——妹さんとは、よく比べられた？

「全てにおいて比べられました。成績もそうだし、普段の行いの何から何まで。代理戦争をやらされたんですよ。父方に妹、母方に僕」

——ふむ。

「だから妹とは殺伐としてましたね。ほとんど口をきかなかった。家で顔を合わせても、お互い無視。それに妹も、僕のことを兄だとは思ってませんでした」

六歳の時。近くの運動公園。

母の思いつきで開催されたピクニックに、妹が乗り気でないのは子供ながらに察していた。母と父は、昼ご飯にしようと木陰にビニールシートを広げていた。

「ちょっと、ユカちゃんのこと見ててくれる？ もうカオちゃん、お兄ちゃんなんだから」

犬のぬいぐるみを抱えた妹は、遠くで一人、遊んでいた。

僕は妹のところに向かい、話しかけた。

「おにいちゃんとあそぼう」

妹は僕の言葉に全く耳を貸そうとはせず、草むらの上に犬を立たせることに集中していた。

倒れそうになった犬のぬいぐるみに手を伸ばした瞬間、その手を魔法のステッキで叩かれた

。

「さわらないで！」

犬が倒れた。

「おまえなんか、おにいちゃんじゃない！ あたしに、おにいちゃんなんていない！」

その目は虚空を睨みつけたまま、微動だにもしなかった。

——キツイね。

「でも本当のことですから。僕と妹は、血が繋がってないんです」

——そうなの？

「お互い違う家族だったのを、無理やりくっつけたんですよ」

——詳しく聞かせてもらえる？

「僕が六歳の時、母が僕の生みの父と別れて、あの義理の父と結婚したんです。妹は、義理の父

の連れ子なんです」

———そうだったんだ。

「当時、僕と母はボロいアパートに住んでたんですが、結婚してから義理の父の一軒家に移り住んで」

———再婚じゃなくて？

「生みの父とは籍を入れてなかったみたいです」

———そう。

「家が変わった時、僕の名前も変わりました」

———名字が。

「名字だけじゃなくて、名前も。《照太》っていうのは、義理の父が付けた名前なんです。生みの父に付けられた名前が、あまりにも酷すぎたから」

———なんて名前？

「カオスです。災いに悪と書いて《災悪(かおす)》。いくら望まれずに生まれた子供だからって、酷すぎませんか？」

———酷すぎるね。

「頭おかしいでしょう？ 暴力だって振るわれましたよ。言うこと聞かないと、殴られたり蹴られたり、手の甲に煙草を押し付けられたり」

———酷い。

「たぶん働いてませんでしたね。昼は家で酒飲んでゲームしてるか、パチンコ行ってるか。たまにギター弾いて歌ってましたが、下手クソで。母とは喧嘩ばかりしてました。あ、そうそう。家に知らない女の人を連れてきたこともあったな」

アパートの家の中に、僕と、父と、父の女がいた。

僕は父の言いつけ通りにゲームを進めながら、タイミングを窺っていた。

「しっ、しっ」

それは父の合図だった。その合図で僕は、テレビをキャスターごと押入れの中へと引きずって行く。

「いいか、レベル上げだけだぞ。ストーリー進めんなよ」

僕は首を縦に振った。押入れの戸が閉まり、テレビの発光が闇を照らした。

僕はゲームの世界で何度も何度も同じ場所を往復し、何度も何度も同じ敵を倒していった。

外から獣の雄叫びが聞こえてくる。これも、いつものことだ。

とっていたら、その日は違った。

「だれだぁ！！ そのおんなぁ！」

魔王が降臨し、世界を破壊していく。

村人たちの悲鳴。駆けていく足音。しばらくの静寂。

押入れの戸が開かれ、明るくなった。そこには包丁を持った、魔王が立っていた。

魔王の手によって、僕は押入れから引きずり出された。魔王は呻き声を上げながら、僕の頬を一心不乱に叩き続けた。

大丈夫。痛いのは最初のうちだけだ。こういう時は、いつも彼が助けに来てくれる。

〈おれにまかせとけ〉

僕の魂は天井へと浮かび上がり、その光景をまるで他人事のように見つめている。魔王の怒りが収まるまで、一人の勇者に、世界の命運を託すんだ。彼は、捻くれた顔で笑っていた。

どれくらいの時間が経っただろうか。いつの間にか、魔王の姿は消えていた。僕は、その人に抱きしめられていた。

「これからは、二人で生きていこうね」

「そう言っていたんですが、それから一週間も経たないうちにあっさり結婚して。きっと、母の方にも計算があったんでしょう。時期を見計らってたというか。それから父とは、一度も会ってません」

——義理のお父さんは、どんな人だった？

「義理の父は会社員で、真面目な人だったんですが、冷たい人で、あまり家庭のことに関わりたがりませんでしたね。それに出張も多くて、ほとんど家にいなかった。僕の方の授業参観や運動会には来ない。お小遣いやお年玉も貰ってたんですが、なぜか銀行振り込みで」

——義理のお父さんは厳しかった？

「厳しいというか、基本的に人間不信でしたね。それと、自分に課したルールに忠実な人でした。結婚しているうちは、僕を養うことを絶対の義務のように考えていたようで。離婚が決まった途端、縁を切られましたよ」

ノックの音がした。

僕は鍵を外し、ドアを開けた。予想通り、義父が立っていた。

「名字は以前のものに戻せるが、どうする？」

「このままで、いいです」

「そうか……何にせよ、この家は売りに出すから、お前らは月末までに出ていけよ」

「もう少し、待ってもらえませんか？」

義父は苦笑した。

「お前も甘いんだよ。とっとと社会に揉まれてこい。今まで自分がどれだけ恵まれていたか、わかるはずだ」

義父は僕に背を向け、部屋から出ていった。

雷の音がして、雨が降り始めた。

——冷たいね。

「実際、その通りでしたから」

——うん。

「それでもアイツよりはマシですよ」

——アイツって、お母さん？

「殺したいくらい、憎い」

——うん。

「押入れを整理してたら、古い書類が出てきて……自分が施設に預けられていた記録がありました。それで思い出したんです。そういえば物心つくかつかないかの頃、僕は施設とアパートを行ったり来たりの生活をしてた。あの人は、僕を安住の地から引き離す魔王だった。恐くて甘えられなかった。泣いたら叩かれた。今でも僕は、アイツのことを親だとは認めてない」

——虐待されていた。

「その度に、彼に助けてもらって」

——彼って？

「僕の中にいる、もう一人の自分です。彼は僕がピンチになると、必ず助けに来てくれる。僕を庇って、代わりに攻撃を受けてくれるんです。僕は上からそれを見てる。僕が一人で寂しいときは、彼が異世界での冒険話をしてくれる」

——そう。

「僕の成績が下がると、血相を変えて叩く。怒鳴り散らす。メシ抜きにする。自分の思うとおりに僕が動かないと、キレて罰を与えようとするんです」

——傷付くね。

「それでもこっちからは絶対に反撃しなかった」

——偉い。

「見下すためですよ。反撃したら、責められなくなるじゃないですか」

——なるほど。

「弱い人なんです。情緒不安定で自分に甘い、人に依存してないと生きていけない、コンプレックス丸出しの痛いガキ」

——よく分析してるね。

「同族嫌悪だから、わかる」

——ああ。

「お酒を飲むと、手に負えなくなって」

——小さい頃から？

「結婚してからですね。専業主婦になって、暇になったんじゃないですか？ 酔っぱらって、朝方帰ってくることもザラだった。中退して家に戻ったら、さらに悪化してて。夫婦喧嘩の原因も、だいたいそれ」

——ご両親の仲は悪かった？

「前の父との喧嘩みたいに殴り合いまでは無かったですが、母が物を投げたりするんで、リビングが散々な状態になる。終わったら、僕が片づけに行く」

——苦労してるね。

「たまに義父が帰ってきた夜は空気がギスギスしてて、家にいたくなかった。妹が家出したくなる気持ちもわかります。僕は行くところが無かったから、自分の部屋でヘッドホンして、ゲームの世界に帰ってた」

——うん。

「ウチは皆、誰かからの命令で、家族プレイをやらされているっていう感じでした。契約上、期間内は一緒にいなくてはならなくて、仕方なく一緒に住んでいるだけ、というような」

——そう。

「だから離婚も必然だったんだと思います。キッカケは妹の妊娠でした。それを母が、からかって」

妹を取り巻く状況に異変を感じた僕は、リビングの扉の背後から、二人の様子を盗み見ていた。

「最近の子はお股が緩いわねえ。親の顔が見てみたいわあ」

「なんだと？」

「父親が家庭を放ったらかしにしてっから、娘が不良になんのよ。あははっ」

「お前が言えたことかよ。いい歳して若い男と遊んでるくせに」

「なあに？ 証拠でもあるわけえ？ 名誉棄損で訴えるわよ」

「ああ、こっちは裁判したっていいが？ 証拠もあるしな」

義父が何やら写真のようなものを数枚、テーブルに投げ出した。それを取り上げた母の表情が、恐怖に歪んだ。

「なっ……これっ、あんた……」

「お前の息子が成人するまでは泳がせてやろうとも思ったが、気が変わった。離婚だ。今すぐサインしろ」

義父が一枚の紙を取り出し、母の前に置いた。

衝動的にそれを引きちぎった母は、言葉にもなっていない言葉で義父を罵倒し、手当たり次第に近くの物を投げつけた。

義父は母から背を向け、こちらに向かって歩いてきた。扉が開き、僕は義父から目を離した。

義父は何も言わず、家から出ていった。

——辛い思いをしたね。

「僕より不幸な人は、世の中に腐るほどいますよ。僕が、弱いだけですよ」

———あなただって辛かった。

[沈黙1分15秒]

「……生みの父がいなくなったのは、自分が良い子じゃなかったからだって、今でも思うんです。バカみたいでしょう？」

———お父さんに、会いたい。

「父も、根は良い人だったと思う。一緒にゲームして遊んでくれたし、パチンコで勝った時はお菓子をくれて、競馬場にも連れてってくれた。暴力だってたくさん振るわれたはずなのに、楽しかった記憶ばかり思い出して、それで、悔しくて……」

———悔しいね。

「義理の父にも、罪悪感があります。僕の方も、義父からは距離を置いていたので」

———うん。

「ホント、よく耐えてくれたと思いますよ、あんな人に。愛想の無い、義理の息子だって養ってくれたし」

———うん。

「妹だって寂しかったんだ。始めのうちは、毎日泣いてましたよ。お母さんを病気で亡くしたんです。無理もないですよ。しばらく経って落ち着いたんですが、僕と母には心を閉ざして、関わろうとはしなかった。どんな時も、まるでそこにいないかのように振る舞う。それで母がキレて、物を投げる」

———そう。

「母も追い詰められてました。前の家にいた頃は、死ぬほど働いてた。夕方に家を出て行って、朝方に帰ってくる。枯れ木みたいに痩せこけて、いつもフラフラだった。父と喧嘩して、殴られて、ずっとトイレで泣いてた……それで限界になって、僕にクスリを飲ませようとした」

母は、手に山盛りの錠剤を出した。

「はい、あーんして、あーん」

僕は椅子に縛り付けられ、得体の知れないクスリを、口に流し入れられようとしていた。

「ヤダ！」

僕は子供なりの直観で、母が僕のことを殺そうとしていることがわかった。

「天国に行って、お母さんと幸せに暮らそう」

「ヤダ！ ヤダ！！」

「死んでちょうだい、ねっ」

僕の口は指で乱暴に開けられ、大量の錠剤を流しこまれた。それらを懸命に吐き出す。

このままではクスリを飲まされる。死んじゃう。死にたくない。怖い。

僕は幼い頭で必死に考え、渾身のジョークを繰り出した。

「おおショーコ！ しんでしまうとは、なさけない」

しばらく母は呆然とした顔で僕の方を見ていたが、みるみるうちに顔が歪んでいき、テーブルに顔を伏せて泣きだした。

まるで子供のように、泣いていた。

——恐かったね。

「でも、親を責められないですよ。彼らには、子供を愛する余裕が無かったんだ」

——どうして、そう思うの？

「自分には、両親以外の親類がないんです」

——えっ？

「おかしいですよ？ 普通、母方の祖父とか、父方の祖母とかいるもんじゃないですか。でも、いないんです。今までにそういう人たちと、一度も会ったことが無い」

——聞いてみたことは？

「あります。けど二人とも、いや、三人とも話してくれなかった」

——そう。

「もしかしたら彼らも、自分の親との関係が上手くいってなかったのかもしれない……きっと、同じことが繰り返されたんだ。これまでのこと、後悔してますよ。なんで自分の方から、彼らに優しく出来なかったのか。彼らだって、たくさん辛い想いをしてきたはずなんだ。それなのに僕は、彼らのことを、どうしても許せなかった。大切に思えなかった。僕には、身近な人を思いやるだけの、愛がありませんでした」

勇者たちは城へと戻り、四つ目のクリスタルについて、女王から話を聞いていた。

「それに関しては私も存じません。そもそも、クリスタルの数は三つだと聞いております」

「けど、三つのクリスタルだけじゃ、聖剣を引き抜くことが出来なかったんだ」

「そうですか……」

「どうする？ お兄ちゃん」

「この大陸は全て探したはずだから、あるとすれば他の大陸か。でも、もう船は……」

「失礼ながら、王子」

勇者の前に、大臣が歩み出た。

「こちらへ」

勇者たちは大臣の先導で、城の外を見まわすことの出来る露台へと導かれた。

「うおおお！！」「スゴッ！」「これは……」

城の外に、一隻の飛空艇が鎮座していた。

「世界救済のため、私どもが総力を結集し、飛空艇を完成させました。どうか、お使いください」

「やったあ！」「よっしゃあああ！！」

その時、背後に控えていた女王の脳裏に、不吉なイメージが湧き起こった。黒い煙に覆われた巨大な何かが、天空を貫き抜け落下してくる。煙の中の赤々と燃え盛る隕石が落ちていく先に、この城があった。

「待ってください！」

「何だ？」

女王の差し迫った一声に、勇者が振り返る。

「この城に、大いなる災いが訪れようとしています」

「また、何か見たのか？」

「はい……」

「大丈夫だって、お母さん！」

魔導士が女王の元に駆け寄った。

「アタシたちがサクッと世界を救ってくるから、心配しないで待っててよ！」

「もう一つのクリスタルを見つけなければ、俺たちは先へ進めないんだ。わかってくれ」

女王の表情は次第に、驚きから諦めへと変わっていった。

「これもまた、運命なのでしょう」

勇者たちは大勢の見送りの元、飛空艇に乗りこんだ。

魔導士は、そばまで駆けて来た一匹の犬に、別れを告げる。

「じゃーね、パテル。良い子にしてるんだよ」

「ワンッ」

犬が出ていき、ハッチが閉まる。

勇者は艇の窓から、城の二階で見送っている女王の姿を見た。

「行ってくる」

飛空艇は独特の機械音を鳴らしながら浮上し、180度旋回した。

巨大な艇に巻き込まれた空気の塊が、突風となって人々の間を吹き抜けていく。

「どうか、お気をつけて」

女王は靡く髪を押さえながら、消えゆく艇の方を見つめていた。

勇者たちは飛空艇に乗り、今までに訪れていなかった、世界のあらゆる場所を探索していった。エルフの潜む森、海底洞窟、天空に浮かぶ大陸、ドラゴンの舞う火山地帯。訪れた先々で、待ち受ける敵を倒しては人々を助けだし、クリスタルを探してまわった。

しかし、クリスタルは一向に見つからず、その噂すら耳にすることが叶わなかった。

夜、森の中で焚き木を囲み、勇者たちは途方に暮れていた。

「やっば、四つ目のクリスタルなんてねえんじゃねえかなあ」

盗賊は不貞腐れて肘をつき、体を横にしていた。

「しかし、あの賢者が嘘をついていたとも思えません。実際、聖剣は引き抜けなかった訳ですし」

僧侶は膝を抱え、炎を見つめていた。

「あーあ。どっかに落ちてないかなあ、クリスタル」

魔導士は寝ころび、夜空を眺めた。そして、雲の隙間から突き抜けてくる、一筋の黒煙を見つけた。

「あれ……なに？」

魔導士は黒煙を指さした。その中心部は赤々と燃え盛り、遠くからでもその巨大さを伺い知ることが出来た。

「あれは……〔メテオ〕!？」

「おいおい……あっちの方って、まさか！」

「城だ！ 帰るぞ！」

勇者たちは飛空艇に急ぎ乗りこみ、城へと飛んだ。

大地を揺るがす轟音が鳴り響く。衝撃波が後追い、飛空艇を襲う。

「きゃあああああ！！」「うっわあああ！！」

魔導士と盗賊が艇の中を転がっていく。

僧侶は慣性で後方に投げ出されそうになるも、瞬時に柱を掴んだ。

「イグニス！！」

僧侶が勇者に、もう片方の手を伸ばす。勇者の手はギリギリのところまでそれを捕らえた。

「助かった……けど、城は……」

勇者は窓から外を覗いた。城は既に半壊しており、赤い炎に包まれ、黒い煙が立ちのぼっていた。

飛空艇を城の前に着陸させ、勇者たちは怯えている兵士たちの元へと向かった。

「女王は！？」

「それが、私たちに城の外へ避難するよう命じられた後も、中に籠ったままで」

「なんで助けに行かないんだ！」

勇者は兵士の胸ぐらを掴んだ。

「決して、城の中には入らぬようにとの、御命令でしたので……」

「チッ！」

「アーン」

犬の鳴き声がした。

「パテル！」

犬の元へ、魔導士が駆け寄る。その体毛は煤にまみれ、黒ずんでいた。

「ワウワウ！」

「『こっち』だって！」

「行くぞ！」

勇者たちは駆けていく犬の後を追った。城の中は無残にも破壊され、原型を留めていなかった。

「ウォンウォン！」

犬が止まったところには、瓦礫の山があった。その隙間から、人の腕らしきものがはみ出している。

勇者は、あらん限りの力で瓦礫をどかし、下敷きになっていた真っ黒な人間を引きずり起こした。

魔導士は思わず口元に手をやる。

「お母さん……」

魔導士はその場に屈み、目に涙を溜めながら、勇者に抱えられた母親の手を取った。

「……テ……ラ……」

勇者の腕の中で、女王は果てた。

「お母さん！！ ねえ！ しっかりして！！ アクア！」

僧侶は杖の先を、それに向けた。

「『ベホマ』」

[へんじがない。]

[ただの しかばね のようだ。]

「『ザオリク』」

[へんじがない。]

[ただの しかばね のようだ。]

「『ケアルガ』 『アレイズ』」

[へんじがない。]

[ただの しかばね のようだ。]

「『リザレクション』 『レイズデッド』 ー」

「やめろ！もういい.....」

僧侶の杖が、手をすり抜けて落ちた。魔導士は、堪えきれずに泣き伏せた。

「お母さん！！ いやー！ いやだよー！ 死んじゃいやだよー！！」

煙が立ちこめる廃墟の中、母を求める娘の慟哭が、虚しく響いた。

しばらく経ち、勇者たちは、空から降り注ぐ暖かい光を感じた。

「イグニス.....テラ.....」

それは聞き慣れた、優しい声だった。

「お母.....さん？」

魔導士が見上げた先に、女王の霊が浮かんでいた。その側には、犬の霊も並んでいる。

「何も心配することはありません。全ては予言の通りに、事が進んでいるのです」

「ワウ！」

「えっ.....パテルも？ウソでしょ？」

勇者たちの横で、犬も息絶えていた。

「パテルとも、ここでお別れだ」

「そんな.....」

「私たちは、いつでもあなたたちを見守っています」

「行っちゃダメ！ お母さあん.....パテルウ.....」

「頑張るのですよ、イグニス、テラ。私の子供たちよ.....」

女王と犬は天へと昇華していった。彼らの遺体も、いつの間にか消え去っていた。

勇者たちが感傷に浸る間も無く、城の崩壊していく音がする。僧侶が二人に声をかける。

「早く出なければ。ここにいると、危険です」

勇者の腕が魔導士の震える肩を抱き、一同は城を後にした。

炎が城を呑みこんでいく傍らで、少女が一人、泣いていた。

「エッ.....エッ.....」

兄が妹の元へ歩み寄る。

「テラ.....」

「お母さん……いなくなっちゃったあ……アタシのせいだ……」

「テラのせいじゃない……俺だって悪かった……」

妹は兄を見上げた。

「お兄ちゃんは、どこにも行かないでね」

兄が妹を抱きしめる。

「ああ……俺は、ずっとテラと一緒にだ」

「約束だよ」

「うん」

どれほどの時が経っただろうか。魔導士は顔を上げ、暗闇の中に光るものを目にした。

「ねえ、お兄ちゃん……あれ！」

魔導士が指さした先、城の地下、大破で剥き出しになった土台部分に、その光源があった。それは黄色に輝いている。

「クリスタル！」

「取ってこよう！」

二人は、小さな崖と化した堀を下りた。

勇者の手が、石垣の隙間に埋まっていた結晶を掴み取る。

[イグニスは 土のクリスタルを てにいれた！]

「なんで……お母さん、何も言ってなかったよ！？」

勇者はクリスタルを見つめた。

「きっと母さんも……こんなところにクリスタルがあるなんて、知らなかったんだ……」

神殿にて、勇者は四つ目のクリスタルを祭壇に供えた。それと同時に、聖剣を収めていた台座が光を放ち始める。

勇者は剣の柄を両手で握った。

「準備はいいか？」

「うん！」 「いつでもいいぜ」 「……はい」

勇者は聖剣を、力一杯に引き抜いた。

眩い光が四人を包み、彼らの体が異世界へと転送される。

勇者は目を開けた。そこは移動する前と同じ神殿のようであったが、見るも無残に朽ち果て、天井は無くなっていた。昼とも夜ともつかぬ薄暗がりの世界。周囲には不気味な瘴気が立ちこめている。

「ここは……」

「闇の世界……なのか？」

「なんか、さむーい」

勇者たちは神殿を出て、辺りを探索した。町の広場、連なる商店、周囲の風景、何もかもが光

の世界のものと似通っていた。しかし、そこから人の気配だけが消え失せている。

「おいおい。ここ、ホントに闇の世界なのか？ 向こうと変わんねえじゃねえか」

「しかし、建物は老朽化していますし、同じ時代だとは思えません。もしや……未来？」

「ええー！ もう世界は滅んじやったってことお！？」

「城もあるみたいだ。行ってみるか」

隕石によって壊滅したはずの城は、まるで何事も無かったかのように、そこに聳え立っていた

。

城の入口近くまで足を運んだところで、先頭の勇者が三人を押し留めた。

「待て、誰かいる」

漆黒の鎧を身に纏った騎士と、金の鬣を靡かせた黒い魔獣が、城の入口前で待ち構えていた。

「うわあ、またアイツらだあ。どうする？ お兄ちゃんには、聖剣があるよ」

「いや、無用な戦闘は避けたい」

「なら裏口から入るか？ なあに、この城ならオレの庭みたいなものよ」

「そうしよう」

勇者たちは城の裏手まで回りこみ、隠し扉から中へと侵入した。

「誰もいないみたいーい」

城の中には人影はおろか、魔物の姿さえも見当たらなかった。

僧侶が耳をすませた。

「何か聞こえますか？」

城の奥へと進んでいくにつれ、その音は次第に大きくなっていった。剣が弾かれる音。巨体の足音。火炎が吐き出される音。

物陰から大広間の様子を覗くと、一人の戦士と五頭の竜の戦闘が行われていた。

勇者には、その戦士の顔に見覚えがあった。乱れた髪、逞しい背中、無精髭。

勇者の頬を、涙が伝う。

「……父さん」

トドメの一撃を受けた竜は戦士の前に倒れ、姿を消していった。戦士が、息子の声に振り返る

。

「よお」

照れくさそうな、子供のような、不器用な笑顔。それは確かに、幼き日に別れた父のものだった。

「ああ」

息子は、父に返す言葉を見つけられなかった。言いたいことはあった。ぶつきたい想いもあった。しかし、それらは言葉の形を成そうとはしなかった。

「へっ！ 背ばっか伸びて、ヒョロヒョロじゃねえか！ ちゃんとメシ食ってんのか、ああん？」

」

父は安堵の表情を浮かべた。

「でかくなったな」

二人の想いは交わされた。息子は父の全てを赦し、為すがままに泣いた。失われた時間を取り戻すかのように甘えた。

その至福の時も束の間、一刃の闇が、二人の前に現れた。

「過ぎ去ったことに縛られ、未来の時間を無駄にすることは容易い」

野太く、しゃがれた老人の声。

「誰だあ？」

目をハチマキで覆った、黒き甲冑の侍が刀を引き抜く。

「だが、それは何も生み出さぬ。前に進むことが出来ぬ」

「来い、化け物め。俺様が相手だ！」

戦士は息子を庇って大剣を構え、振り下ろされた侍の刀を受け止めた。

「この城の二階に、黒の卵がある。そいつをぶっ壊すんだ。いいな！」

「わかった！」

勇者は想いを断ち切るように、目元を腕で拭った。

「行くぞ！！」

駆けていく彼らを見届け、戦士が呟く。

「お前は俺より先に死ぬな。イグニス……俺の息子よ」

「身のほど知らずの蛆虫めが！ 死ねい！！」

侍が再び戦士に切りかかる。刀と大剣が弾き合う。

「うおおおお！！」

勇者は階段を駆け上がり、女王の間の扉を開け放った。

この部屋の中にも、同じく人の気配は無かった。四人は注意深い足取りで、奥へと進んでいく。

部屋の中央には、この世の闇を全て凝縮したかのような、漆黒の球体を乗せた台座があった。

「ようこそ、光の勇者さん」

「あんたは……」

女王の玉座に、白い衣を着た仮面の賢者が、寝ころんでいた。

「ホント言うと、あのお爺ちゃん来るまで待っててほしかったんだけど、思わぬ邪魔が入ったもんだ」

「言われた通り、ここまで来たぞ。さあ、『世界救済の真実』ってやつを教えてくれ」

「知らない方が良くても、あるんじゃない？」

賢者は玉座から立ち上がり、勇者たちの方へと歩いてきた。

「覚悟は出来ています」

僧侶が険しい表情で、前に出た。

「そっか……なら、教えてあげる……」

賢者は球体に寄りそい、その頂点を愛おしそうに撫でた。

「この、黒の卵を壊せば、君たち四人は……死ぬ」

「ウソ……」 「なっ……」 「そんな……」

「どういうことだ？」

「この世界の全て、つまり光と闇の二つの世界は、黒の卵が投影している幻想なの。だから、これを壊せば、君たちだけじゃない、この世界の全ての人々、この世界そのものが消滅することになる」

「では、私たちは何のために……」

「そう、それがこの世界の正体――」

賢者の衣が、白から黒へ染まってゆく。

「――とある少年の記憶が、死に際に見た夢の中で、再構築されたファンタジー」

邪神官と呼ばれていた、禍々しき姿へと変わってゆく。

「まさか、お前！！」

「君は、あの世界で傷ついた。その絶望が、その無念が、この世界を創りだしたの」

「はあ？ 意味わかんねえんだけど」

盗賊は首を傾げた。

「心の準備は出来たかな？ チクンとするけど、堪えてね」

杖に巻きついてた二匹の蛇が伸び、勇者の頭に牙を刺し、彼の脳裏に膨大な量のイメージが注ぎ込まれた。

「うああああああア`ア`ア`ア`ア`ア`ア`！！！！」

ひきこもり、照太、退学、剣道、スポ薦、いやがらせ、豺虎、敗北、挫折、いじめ、颯真、嘘、ノート、屋上、ボス猿、濡れ衣、失恋、メンヘラ、泉純、リスカ、援交、ラブホ、狐顔の男、カルト、家庭崩壊、父との別れ、冷たい義父、病んだ母、虐待、優佳、妊娠、離婚、災厄、自殺。

勇者は、失われていた記憶を取り戻した。今まで自分が何者だったのかを、これから自分が何を為そうしているのかを。

「そうか……俺はアイツだったのか。それじゃあ、魔王は……」

「ねえ、お兄ちゃん。どういうこと？」

魔導士が後ろから、勇者の顔を窺った。

「うるせえ」

「うわあ！」

勇者は魔導士の体を払いのけた。突き飛ばされた魔導士の顔に、恐怖の色が滲んだ。

「この世界が幻想？ バカ言うなよ。俺は、ここで生まれたんだ。“この世界こそが現実”だ」

勇者は背中から聖剣を引き抜き、手元でクルリと回して、肩に担いだ。

「だいたい、あっちの世界の奴らだって、自分の見たい現実しか見てないじゃないか。奴らと俺と、いったい何が違うんだ？」

勇者は、球体の方へと歩いていき、盗賊とすれ違う。

「ホ、ホントに……やっちまうのか？」

盗賊の声は震えていた。

「ああ」

勇者の声に、躊躇いは無かった。

僧侶が両腕を広げ、勇者の前に立ち塞がる。

「なんだよ」

「こんなの、間違ってる」

「覚悟してたんだろ？」

「私だけじゃない。みんな死んじゃうんだよ！ あなただって！！」

勇者は顔を伏せ、息を漏らした。そして、腹の底から突き上げるように笑い飛ばす。

「ははは！ そうだ！ 死ぬ時はみんな同じだ。素晴らしい世界の終焉だと思わないか？」

「そんな……うっー」

僧侶は聖剣に切り伏せられ、横によろめき倒れた。

勇者は黒の卵の前で剣を振り上げ、横目でチラリと邪神官の方を見やった。

「なんだ……お前は俺を止めないのか？」

どこかで門の開かれる音がした。

邪神官が勇者の目を見つめる。

「私は、あなた自身を信じてるから」

「ふん……まあいい」

蹄鉄が石畳を叩き蹴る音がした。

勇者が球体に狙いを定める。

「これで、ゲームクリアだ！！」

聖剣は振り下ろされた。

しかしその斬撃は、間に入った何者かの武器によって阻まれた。

剣と交えた物は、雷を纏った黒き斧。

剣を交えた者は、鎧を纏った黒き騎士。

「お前は……」

「『たとえ何であろうと、俺たちの大切なものを傷つける気なら、許しはしない』ってね！」

骸骨の兜の中から聞こえてきた声は、それに似合わぬ少年のものだった。勇者は予想外の敵の出現に、思わず飛び退いた。

さらにそこへ、金の鬘を靡かせた魔獣が駆けつける。背中には先ほどの侍が乗っていた。

侍は魔獣から飛び降り、邪神官の前まで進むと、彼女の手には紫色に輝くクリスタルを差し出した。

「これで、全てのクリスタルが揃った」

邪神官は四つのクリスタルを球体の周囲へと展開し、杖を天に掲げた。

「さあ、お目覚めの時間だよ。魔王！！」

球体から溢れだした禍々しき闇が、まるで滝が逆流するかの如く吹き上がり、城の天井を突き破る。

周りに立っていた者たちは、衝撃波の勢いに耐えるべく、腕を前にし、足を踏ん張った。

四つのクリスタルが上空に浮び、四枚の鏡へと変形する。そして四方の鏡面が中央に像を結び、何者かの影が形成されてゆく。その影を閉じこめた棺は、たちまち漆黒の真球となり、卵から雛が孵るかのよう、縦に亀裂が走る。卵が二つに割れ、中から生まれ出た何者かは、腕を組みながら、邪神官の前に悠々と降り立った。

黒い衣装に身を包んだ魔王。その素顔は、やはり仮面に覆われている。

魔王は片膝をついた勇者に歩み寄り、右手を差し出した。

「もし僕の味方になれば、世界の半分を君にやろう」

勇者はその手を払いのけ、一人で立ち上がり、魔王を見すえた。

「ふんっ。その手には乗らないぜ……照太」

勇者は魔王の仮面を取り払い、気弱そうな少年の顔が露わになった。

「僕は見てたんだ。上から、君たちの冒険を」

魔王の周囲に、これまでの冒険の数々が、幻影として浮かび上がる。

「正直、羨ましかった。そのどれもが、僕の人生に、欠けていたものだったから」

魔王は幻影を球体化し、その手の中に圧縮した。

「わかったんだ。僕は、僕の想いが。やっぱり僕は、死にたくない」

「何を今さら！！」

勇者の顔が、憎しみに歪んだ。構えた聖剣から光子の螺旋が迸る。

「忘れたのであれば思い出させてやる。あの世で味わってきた絶望を！ お前を傷つけてきた者たちを！！」

勇者の顔が、豺虎先輩のものに変わる。

「社会に期待は出来ない。理不尽で、残酷で、お前の身を食い潰す」

魔王は後ろに飛び退き、振り下ろされた聖剣を躲した。

勇者の顔が、ボス猿のものに変わる。

「友情も存在しない。みんな腹の探り合い、嘘と裏切りの演劇さ」

魔王は次々と繰り出される重い剣撃を受け流す。

勇者の顔が、狐顔の男のものに変わる。

「恋愛なんて最悪だ。女は男を値踏みする。男は女を見ていない」

魔王は一撃をくらい、よろめいた。

勇者の顔が、義父のものに変わる。

「家族はお前を愛さない。人は自分が愛されたいだけで、人を愛そうとはしない」

魔王は身体を切り刻まれ、後方に吹っ飛ばされた。

勇者の顔が、元に戻る。獲物に食らいついた聖剣から、赤い血が滴り落ちる。

「あんな世界に、生きる価値なんて無かったろう？」

魔王は歯を食いしばって立ち上がり、絞り出すようにして声を出す。

「彼らだけじゃない……」

その体を、どこからともなく唱えられた回復魔法が癒した。

「鏡さん」

邪神官が仮面を脱ぎ捨て、カウンセラーの顔が現れた。

「やはりお前か……」

「それに、私だけでもないんだよ」

「ソーマ」

黒騎士は骸骨の兜を脱ぎ、艶やかな銀髪を流した。

「よっ、はじめまして」

彼は勇者に向かって、片手を上げた。

「川蝉」

「せんぱあい。なんでアタシ、こんな格好なんですかぁ？」

魔獣は着ぐるみの頭を外すようにして、愛嬌のある顔を見せた。

「今はもう、こんなに太ってないってばぁ！」

魔王は微笑んだ。

「金居先生」

侍が、その目を覆っていたハチマキを解く。

「お前に一目会った時から、心にコイツを飼っているのを知っていた。ようやく出てきおったな、小僧」

放たれた鋭い眼光に、勇者は思わず後ずさった。

「僕にだって、手を伸ばしてくれた人はいた。でも、僕の方から逃げたんだ。また嫌われるのが、怖かったから」

「だから何だってんだ！！」

勇者が魔王に聖剣を突き立てた。

魔王は右手でバリアを張り、それを受け止める。

「そいつらは、これからもずっと、お前のことを大切にしてくれるのか？」

バリア越しに、勇者と魔王が向かい合う。

「どうせ今だけだよ！！ いずれ、お前のことを重荷に思っで見捨てるさ！」

勇者の瞳には、怨恨の焰が灯っていた。

「僕だって努力する！ みんなに、見捨てられないように！！」

魔王の波動によって弾かれた聖剣は、回転しながら後方の床へと突き刺さった。

勇者は動ずることなく、魔王に背を向けた。

「ふんっ、まあいい。仮に、お前の周りには幸運にも、お人好みな連中がいたとしよう」

そして、横顔で魔王を嘲笑う。

「で、ザコキャラの“お前”に、生きる価値はあるのか？」

勇者の掲げた右手に呼応するように、傍で倒れていた盗賊、僧侶、魔導士の体が宙へと浮かんだ。

指が鳴らされたのを合図に、彼らは物質レベルまで分解され、エネルギーへと変換され、勇者の体内に取りこまれていった。みるみるうちに勇者の体は膨れ上がり、白亜の巨像へと変貌していく。

「この世界で僕は魔王と呼ばれてるけどー」

巨像の拳が頭上に振り下ろされ、すぐさま魔王は横っ飛びで回避する。衝撃によって砕けた石片が舞い上がる。

「僕から見ると、君の方こそ魔王に見えるよ」

「モ` オ` オ` オ` オ` オ` オ` オ` オ` ！！！」

聴覚よりも、触覚に訴えかけるような呻き声が響きわたる。

「オ マ エ ハ ス ベ テ ニ マ ケ テ キ タ ！！ ジャ ク シ
ヤ ノ ク セ ニ ！ ジャ ク シ ャ ユ エ ニ ！ カ ナ ワ ヌ ユ メ
ヲ オ イ カ ケ ル ！！」

――僕は、顧問の期待に、応えられなかった。

助太刀に入った侍が魔王を庇い、踏み潰される。

「オ マ エ ハ ヒ ト ヲ シ ン ジ ナ イ ！！ ウ ラ ギ リ ！
ウ ラ ギ ラ レ ！！ ニ ク ミ ！ ニ ク マ レ ル ！！」

――僕は、友人を信じきれなかった。助けられなかった。

黒騎士が巨像に攻撃を浴びせかけるも、その拳によって軽く弾き飛ばされる。

「オ マ エ ハ ヒ ト ノ キ モ チ ガ ワ カ ラ ナ イ ！！ ダ
レ モ オ マ エ ヲ モ ト メ ナ イ ！！」

――僕は、彼女に辛い思いをさせて、見捨てた。

魔獣が巨像に飛びかかり、その手に握り潰される。

「オ マ エ ハ カ ゾ ク ラ ダ メ ニ ス ル ！！ オ マ エ ニ
ヒ ト ハ ア イ セ ナ イ ！！」

――僕は、家族を許せなかった。思いやれなかった。

邪神官は巨像の猛攻を凌ぐことが出来ず、壁に叩きつけられて埋まる。

「そう……僕は、何者にもなれなかった」

そこに、魔王一人が残された。

「後悔してるさ。そりゃあもう、死にたくなるくらいにね」

魔王は、床に突き刺さった聖剣に向き合った。

「でも……だからこそ、僕は生きたい」

聖剣の柄を掴み、力一杯に、踏ん張る。

——僕は、社会に認められたかった。

——僕は、友達に囲まれたかった。

——僕は、女子に求められたかった。

——僕は、家族に愛されたかった。

「まだ、あの世界で演じてみたい、自分がいるんだ！」

聖剣は、放物線を描いて引き抜かれた。

「オマエニカノウセイナドナイ！！」

巨像が魔王を目がけ、足を踏み鳴らしながら詰め寄った。空間が、重々しく揺さぶられる。

「それでも僕は——」

魔王の構えた剣に、闇の二重螺旋が纏う。

「僕の——」

魔王は剣を天に掲げた。螺旋の回転速度が頂点にまで達する。

「物語の主人公だ！！」

振り下ろされた聖剣から漆黒の波動が放たれ、一直線に巨像の胸を貫いていった。

巨像は足を止め、胸に空いた虚ろな円を、まるで他人事のように眺めた。

一瞬の静寂の後、その虚空は自らの存在の無意味さを埋めようと、周りの一切を吸いこみ始めた。

魔王の体は真っ先に宙へと放り上げられ、その虚空の中へと消えていった。

白の世界。

僕は目を覚ました。隣で誰かが、すすり泣く声が聞こえる。

幼な子が一人、膝を抱えて泣いていた。

「君は、もう一人の僕だったんだね。小さい頃、よく話し相手になってくれたっけ」

「みんな、ボクをいじめるんだ」

僕は膝を落とし、その子を抱き寄せた。そうするべきだと思った。

「ごめん……君の声に、気付いてあげられなかった」

「ボクはいきてちゃいけないんだ。だからしぬんだ」

僕は、その子の頭を撫でた。そうしなくちゃいけなかった。

「なあ……あの世界を、もう一度見てみないか？ 僕の中に入ったまま、一緒に生きることで、

だ」

「いいのか？」

それは死神の顔に戻っていた。誰一人信じないと固く誓った、捻くれたその顔に。

「俺を殺さない限り、お前は俺に殺される」

死神は手に隠し持っていたナイフで、僕の背中を狙っていた。

「君を殺すことは、僕を殺すことだ」

僕は聖剣を呼び出した。

「だからこの剣は、もう必要ない」

聖剣は消滅した。

「わかったんだ。僕は、僕自身の声を、無視してきたんだって。だからこれからも、辛かったり、不満があったりしたら、僕に教えてくれないか？ これからは君の声を、ちゃんと聞くようにするから」

もう、僕と君との境界は消えたんだ。

「僕の世界の半分を、君に託すよ」

君は、ナイフを取り下げた。

「俺は容赦しねえぞ。今までの鬱憤が溜まってるからな」

「うん。何度でも、話し合おう」

「チッ……せいぜい頑張れよ」

君が僕に、溶けてゆく。僕は君に、なってゆく。

「ショータ！ ショータ！！」

僕は、うっすらと目を開けた。鏡さん、ソーマ、トン子、金居先生の顔が見える。

「先輩……ですか？」

トン子が心配そうな目で、こちらを見ている。彼女が手に持っていた鏡の破片に映っていた僕の姿は、魔王とも勇者とも見分けがつかぬものだった。彼の胸に空けたはずの虚空は、いつの間にか、僕の胸に空けられていた。

「ああ、僕だよ」

みんなが安堵の表情を浮かべた、その時。

床が揺れ動き、城の外壁が崩れ、周囲の風景が露わになった。あらゆる町や、城や、ダンジョンが、千切られ、剥がされ、宙に散らばっていく。

「世界の崩壊が始まるみたい。早く脱出しないとヤバいかも」

僕は、四人を見まわした。

「みんなの残っている力、全部、僕に貸してくれ」

「当たり前前だろお。ショータ、乗れ！！」

「うん！」

僕はソーマの後ろ、呼び出された馬の背中に跨った。黒馬が高らかに前足を上げ、嘶いた。世界が分解され、拡散していく。光と闇が、混じり合う。

黒騎士は馬を操り、その欠片の上を飛び跳ねるようにして渡っていった。

「出口はどこだ!？」

「あそこ！」

塔の天辺に立っていた鏡さんが指をさした。その先には、一段と大きな黒い渦巻状のゲートが浮かんでいる。

「おおっと！」

馬が急停止した。目の前に、ケルベロスが待ち構えていたのだ。

その三つの頭に、僕は見覚えがあった。父さん、義理の父、高校の顧問の顔。

対峙していると、どこからともなく、何人かの侍たちが現れた。

「しょーちゃん」「俺ら忘れちゃダメでしょー」「まーだ死ぬのは早いって」

「道場の先輩たち」

後ろから、侍姿の先生も歩いてきた。

「前を向いて行きなされ。光は前からやってくる」

「行くぞ!」「おおお!!」

掛け声と共に、戦闘が始まった。侍たちは素早い足さばきで敵の攻撃を躲し、華麗な連携で魔物の手足を切り裂いていく。その背中、いつもにも増して頼もしく思えた。

「お願いします」

僕たちはその場を彼らに任せ、出口へと急いだ。

森や、山や、海などが入り交じり、互いの境を失くしていた。

「またまたエンカウントだ!」

「えっ! ちょっ、ちょっと!!」

ソーマが馬から飛び降り、僕は慌てて手綱を掴んだ。

そして、地平線の彼方からやってくる、空を埋め尽くすほどの黒い大群を目にした。

「敵わないよ、あんなの……」

黒い群れは悪魔の軍団だった。ボス猿や彼の手下を筆頭に、知る者、知らぬ者、あらゆる顔ぶれが揃っていた。

「一人で敵わないなら、仲間を呼べばいいんだぜ」

ソーマが指笛を吹く。すると蹄鉄が地面を打ち鳴らす音がやってきた。一頭ではない、十数頭の群れによる連打だった。

「遅くなった!」

以前、勇者たちが森で遭遇した黒騎士団。彼らは兜を脱ぎ捨て、その素顔を露わにしていた。名前は知らないが、みんな見たことのある顔だ。

「ハッピーバースデー」

「えっ……？」

一人の女の子から貰った予想外の言葉に、僕は耳を疑った。

「今日は君の誕生日だよ。もう一つのね！」

「っしゃあ！ 行くぜえ！」

黒騎士たちはそれぞれに武器を構え、悪魔の群れへと果敢に突っこんでいった。悪魔たちは黒騎士たちの刃によって蹴散らされ、四方八方に飛び散っていく。ソーマが振り向いた。

「行け！ 世界を守れ！」

僕は頷き、馬を走らせた。上からは太陽に照らされ、下からは嵐に見舞われた。

突然、僕の体は馬上から放り出された。馬が何かに躓き、倒れたのだ。

「痛てて……」

僕は、僕を取り囲む、複数の視線を感じた。

「大丈夫？」 「怪我してなあい？」 「甘えていいのよ」

「一緒に遊びましょう」 「ずっとここにしようよ」

僕の顔を覗きこみ、クスクスと笑い声を上げていたのは、魔物の女たちだった。ラミア、マーメイド、サキュバス、アルケニー、ハルピュイア。僕は、彼女たちの顔にも、見覚えがあった。

いつの間にか周りの風景は、華やかな楽園へと変わっていた。

彼女たちは僕の体を起こし、腕を絡みつけてきた。骨が軋み、五体が引き千切られる痛みと同時に、全身を鋭い快樂の矢が貫いていく。一握りの危機感から抵抗を試みるも、力が抜けて、離れられない。もう死んでもいいや。そう思った刹那。

楽園に黒き魔獣が飛びこんできた。彼女は僕に纏わりついた魔物娘たちを追い払い、牙を剥き出し、威嚇した。トン子の心の声が聞こえてくる。

〈がんばって先輩……〉

魔物娘たちは、先ほどの柔らかな雰囲気とは打って変わり、狩猟者のオーラを放っていた。

〈私もまだ……〉

魔物娘たちの連携攻撃が、魔獣を襲う。

〈……がんばれる〉

魔獣は鋭利な爪と牙で五体の魔物に立ち向かう。幾度となく強烈な攻撃を受けながらも、彼女は一步も引き下がらなかった。

僕は息も絶え絶え、その楽園から逃げだした。

ゲートが見えた。すぐそこだ。

けれど走っても走っても、なかなか辿り着けない。むしろゲートは離れていくようにすら見える。いや、間違いなく離れていた。それも急速な勢いで。

僕は落下していることに気が付いた。重力のベクトルが垂直後方へと書き換えられ、僕は仰向けのまま、後ろに落下していた。

咄嗟に、何かを掴んだ。それはかつてダンジョンの壁面だったものであり、今では貴重な足場

へとその役割を変えていた。下には、底無しの深淵が口を開けている。

「今度こそ、死んだかな……」

腕の痺れから死を受け入れ、手を離れた瞬間。何者かによって、その手が掴まれた。

「絶対に離さないよ！ 絶対に！」

僕は、鏡さんの手によって引き上げられた。

彼女は杖を振り上げ、重力のベクトルを元に戻した。足元は安定し、目の前にはワイヤーフレームで描画されたような景色が広がっていた。既にゲートは、途方もない距離にまで遠ざかっていた。

「ついてきな！」

僕は走って鏡さんの後を追いかけた。

前方の地形が大きく隆起していく。“それ”は、次第に人の形を成していった。

「とうとう、ラスボスのお出ました」

女。四つん這いの超大な女が形成されつつあった。その姿は間違いなく、僕の母のものだった。

「全ての時間を圧縮し、全ての存在を否定しましょう」

母は口を上下に展開し、その下顎で地表を荒々しく削り取りながら、こちらへと這ってくる。僕たちは為す術も無く、母に喰われた。しかし、その体内には、また新たな世界が広がっていた。

投げ出された場所は、辺り一面の死の世界。腐臭、死骸、金切り声が、荒廃した大地を埋め尽くしていた。

地上から無限にも思われる数のゾンビたちが這い上がってくる。彼らは明らかに、僕の命を狙っていた。

「さあ、思いの丈をぶちまけな」

「けど、僕には武器が……」

鏡さんの黒衣が開かれる。その内側には、大量の銃火器が備え付けられていた。僕の手元に、一丁のライフルが渡された。

鏡さんがライフルを下に向け、リロードする。

「後ろは私がフォローするぜえ、ルーキー」

僕も銃をリロードし、周囲のゾンビたちに向かって連射した。

「好きなように振り回しやがって！ 僕はっ、お前のオモチャなんかじゃない！！」

倒れるゾンビたちを横目に、リロードを繰り返す。

「自分だけ不幸だと思ってんじゃねえ！！ 僕に頼るなっ！ 纏わりつくな！！」

ゾンビたちは不死であるがゆえに何度も蘇り、立ち向かってくる。倒れては起き上がり、撃ち抜かれては再生していった。

「ダメだ……手に負えない」

僕は、自分一人の限界を思い知った。

「一人でダメなときは、どうすんだっけ？」

背中合わせになった鏡さんが問いかけてきた。

「でも、もう彼らは……」

「まだいるじゃん。君を助けてくれた人たちが！」

僕は目を閉じ、記憶の海へと潜った。するとその中に、いくつもの人影が見えてきた。そうだ。まだ僕には、命の恩人たちがいた。数々の物語の中で、幾多の死闘を演じてきた英雄たち。勇者やその仲間、魔王やその手下までもが、僕の前に次々と姿を現していく。

僕は、彼らから受け取った、抱えきれないほどの感動を思い出した。一人で辛かったとき、いつも支えてくれた、頼もしい戦友たち。

「君たちがいてくれたから――」

彼らは強力な魔法や伝説の武器を駆使し、ゾンビの群れを殲滅していく。

「僕は今まで、生きてこられた――」

真ん中に、一本の道が拓かれた。

「ありがとう」

僕は一直線に駆けだした。

「今だ！ コアを！！」

上を見ると、天井にぶら下がった半透明の袋が見えた。中には胎児が入っている。

僕は銃口を、それに向けた。

「いい加減、オトナになれよおお！！！」

僕は走りながら銃を連射した。放たれた弾丸のうちの何発かが袋に命中し、胎児の悲鳴が聞こえた。

そして中から羊水と胎児の体液が溢れだし、激流となって、瞬く間に地上の何もかもを押し流していった。

僕は流れの中に吞まれながら、必死で意識を保とうとした。

まだ僕は死んじやいない。僕は、これから生まれるんだ。

次に目を開けた時、そこには広大な宇宙が広がっていた。無重力の空間で、僕は目の前のゲートに触れようと、懸命に手足を掻いた。

その想いとは裏腹に、ゲートとの距離はゆっくりと開いていく。僕は自分の無力さを悟り、抵抗を諦め、後ろ向きの慣性に身を委ねた。

「あと、ちょっとだったのになあ……そっか、これで終わりか……」

僕は、ある種の達成感を覚えながら、後ろへと流されていった。不思議と後悔の念は無かった。そして、眠るように目を閉じた。

しばらく流されていると、僕の背をそっと押す力を感じた。振り返ると、そこに魔導士がいた

「テラ……」

「お兄ちゃんには、いっぱい、やらなきゃいけないことが、あるでしょ。それに、兄妹がいつまでも一緒にいたら、おかしいもんね」

そうだ。彼らのことも忘れちゃいけなかった。僕の孤独を癒してくれた、大切な仲間たち。

「ありがとな……」

魔導士の力で、後ろ向きの慣性が相殺された。

また他の誰かの手が、背中に触れる。

「ヴェントス……」

「ただ事じゃないんだろ？ 仲間を助ける時に、迷う理由なんてないぜ」

僕は盗賊に背中を押され、ゲートまでの距離を少し縮めた。

「サンキュー」

彼らは彼らであり、その台詞を語ったキャラクターでもあった。

前から現れた僧侶に手を取られ、迎え入れられる。

「アクア……」

「照太さん……時々でいいから、思い出してください。私のような女の子がいたってことを……」

僕の体は、ゲートに手の届くところまで引き寄せられた。

「僕は、君たちに何度も救われた。絶対に、忘れないよ」

ゲートは今にも閉じようとしていた。あと少しだ。僕は最後の力を振り絞り、腕を伸ばした。

そして、勇者が現れた。

「イグニス……」

「覚悟を決めろ！ 他の誰でも無い……これは、お前の物語だ！」

僕は勇者から、力強い一押しを受け取った。

僕の体は加速度を上げていき、消えかけていたゲートの中へと吸いこまれていく――

そこで照太は目を覚ました。

冷たい水の中を、無我夢中で掻いていた。

暴れれば暴れるほどに足元を取られ、浴槽に張られた水を飲みこみ、ロープに首が締めつけられた。

起き上がろうとすると煙を吸いこみ、嗚咽した。

やっとのことでロープを外し、浴槽から転がり出ると、背中に練炭の焼き印が押された。

痛みに呻き、体をよじらせながらドアを開け、まるで打ち上げられた魚のように倒れこんだ。

そして、胃の中に溜まっていたドロドロの塊を吐き出した。

照太は泣き叫んだ。生まれたままの姿で、叫ぶがままに叫んだ。

エピローグ

【リアル】

授業の終わりを告げるブザーが鳴った。

生徒たちが立ち上がり、教室中が騒がしくなる。

「おい、コイツまた寝てんだけど」

「リア充だもんなー」

うっせ。

「これで成績トップ5なんだぜ？」

「マジかよ」

奨学金とるので必死なんだよ。

とは言わない。きっと嫌味に思われるし。タイミングを見計らって起き上がる。

「そうだ。今度の中間、睡眠学習をテーマにしてレポート書こう」

「あはは、ねーよ」

笑ってくれた。

「照太、今日サークル行く？」

「悪い、今日は用事あるから無理だわ。でも、明後日の会議には出るから」

「わかった言っとく。じゃ、またな！」

僕は右手を上げて答え、彼らは教室を出ていった。

あれから僕は通信制高校に通って高卒認定を取ったあと、約一年間死ぬ気で受験勉強をして、とある大学に合格した。正直、学費免除と奨学金が無いとやってけないから、成績には気を使ってる。

大学では、児童ボランティアサークルにも入り、何人かの友人もできた。我ながら、元コミュ障とは思えないほどのレベルアップだ。将来は高校の先生を目指してる。今のところは。

バイトは長期休暇にまとめて稼いだり、普段は圭さん一妹の旦那で、義理の弟（例のガテン系）一一の事務所で週二、三日ほど働かせてもらってる。

人よりも人生に出遅れた分、まだまだ失敗も多い。毎日毎日、劣等感というやつと戦ってる。でも、この劣等感の分だけ、自分には向上心があるということもわかった。これからは僕は、この焰と一緒に生きていこうと思う。

帰り道、用なんて無いのに、つい立ち寄ってしまう場所があった。良くないことだと思いながら、足が勝手に向かってしまう。いつも通り過ぎるだけ。決して中にまでは入らない。もう僕は、ここを卒業したんだ。

ところがこの日は“偶然”白衣のお姉さんと出くわした。

「照太くん？ 久しぶりー」

相変わらず右手にカップラーメン、左手にコンビニ袋を提げていた。

「またそんなの食べて。ちゃんと栄養摂らないとダメですよ」

「いーの。私は朝と夜で調整してるから」

いい大人が、子供みたいに頬を膨らませていた。

――『あなたを救ったのは、あなた自身だよ。だから、あなたが偉いんだよ』

最後のカウンセリングの時に言われた言葉だ。それでも僕にとって、鏡さんが特別な人であるのに変わりはない。

「お母さん元気？」

「はい、だいぶ落ち着いて」

半年間のカウンセリングと投薬効果などのおかげで、僕の不安定さは一般人レベルの閾値にまで収まった。母子ともども、鏡さんや、精神科の先生には大変お世話になった。

「大学で、心理の授業とってるんです」

「へえー。そうなんだー」

だけど時々、鏡さんに会いたくなる。全身が包まれるような居心地の良さに、甘えたくなる時がある。

きっと鏡さんは、僕のそんな想いに気付いてる。だから、ジリジリと距離を離そうとしているのが、伝わってくる。

しばらく会話に空白が生まれた後、とうとうその時が訪れた。

「『別れは終わりではない……』」

恭しく発せられたその台詞が、僕の心臓を貫いていった。

鏡さんは意味深に目を伏せて、じっと僕の言葉を待っている。

僕は無意識のうちに、台詞の続きを繋げていた。

「とこしえに想うことこそ、共にあるということなのだ』」

鏡さんは、してやったりという無邪気な顔で笑った。

きっと、この展開を待っていたのかもしれない。まったく、ズルい人だ。

「バイバイ！」

鏡さんは子供のように大きく手を振っていた。

僕が右手を上げてそれに応えようと、彼女は建物の中へと帰っていった。僕は温かい余韻に浸りながら、その光景を胸の内に焼き付けた。

「ひっさしぶりい！」

待ち合わせをしていた居酒屋まで足を運ぶと、後ろから何者かに襲われた。彼は声変わりをして、背も伸びていた。でも、中身は何も変わっちゃいない。

「颯真！」

ある日SNSを見たら、颯真からのメッセージが来ていた。お互い懐かしさで盛り上がり、約

十年ぶりに会うことになった。

話を聞くと、転校したあとは父方の実家に引っ越したらしい。なんでも父親が家業を継いで、前よりも良い暮らしになったとか。颯真には罪悪感があったから、それを聞いて安心した。

「で、いまは何してるの？」

「専門通ってる。オレ、将来ゲーム作るんだ！」

こちらが恥ずかしくなるくらいに、その目は輝いていた。

「ショータ、変わったよな」

「えっ……そう？」

「うん。なんか話しかけやすくなった」

つくづく思う。死なないで良かった。二人とも。

翌日の朝、僕は剣道場に立っていた。

「まだまだあ！ もっと声出せよお！！」

「めええええん！」

精一杯の声に、弱々しい足取りで、可愛らしい打突が繰り返された。昔、自分がしてもらったように、今度は僕が小さい子の面倒を見ていた。

「まったく、最近の若者は……」

そう毒づいた矢先、背後から、ただならぬ気配を感じた。

「どれどれ、ワシにも手ほどきしてもらえんか？ センセイ殿」

「えっ……」

振り返ると、防具を身に付けた金居先生が、こちらに竹刀を構えていた。

「ひいやあああああ！！」

怒涛の連続攻撃が冴えわたる。僕は、その攻撃を捌くだけで精一杯だった。

「ほおおぎやあああああ！！」

一撃一撃が、重い。こんな細い体の、どこからそんな馬力が出てんだよ。

「どあ⊕ま え ∠∩\$いああああ！！」

もはや、何て言ってるか不明。人間というよりも、むしろ鬼に近かった。

「ふんっ、最近の若いもんは……」

ようやく解放された頃には、体中が憔悴しきっていた。十分にも満たないであろう時間が、一時間にも二時間にも思えた。このお爺ちゃんが生きてるうちに、勝てそうな気がしない。

「今日はハンバーグな」

「はい」

あれから僕は家を出て、先生の家へと転がりこんだ。交渉の結果、学生の内は無償で衣食住の面倒を見てくれるということになった。

——『お前がどんな道を選ぼうと構わん。人の道を外れない限りな』

母もここまで追ってきたが、先生の雷が落ちて追い払われた。それが薬になったのかどうかは知らないが、以前よりも母との距離を保てるようになったのは事実だ。母は現在、一人で何とかやっている。

始めのうちは会話すら出来なかった不穏な同居人たちとも次第に打ち解け、一緒にゲームする関係にまでなった。彼らも本心では人と繋がりがかったんだらう。そのやり方がわからなかっただけだ。

「いっけね……時間だ」

僕は急いで鞆を掴んで寮を出て、ヘルメットをかぶり、外に停めていたバイクを走らせた。もう既に、約束の時間は過ぎていた。

待ち合わせ場所の駅前ロータリーに、彼女は立っていた。

「悪い、遅くなった」

「二十分遅刻。イケメンだったら何しても許されると思うなよ」

「いやいや」

まさか自分がトン子と付き合うことになるなんて、昔の僕に言ったら信じてもらえなかっただらう。それに彼女の目には、僕の顔がイケメンに映っているらしい。物好きもいたもんだ。

ご機嫌斜めな彼女に、ヘルメットを渡す。

「安全運転で、ブッ飛ばして」

「矛盾してない？」

「いいから走れよ！」

「はいはい」

――『先輩、甘え方がヘタクソですよ。私で練習してください』

朋子には、自分が病んでいた時、たくさん支えてもらった。何度突き放しても、何度暴言を吐いても、しぶとく関わり続けてくれた。忠犬として、彼女の恩義に報いたい所存である。が、気が付けば完全に尻に敷かれていた。

目的のスタジオに到着し、連絡にあった部屋のドアを開けた。

「すまん！ 遅れた！」

「知ってる」「遅えよ」「死刑！」

色とりどりの髪の毛に、黒づくめの服を着た男たちが待っていた。

「後でキツク言っときますので……あっ、これ今度のやつね」

朋子が中に入り、手に持っていた対バンライブのポスターを広げた。

そう。僕は彼らのバンドに入っていた。音楽性の違いを理由に脱退したメンバーの穴埋めで。

「俺、手持ちのチケは捌いたよー」

「出たよ、ハーレムネットワーク」

「君たちの分も捌いてやろうか？」

この、銀髪が似合う、無類の女好きに捕まったんだっけ。

「ホント？　じゃあ、あと二十枚いける？」

「いや、それはちょっと……」

朋子がマネージャーとして、バンド活動を仕切っていた。リーダーの壮馬には適性が無かったらしい。彼女はスケジュール調整やライブ会場とのやり取りを始め、物販、宣伝、資金管理に至るまで、一人で何でもこなしている。

「本番まであと二回しか練習できないんだから、気合い入れてよー」

「はい」「ういー」「御意！」

ここには、本気で頂点を目指して走っている仲間がいた。始めのうちは、彼らの正気を疑った。そんなこと、無理だと思った。

――『敵が強えから、倒しがいがあるんだろ？』

壮馬の言葉に突き動かされて、ここまでやって来た。まだまだ越えなきゃいけない壁は、たくさんある。それでも、全力を出しきる中で得られる感動は、何物にも代え難かった。

僕は力尽きるまで、彼らと一緒に、駆けていこうと決めた。

ライブ本番の日。

共同使用の楽屋は、白塗りの男たちで溢れかえっていた。

燃えるような赤い髪のウィッグを付け、スイッチが切り替わる。

「さあ、出番だよ」

舞台に出る。歓声が上がる。逆光に目を慣らす。

音響のチェックもそこそこに、ドラムの合図で演奏が始まる。

今日は喉の調子が良い。客もノッてる。やりやすい。

なんとか三曲目を終えたところで、壮馬のMCが入る。

「どーもー、Dark Knightsでーす。はじめましての子もいるから、メンバー紹介していくねー。ま
ず俺、Gt.Umbra！」

薄暗がりの中に一人、見覚えのある顔を見つけた。

いや、きっと人違いだろう。似たような顔の子は、大勢いるさ。

「そしてー、Vo.Ignis！！」

あの子は今も、どこかで生きているのだろうか。どうか、生きていてほしいと、願う。

「えー？　なにになにー？　今日は新曲があるんだってー？」

会場が揺れた。

壮馬はわざとらしい身振りで、こちらに耳を傾けている。

「この曲は、俺が孤独に殺されかけた時の記憶、己の無力さに絶望した人間の物語だ」

もう幻想はいらない。俺は、俺の現実を生きる。

「聞いてくれ、『幻想リアリスト』」

Featuring

作品中、以下の作品群から設定・台詞
などを引用（一部改変）しました。

『ドラゴンクエスト』シリーズ

『ファイナルファンタジー』シリーズ

『テイルズ オブ』シリーズ

『イース』シリーズ

『ゼルダの伝説』シリーズ

幻想リアリスト

<http://p.booklog.jp/book/99469>

著者：光レトリバー

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hikariretriever/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99469>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99469>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ